

京都府遺跡調査概報

第 23 冊

1. 長岡京跡（立会調査）
2. 木津川河床遺跡
3. 栗ヶ丘古墳群
4. 尊勝寺跡
5. 長岡京跡右京第 240 次
6. 八ヶ坪遺跡第 2 次
7. 長岡京跡左京第 160 次
8. 田辺城跡第 9 次

1987

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

当調査研究センターが、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施するようになって、早や6年が過ぎようとしています。私達は、常により精密な調査を心掛け、より正確な記録を作成し、これらを後世に伝えるため、日夜努力しているつもりであります。そしてその手段の一つとして、「京都府遺跡調査概報」を年度毎に刊行しているほかに、「京都府埋蔵文化財情報」や、「京都府遺跡調査報告書」を刊行しています。

昭和61年度においては、当センターでは41か所の発掘調査を実施しましたが、本書では、その内7か所の遺跡の調査概要を報告します。そして他の遺跡の調査については、さらに数冊の冊子にまとめています。

本書を含めて、これらが関係各位の参考に供され、斯学向上の一助となれば幸いです。本書に掲載した各調査を実施するにあたりましては、発掘調査の契機となりました事業関係者をはじめ、京都府教育委員会・各市町教育委員会等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく、酷暑・極寒の中でも多くの方々が熱心に作業等に從事していただきましたことを明記して、これらの方々に厚くお礼申し上げます。

昭和 62 年 3 月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 長岡京跡(立会調査) 2. 木津川河床遺跡 3. 栗ヶ丘古墳群
4. 尊勝寺跡 5. 長岡京跡右京第240次 6. 八ヶ坪遺跡第2次
7. 長岡京跡左京第160次 8. 田辺城跡第9次

を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調査期間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 長岡京跡(立会調査)	大山崎町下植野、向日市物集女	昭61. 10. 23 } 昭61. 10. 24 } 昭61. 10. 29 } 昭61. 10. 30	京都府乙訓土木事務所	辻本 和美
2. 木津川河床遺跡	八幡市字八幡一丁目・源野・焼木ほか	昭61. 5. 26 } 昭61. 12. 28	京都府土木建築部	岩松 保
3. 栗ヶ丘古墳群	綾部市小呂町・高倉町・多田町	昭61. 5. 6 } 昭61. 12. 20	京都府企業局	引原 茂治
4. 尊勝寺跡	京都市左京区岡崎西天王町93-2	昭61. 9. 1 } 昭61. 11. 30	京都府土木建築部住宅課	水谷 寿克 竹原 一彦 森下 衛 土橋 誠
5. 長岡京跡右京第240次	長岡京市井ノ内朝日寺11	昭61. 9. 11 } 昭61. 11. 26	京都府教育委員会	石尾 政信
6. 八ヶ坪遺跡第2次	木津町相楽字八ヶ坪	昭61. 8. 20 } 昭61. 12. 12	建設省近畿地方建設局	松井 忠春
7. 長岡京跡左京第160次	向日市森本町佃ほか	昭61. 10. 18 } 昭61. 11. 30	京都府乙訓土木事務所	竹井 治雄
8. 田辺城跡第9次	舞鶴市北田辺小字追手前	昭61. 10. 29 } 昭61. 11. 8	建設省近畿地方建設局	小山 雅人

3. 本冊の編集には、調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1. 長岡京跡昭和61年度立会調査	1
2. 木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要	5
3. 栗ヶ丘古墳群昭和61年度発掘調査概要	23
4. 尊勝寺跡発掘調査概要	37
5. 長岡京跡右京第240次発掘調査概要	65
6. 八ヶ坪遺跡第2次発掘調査概要	73
7. 長岡京跡左京第160次発掘調査概要	83
8. 田辺城跡第9次発掘調査概要	91

挿図・付表目次

長岡京跡立会

付表 1	立会調査か所	1
第 1 図	長岡京跡立会調査位置図	2
第 2 図	下植野地区立会調査範囲	3
第 3 図	物集女地区立会調査範囲	3
第 4 図	土層柱状図	4

木津川河床遺跡

第 5 図	調査トレンチ配置図(昭和57~61年度)	6
付表 2	木津川河床遺跡調査次数一覧	7
第 6 図	JN地区検出遺構平面図(1)(第Ⅰ面)	8
第 7 図	JN地区検出遺構平面図(2)(上:第Ⅱ面 下:第Ⅲ面)	9
第 8 図	2P地区検出遺構平面図(1)(Ⅰ-1面)	10
第 9 図	2P地区検出遺構平面図(2)(上:Ⅰ-2面 下:Ⅱ面)	11
第 10 図	2P地区検出足跡実測図(1)(上層分)	12
第 11 図	2P地区検出足跡実測図(2)(下層分)	12
第 12 図	ET2-2トレンチ遺構配置図	14
第 13 図	出土遺物実測図	15
第 14 図	集落分布推定図	17
第 15 図	表採資料実測図	19
付表 3	出土遺物観察表	20
付表 4	表採土器観察表	21

栗ヶ丘古墳群

第 16 図	調査地位置図	24
第 17 図	栗ヶ丘古墳群地形図	26
第 18 図	7・8・9・11号墳地形図	28
第 19 図	9号墳主体部実測図	31
第 20 図	出土遺物実測図(1)	32
第 21 図	出土遺物実測図(2)	33

第 22 図	出土遺物実測図(3).....	34
--------	-----------------	----

尊勝寺跡

第 23 図	調査地位置図.....	38
第 24 図	調査地平面図.....	39
第 25 図	尊勝寺推定観音堂跡模式図.....	42
第 26 図	建物基壇地業石敷実測図.....	43
第 27 図	軒丸瓦拓影(1).....	46
第 28 図	軒丸瓦拓影(2).....	47
第 29 図	軒丸瓦拓影(3).....	49
第 30 図	軒丸瓦拓影(4).....	50
第 31 図	軒平瓦拓影(1).....	52
第 32 図	軒平瓦拓影(2).....	53
第 33 図	軒平瓦拓影(3).....	54
第 34 図	印刻・ヘラ記号拓影(1).....	55
第 35 図	印刻・ヘラ記号拓影(2).....	55
第 36 図	有段平瓦拓影.....	56
第 37 図	出土遺物実測図.....	56
付表 5	軒丸瓦個体数一覧.....	57
付表 6	軒平瓦個体数一覧.....	57
第 38 図	尊勝寺伽藍配置推定図.....	60
付表 7	六勝寺対照表.....	61

長岡京跡右京第240次

第 39 図	調査地位置図.....	65
第 40 図	調査地平面図.....	67
第 41 図	井戸 S E 24001 実測図.....	68
第 42 図	出土遺物実測図.....	70

八ヶ坪遺跡第 2 次

第 43 図	調査地位置図及び周辺遺跡分布図.....	73
第 44 図	調査地区割及び遺構全体図.....	74
第 45 図	第 3 調査区検出遺構実測図.....	76
第 46 図	須恵器杯身出土状況.....	77
第 47 図	第 4 調査区検出遺構実測図.....	78

第 48 図	出土遺物実測及び拓影図	80
--------	-------------	----

長岡京跡左京第160次

第 49 図	調査地位置図	83
--------	--------	----

第 50 図	トレンチ断面実測図	84
--------	-----------	----

第 51 図	トレンチ位置図	85
--------	---------	----

第 52 図	遺構実測図	87
--------	-------	----

第 53 図	S D06断面実測図	88
--------	------------	----

第 54 図	出土遺物実測図	89
--------	---------	----

田辺城跡第9次

第 55 図	城跡復原及び調査地位置図	92
--------	--------------	----

第 56 図	トレンチ東壁断面実測図	93
--------	-------------	----

第 57 図	出土遺物実測図	93
--------	---------	----

図 版 目 次

長岡京跡立会

- 図版第1 (1)下植野立会調査状況(北東から) (2)同上土層断面
図版第2 (1)下植野立会調査状況(北東から) (2)同上(南西から)

木津川河床遺跡

- 図版第3 (1)J N地区第I面検出遺構(北から)
(2)J N地区第II面検出遺構(北から)
図版第4 (1)J N地区S D07内検出柵列跡(南から)
(2)J N地区第III面検出遺構(北から)
図版第5 (1)2 P地区第I面検出遺構(南から)
(2)2 P地区第I・II面検出遺構(南から)
図版第6 (1)2 P地区第II面足跡検出状況(北から)
(2)2 P地区第II面足跡検出状況(北から)
図版第7 (1)2 P地区第II面検出遺構(南から)
(2)2 P地区第III面検出遺構(南から)
図版第8 (1)E T2地区第2トレンチ全景(東から)
(2)E T地区第2トレンチ検出遺構(東から)
図版第9 (1)中・近世日本製陶磁器 (2)中国製陶磁器

栗ヶ丘古墳群

- 図版第10 (1)2号墳全景(北から) (2)2号墳主体部棺検出状況(南東から)
図版第11 (1)3号墳第3主体部全景(北西から) (2)6号墳主体部全景(東から)
図版第12 (1)7号墳全景(南西から) (2)7号墳掘削後全景(南から)
図版第13 (1)7号墳第1主体部全景(西から) (2)7号墳第2主体部全景(東から)
図版第14 (1)7号墳周溝内遺物出土状況(東から)
(2)7号墳周溝内遺物出土状況(南から)
図版第15 (1)8号墳全景(北から) (2)8号墳掘削後全景(北から)
図版第16 (1)9号墳・8号墳(北西から) (2)9号墳全景(北から)
図版第17 (1)9号墳掘削後全景(北西から) (2)9号墳第1主体部全景(北西から)
図版第18 (1)9号墳第2主体部全景(西から) (2)9号墳S K02全景(北から)

- 図版第19 (1)13号墳主体部全景(北東から) (2)13号墳掘削後全景(北東から)
 図版第20 出土遺物(1)
 図版第21 出土遺物(2)

尊勝寺跡

- 図版第22 調査地全景
 図版第23 (1)調査前全景(東から) (2)建物遺構検出状況(東南から)
 図版第24 (1)第2トレンチ全景(南から) (2)拡張部全景(南から)
 図版第25 (1)建物遺構階段部(南から) (2)SX01瓦溜り(南から)
 図版第26 (1)F7礎石検出状況(南から) (2)G7礎石検出状況(南から)
 図版第27 (1)H7礎石・根石検出状況(南から)
 (2)H6礎石据え付け跡根石検出状況(北から)
 図版第28 (1)G6礎石据え付け跡根石検出状況(北から)
 (2)K8礎石据え付け跡根石検出状況(北から)
 図版第29 (1)建物基壇版築層断面(西から) (2)地業石敷(北から)
 図版第30 (1)SX06・07瓦溜り検出状況(東から)
 (2)SX03瓦溜り内瓦堆積状況(北から)
 図版第31 尊勝寺出土軒丸瓦
 図版第32 尊勝寺出土軒丸瓦
 図版第33 尊勝寺出土軒丸瓦・軒平瓦
 図版第34 尊勝寺出土軒平瓦

長岡京跡右京第240次

- 図版第35 (1)調査地全景 (2)調査地全景(東から)
 図版第36 (1)井戸SE24001(西から) (2)井戸SE24001井戸枠検出状況(南から)
 図版第37 (1)流路NR24002(北から) (2)流路NR24002・溝SD24003(東から)
 図版第38 出土遺物

八ヶ坪遺跡第2次

- 図版第39 (1)発掘前の調査地全景(北から)
 (2)調査地より奈良若草山を望む(北西から)
 図版第40 (1)第1調査区完掘状況(北から) (2)第2調査区完掘状況(南から)
 図版第41 (1)第3調査区完掘状況(南から) (2)第4調査区完掘状況(南から)
 図版第42 (1)第4調査区SD18・19検出状況(東から)
 (2)第3調査区各溝状遺構検出状況(東から)

図版第43 各種出土遺物

長岡京跡左京第160次

図版第44 (1)B・Cトレンチ全体(西から) (2)BトレンチS D06(南から)

図版第45 (1)AトレンチS D01(東から)

(2)AトレンチS D01検出状況(北から)

田辺城跡第9次

図版第46 (1)調査地遠景(南西から) (2)トレンチ掘削状況(南から)

図版第47 (1)落ち込み中央部東壁断面 (2)落ち込み南側東壁断面

図版第48 出土遺物

1. 長岡京跡昭和61年度立会調査

1. はじめに

今回の長岡京立会調査は、昭和61年度に実施された京都府乙訓土木事務所管内の街路道路事業に伴うものである。

立会調査は、同事務所の依頼を受け、当調査研究センター調査課主任調査員辻本和美・同調査員黒坪一樹が担当した。

今年度の立会調査か所は、向日市・大山崎町内の2地点である。道路敷きの工事か所という制約された範囲での調査であるため、現地での作業については掘削された土層の断面観察および遺構・遺物の有無等の確認が主なものである。なお、調査に当たっては必要に応じて重機の稼働を一時中断して土層断面図の作成・写真撮影等を実施した。

立会調査か所の所在地および調査期間については付表1の通りである。今回も調査の全般について各市町教育委員会および工事請負の業者の方々から多大のご協力を得た。それぞれの方がたに対し深く感謝の意を表したい。

付表1 立会調査か所

地図番号	路線名	所在地	工事延長(m)	調査期間
1	下植野大山崎線	大山崎町下植野	200	昭和61年10月23日～10月24日
2	榎原高槻線	向日市物集女	330	昭和61年10月29日～10月30日

2. 調査概要

(1) 大山崎町下植野地区

当地点は、大山崎町下植野の国道171号線から西側に入った道路に当たり、北西側で一段高くなる段丘状地形の縁辺部に位置する。前年度、道路北側部分の拡幅工事に伴い立会調査を実施しており、今回の調査はその南進工事に係る調査である。長岡京の条坊復原図では、西一坊大路が調査地を南北に縦貫する。また、当地点の南西約300mには縄文時代から中世に至る集落遺跡である宮脇・松田遺跡が所在する。

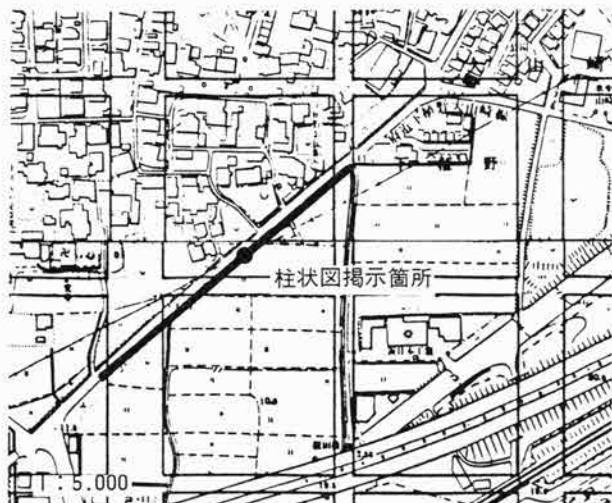
今回の工事による掘削部分は段丘面とは反対側の水田部分である。掘削部分の最大幅約6m、深さは現水田面から約1mを測る。重機によって掘り下げられた土層の断面観察によれば、水田面のすぐ下で青灰色粘土が現れ、以下、緑灰色シルト・暗青灰色粘土・黒褐色



第1図 長岡京跡立会調査位置図

粘土の層序で堆積する。前年度の工事は今回とは逆の段丘裾部に沿って行われたため一部で暗褐色の地山(洪積層)面が確認されたが、今回の立会調査においてはそれらは検出されず粘土層が広がるのみであった。青灰色粘土層以下の堆積状況は、当地がかつて池或いは

沼沢状の湿地であったことを示すものであるが、これについては工事関係者からも最近までこの付近に池が存在したということを知っており、調査の結果と符合する。なお、工事範囲の南端付近において砂層の一部堆積を認めたが、これらは水田造成以前の自然流路の氾濫跡と考えられる。今回の工事範囲からは特に遺構・遺物等は検出されなかった。

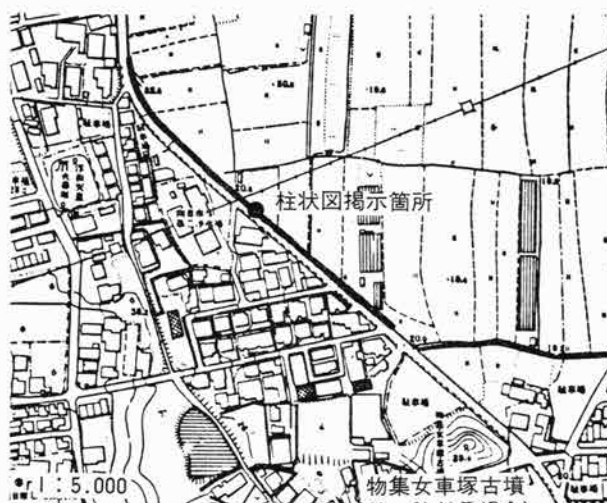


第2図 下植野地区立会調査範囲

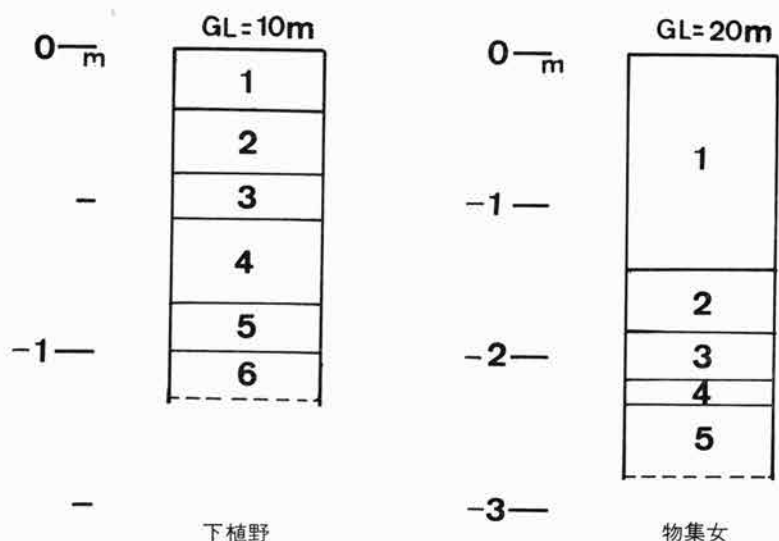
(2) 向日市物集女地区

椋原高槻線は、向日丘陵から南東方向に張り出す段丘状地形の縁辺部に沿って走っているが、今回工事に伴う立会調査か所も北から南に向かって緩やかに傾斜する地点に位置する。道路を挟み東西では約1.5m前後の段差があり、東側は水田面が広がる沖積平野となる。周辺の遺跡としては、今回調査か所の南端部に物集女車塚古墳が立地しており、また弥生時代から中世の遺物が出土する中海道遺跡の一面に含まれる。

今回の工事は現道路の法面を削る形で行われ、掘削部分の幅は約3.5mを測る。工事中における土層断面の観察では、現在の道路面下約1.45mまで盛土による造成が行われており、その下面で旧の耕作土(暗褐色土)が現れる。耕作土以下は、暗灰褐色粘質土層、暗茶褐色粘質土層、黄灰青色粘質砂層の順に堆積する。このうち暗茶褐色粘質土層中には泥炭状の有機質が帯状に堆積していた。旧耕作土下の暗灰褐色粘質土は長岡京周辺の



第3図 物集女地区立会調査範囲



- 下植野 1. アスファルト舗装面 2. 黒褐色土(置土+耕作土) 3. 青灰色粘土
 4. 緑灰色シルト 5. 暗青灰色粘土 6. 黒褐色粘土
- 物集女 1. 盛土 2. 暗褐色土(旧耕作土) 3. 暗灰褐色粘土
 4. 暗茶褐色粘土(泥炭含む) 5. 黄灰青色粘土質砂層

発掘調査においては、しばしば中世の遺構が検出されることが多いが、今回の工事範囲からは同時期に属するような遺構または遺物は確認されなかった。また当地点では道路面下約2.5m近く掘り下げた付近で湧水を見たため、掘削の深いか所においては土層の観察が十分にできなかった。遺物についても、工事によって掘り上げられた土砂の中からも確認することはできなかった。

3. 結 語

今回の立会調査地は長岡京域の南と北に偏在しているが、両地区とも段丘性地形の縁辺部という共通した地形に立地している。調査の結果、今回の工事範囲内ではいずれも遺構・遺物等は検出されなかったが、丘陵裾から平野部に至る地形の様相の一端を窺うことができた。立会調査は通常の発掘調査に比べ地味ではあるが、これらの記録の積み重ねが今後周辺地域での発掘調査に寄与するものと思われる。

(辻本和美・黒坪一樹)

2. 木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要

1. はじめに

京都盆地の南方、石清水八幡宮が鎮座する男山の北側眼下、桂川・宇治川・木津川の三川が合流する地帯は、旧巨椋池周辺をも含めて、河川を利用した交通の要所であるとともに、古来より低湿地生活が栄えた所でもあった。昭和16年に始まる旧巨椋池の干拓事業は広大な水田へと変貌せしめた。近年、周辺地域の都市近代化は、その一方では多くの他都市同様に下水道処理施設の完備・充実の必要性をもたらした。京都府は、諸条件を満たすこの地を選定し、大規模な下水道処理施設(『京都府洛南浄化センター』)を建設する計画を立て、毎年着々とその建設が押し進められている。

この地は、京都南部で最大規模を誇る低湿地遺跡である木津川河床遺跡に含まれるために、建物建設工事に先立ち、昭和57年度から本遺跡の調査を実施して^(註1)きた。その結果後述するように、多くの考古学的知見が得られ、その重要性は日増しに高くなっている。

調査は、事業主体者である京都府下水道課の依頼を受け、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが担当・実施し、今年度も3か所の試掘・発掘調査と、それに並行して立会調査も合せ行った。現地調査は当調査研究センター調査課主任調査員松井忠春、同調査員岩松保が担当した。また長期間にわたって多くの学生諸氏から援助を得た。^(註2)謝意を表する。

(松井忠春)

2. 調査経過

木津川河床遺跡の発掘調査は、同遺跡内での洛南浄化センターの諸施設の建設に伴い、昭和57年度から各年度毎に行われている。今までの調査では、古墳時代後期の集落跡・中世の素掘り溝・弥生時代以降の各時代にわたる遺物が確認されている(第5図・付表2参照)。今年度は、重力式濃縮棟(以下「JN」と略記)^(註3)、第2ポンプ棟(同「2P」)、エアレーション・タンク棟(同「ET2」)の建設予定地内の発掘調査及び試掘調査を行った。

JN区は5月23日に着手し、約300m²の発掘調査をして、8月7日に作業を終了した。2P地区は7月5日より9月13日まで約325m²の試掘調査を行った。ET2地区では9月8日に試掘調査(約700m²)に着手したが、後述のように弥生時代の集落跡が包蔵されていることが判明した。そこで11月13日に府教育委員会・府下水道課と協議を行い、約650m²の

拡張をして本調査を実施し、昭和62年2月24日にすべての作業を終了した。

調査方法は、昨年度までの調査成果に鑑て、各調査地とも、まず重機で地表下1.5~2.0mの中・近世相当面までを掘削した後、手掘り作業に切り替えて、無遺物層に至るまで、順次遺構の検出を繰り返した。各調査地は昨年度と同様、国土座標の東西・南北に合わせ5m間隔の調査区割りを行った。各ラインは南北方向に数字、東西方向にアルファベットを付し、各交点の南東にあたる5×5mの区画を表示することとした。ただし、各調査地の区割り名は任意につけたものであり、相互に関連を持たない。各調査地のポイントの国土座標は、

JN地区 5E (X=-123,615, Y=-26,310)

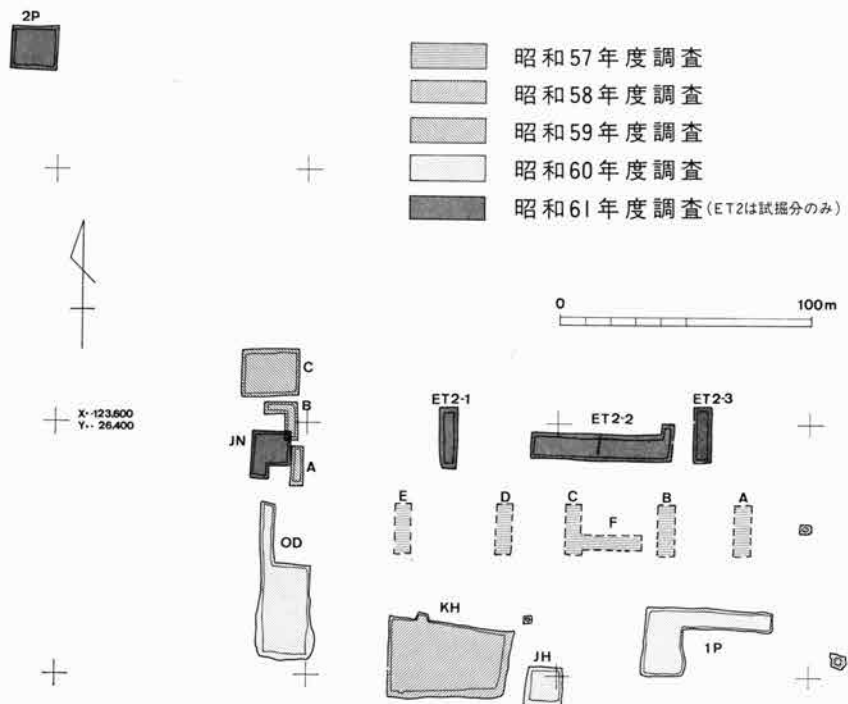
2P地区 4E (X=-123,460, Y=-26,405)

ET2地区 6H (X=-123,610, Y=-26,160)

である。

なお、ET2地区の調査は、整理作業がほとんど行われていないので、今年度の報告はJN地区・2P地区の試掘調査分までとし、ET2地区の調査成果は来年度に報告したい。

(岩松 保)



第5図 調査トレンチ配置図(昭和57~61年度)

3. 調査概要

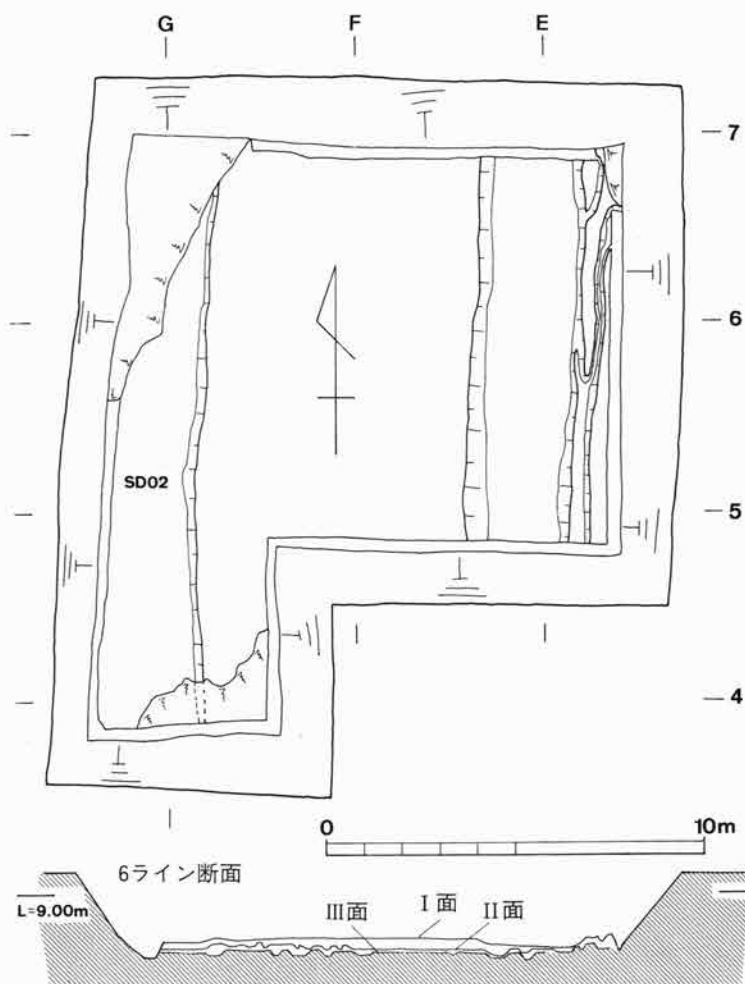
(1) JN地区の調査 この調査地は、昭和59年度調査のA・Bトレンチに隣接している。ここでは、今まで確認されている古墳時代(後期)の集落の北西部にあたり、それに関連する遺構・遺物が確認されることが期待された。この調査区では3面にわたって調査を行ったが、各調査面とも南北走する中世の素掘り溝が確認されたのみである。なお、調査地の東北部・西北部・南部は、既設の建物の建設等により若干の攪乱を受けていた。

この調査地の土層基本層序は、工事用盛土(50cm)―水田耕作土(10cm)―暗灰褐色土(10cm)―灰褐色粘質土(15cm)―褐色粒混灰褐色粘土(15cm)―褐色粒混黄褐色粘質土(10cm)―褐色粒混青灰色粘土(65cm)―淡青灰色砂質粘土(5cm)―鉄分混青灰色粘土(20cm)―鉄分混淡青灰色粘土(10cm)―暗青灰色砂(25cm)―黄色砂である。以上が基本であるが、一部、暗青灰色砂層の上面では、Eラインより東側に暗青灰色粘土等の粘土層が約60cmの厚さで堆積している。

OD地区・KH地区の古墳時代後期の竪穴式住居跡の検出高であるL=8.80mの高さまでを重機により掘削した。そして、その直後に、人力によって水平に仕上げ検出した遺構面が第Ⅰ面である(第6図・図版第3-1)。この面では、SD02など幅広の溝が検出さ

付表2 木津川河床遺跡次数調査一覧

調査次数	調査年度	トレンチ名	概要
I	昭和57年度	A～E	各トレンチより土器片出土。特にC・Dトレンチで弥生時代後期の土器片を多数検出。
II	昭和58年度	KH	古墳時代後期の竪穴式住居跡10棟、掘立柱建物、柵列、土壇を検出。他に古墳時代初頭の土器溜、中世素掘り溝。
III	昭和59年度	C	古墳時代前期を上限とする掘立柱建物、中世素掘り溝。
		A・B	南北走する中世素掘り溝。
IV	昭和60年度	OD	古墳時代後期の竪穴式住居跡3棟、同前期の土壇、中世素掘り溝を検出。
		JH	古墳時代後期の竪穴式住居跡1棟、土壇、流路、中世素掘り溝、掘立柱建物。
		1P	弥生時代後期の土壇、溝及び中・近世の素掘り溝を検出。



第6図 JN地区検出遺構平面図(1)(第I面)

れた。SD02は、壁面の土層観察によるとL=9.4~9.5mの褐色粒混青灰色粘土層上面より掘りこまれている。実際の深さは、80~90cmを測るが、その大半を重機掘削によって削平していて、検出高は20cm前後である。その他の小溝は、壁面が攪乱部に当っており、どの層位より掘り込まれているかは不明である。

第II面は、第I面より20~30

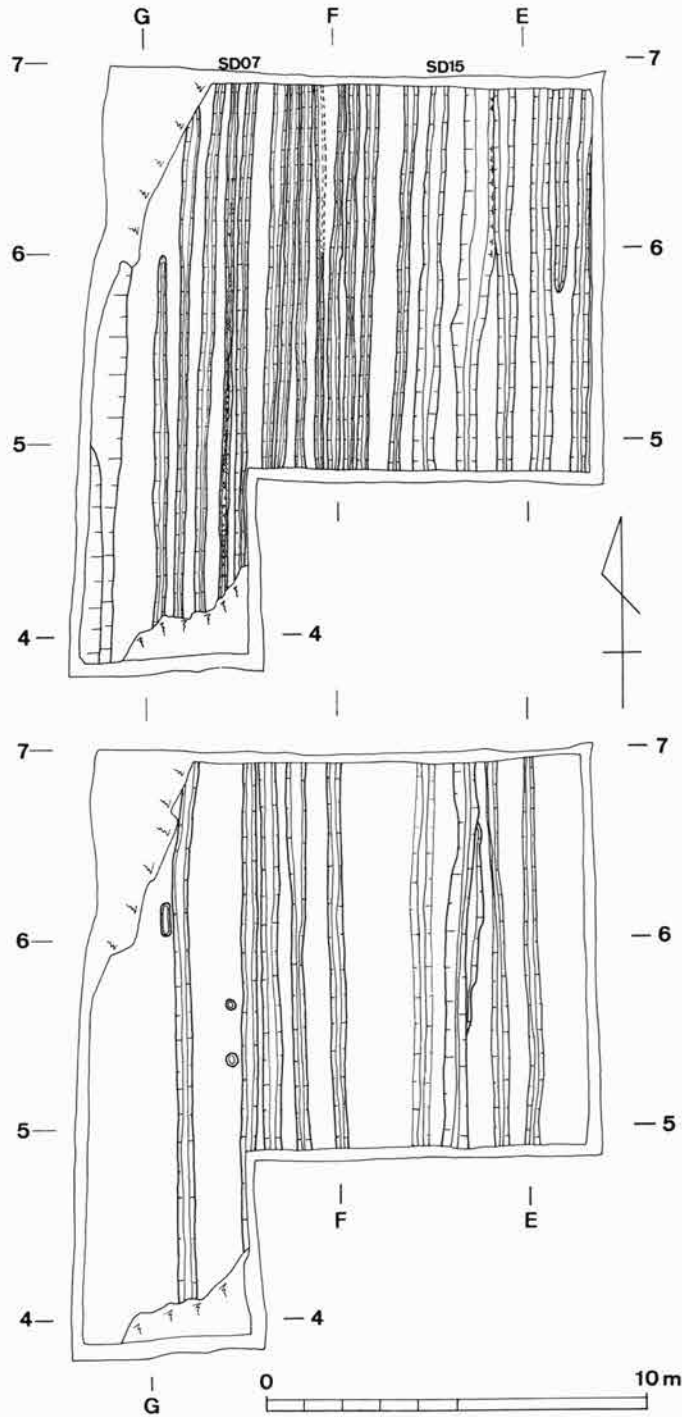
cm掘り下げて、鉄分混青灰色粘土層上面で検出した遺構面である(第7図・図版第3-2)。検出面の絶対高は、L=8.55~8.60mを測る。南北方向の素掘り溝群を検出したが、調査地の西半と東半ではその規模が多少異なる。SD15より東側で検出した6本の溝は、幅40~50cm・深さ15~25cmであるのに対して、西側のものは幅25~30cm・深さ10cm内外と小規模である。これらの溝が、畑作に関連する遺構であるとするならば、作付け作物の違いや、耕作者・所有者の違いを反映しているのかもしれない。さらに、SD07の溝底より径約10cm・深さ数cmの杭列状の小ピット列を検出したが、これは、地境い溝的な性格が想定される(図版第4-1)。

第III面は、鉄分混青灰色粘土層(約15cm)を除去して、暗青灰色砂層・鉄分混淡青灰色粘土層上面で検出した(第7図・図版第4-2)。これらの溝の規模は・幅40~50cm・深さ15

～30cmである。

(2) 2P地区の調査
 2P地区はJN地区の北西約200mに位置しており、今までに発掘調査がなされていないところである。ここでは三面六期にわたる調査を行った。検出した遺構は、中・近世の東西・南北走る素掘り溝、畦畔状遺構、柱穴、人や牛の足跡などがある。各遺構の時期認定が困難であったこと、遺構の検出が難しかったことから、実際の調査方法・順序と以下の記述・実測図とに異同があることを断っておく。記述は、同一時期と認められる遺構群毎に進めていきたい。便宜上、上面から下面にⅠ～Ⅲを付し、さらに小番号をうって表す。

地表の高さはほぼL = 10.0mで、約1.5mを重機により掘削した。L = 8.5mより下の基本層序をみみると、ほぼ8.5mの高さで、淡緑色粘質土(20cm) — 白砂混淡青灰色砂質粘土(5cm) —



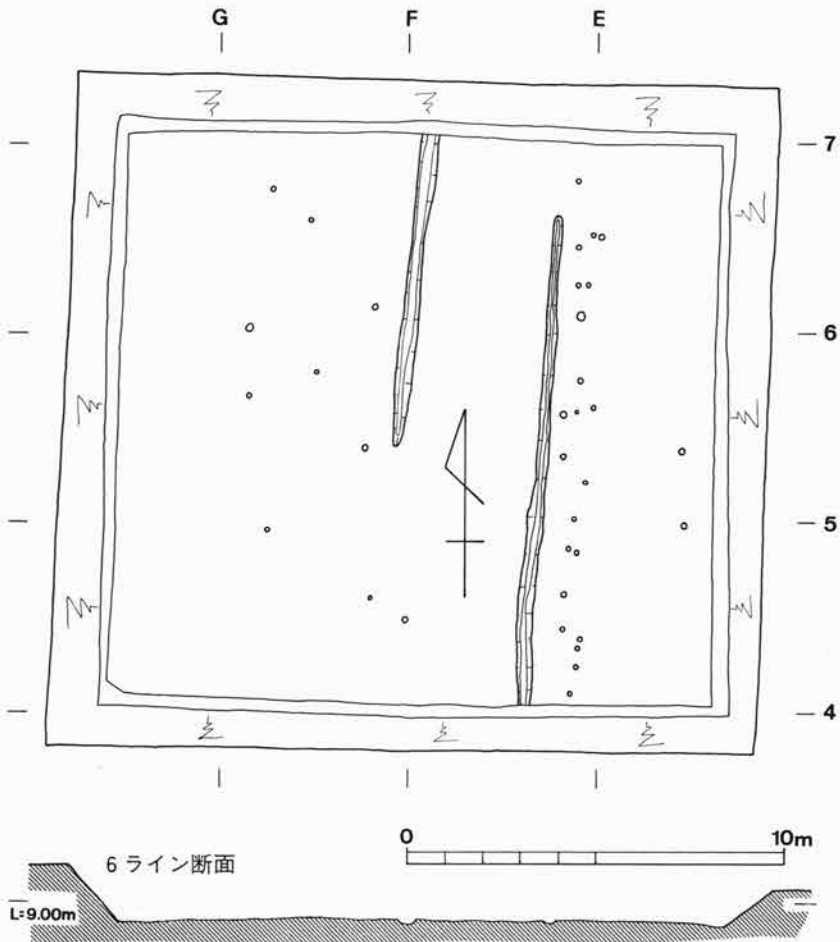
第7図 JN地区検出遺構平面図(2)
 (上:第Ⅱ面 下:第Ⅲ面)

鉄分混青灰色粘土(10cm)一褐色混青灰色粘土(10cm)一茶褐色混青灰色粘土(10cm)一暗茶褐色粘土(20cm)で、無遺物層に至る。調査を行ったところは、淡緑色粘質土層中(I-1), 同下層(I-2), 鉄分混青灰色粘土層上面(II), 暗茶褐色粘土層上面(III)である。

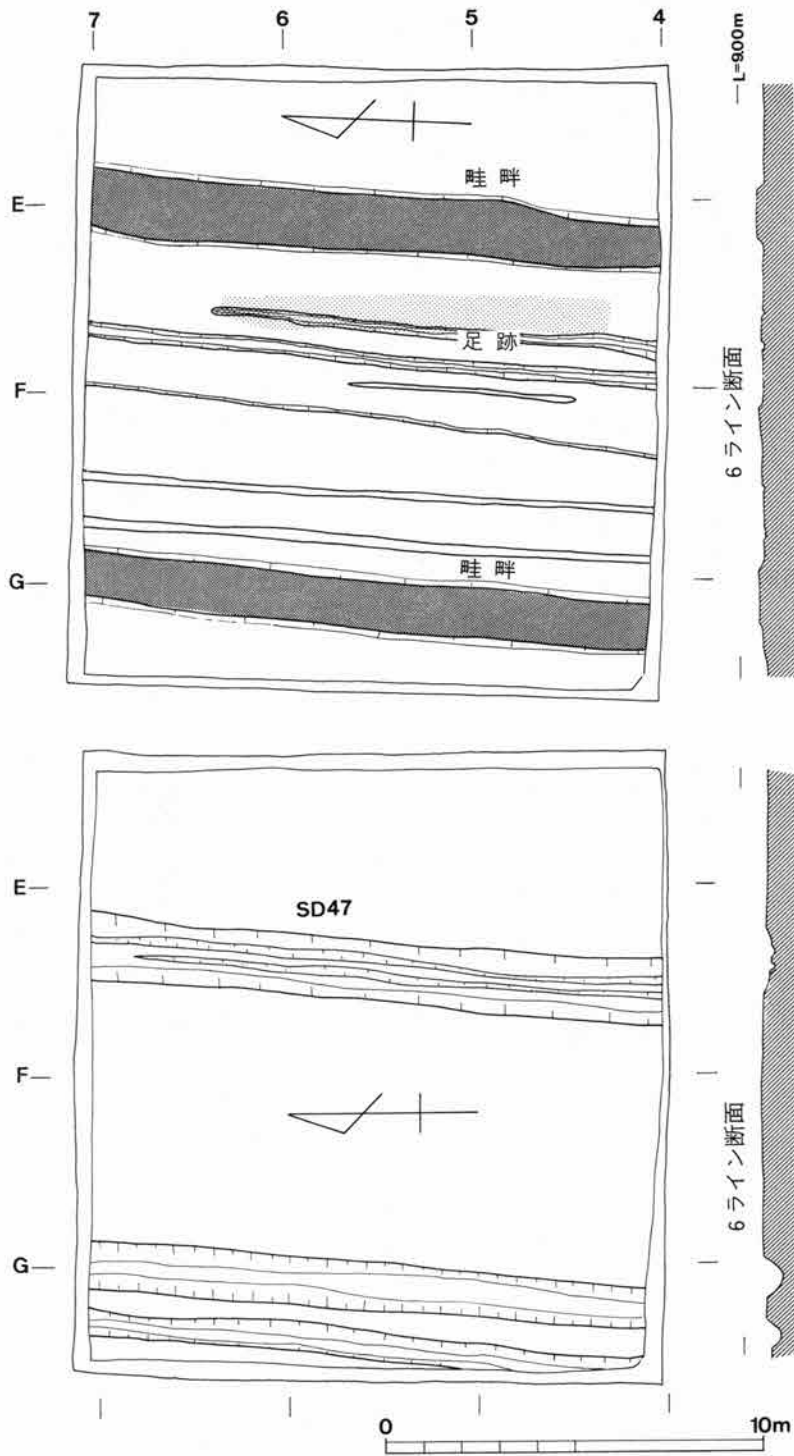
I-1面は重機掘削直後で検出したものである(第8図・図版第5-1)。2本の南北走る溝と小ピット群を検出した。溝は幅25~35cmで、3.8mの間隔で平行している。小ピットは径10cm・深さ10cm程度のものである。

淡緑色粘質土は畦畔状遺構の間を覆う埋土で、これを取り除いたところがI-2である(第9図)。畦畔状遺構とそれに伴う南北溝6本を検出した。この畦畔状遺構は壁面観察では高さ30cmを測るが、大半が削平されており、検出高は約10cmである。畦畔状遺構の間は8.8mを測る。平坦面の素掘り溝は、幅5~30cm・深さ5~10cmである。

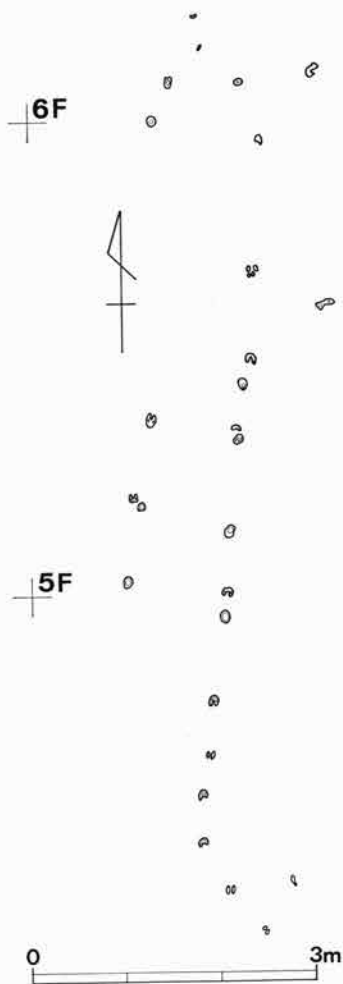
この畦畔状遺構の上に東西方向の素掘り溝を多数検出したが、淡緑色粘質土を切り込ん



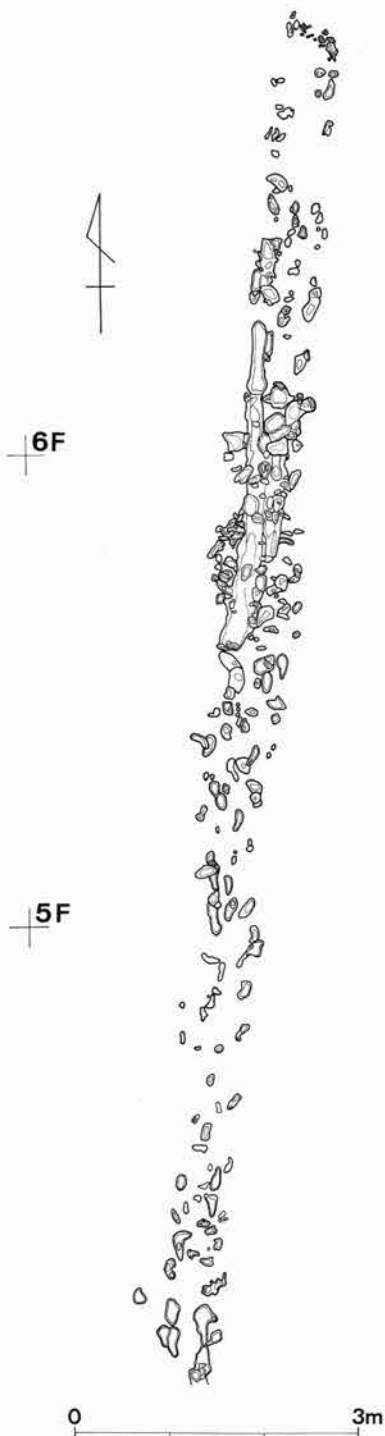
第8図 2P地区検出遺構平面図(I-1面)



第9図 2P地区検出遺構平面図(2)(上: I-2面 下: II面)



第10図 2 P地区検出足跡実測図(1)(上層分)



第11図 2 P地区検出足跡実測図(2)(下層分)

でないことから、畦畔状遺構より古いものである(Ⅰ-3)。

Ⅱ面は、畦畔状遺構を取りはずした面で検出した遺構面である(第9図・図版第7-1)。素掘り溝3本を検出した。ここでは、SD47の上面及び中層で人・牛と判断される足跡を検出した(Ⅱ-1・2 第10図・図版第5-2, 6-1・2)。下層のものは、Fライン近辺でその形が崩れているが、これはこの位置で「噴砂」^(注4)の地割れがあり、それによって壊されていたためである。また、この地点の足跡の埋土は、噴砂である黄色砂が入り込んでいた。

Ⅲ面は、Ⅱ面を約30cm掘り下げて検出した素掘り溝群である(図版第7-2)。すべてで、20数本を検出したが、幅30~70cm・深さ10~20cmの南北方向の溝である。

このⅢ面のある暗茶褐色粘土層は、断ち割ったところ、数点の遺物があった。しかし、この調査地全体の出土土器の種別から推し測ったところ、中世以降の素掘り溝以外の遺構が包蔵されている可能性は低く、壁面観察でも顕著な遺構は確認されなかった。この暗茶褐色粘土より下層からの土器の出土は無い。

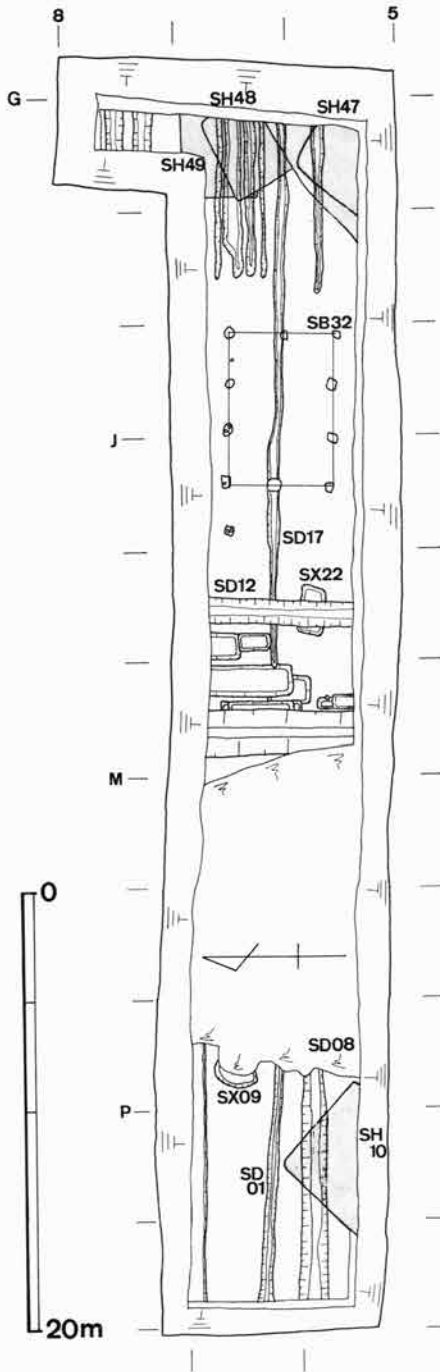
(3) ET2地区の調査 調査経過の項で述べたように、この調査区は試掘調査の後、本調査を行ったが、整理が十分に行われていないため、ここでは、試掘調査の成果のみを概述することに留める。

開発予定地が5,000m²と広大なため、昭和57年度のA~Fトレンチの調査成果をもとに3本のトレンチを設定した。B・C・Fトレンチで弥生土器がまとまって出土したことから、この北側に10m×55mのトレンチを東西方向に配した。また、A・Bトレンチ、D・Eトレンチのそれぞれの中に相当する北側に、7m×25mの2本のトレンチを設定した。この3本のトレンチ調査により、遺構・遺物の広がりや推定されるものと考えた。トレンチは西から1~3の番号を付した。

第2トレンチの試掘調査は、二面にわたって調査を行った。上面で検出した遺構は、主として東西走する中世素掘り溝であり、下面で検出した遺構は、掘立柱建物跡、弥生時代後期~古墳時代初頭の竪穴式住居跡、流路がある(第12図)。Kラインより西は、重機掘削時ではほぼ地山に達して、弥生時代~中世の遺構が同一面にあった。

SH10は調査地の西南部で検出したもので、埋土内に多量の土器片が「投棄」された状況で検出された。住居の一隅と二辺のみの検出であるが、方形竪穴式住居跡と推定される。出土土器から、弥生時代後期~庄内式併行期のものといえる。

SH47・48・49は調査地の東端で検出した方形竪穴式住居跡群である。調査地の壁に沿って設けた排水溝を利用した土層観察によると、検出面から約35cmの壁高を有する。これらの住居跡は重複関係を有し、その切り合いから先後関係をみると、SH47→48→49の



第12図 E T 2-2 トレンチ遺構配置図

順に新→古となる。弥生時代後期の土器片が埋土から出土する。

土塚(墓)群はSD12より西側、5・6-M・L地区で検出した。0.5m×1m から1.5m×2.5m の大型のものまでが、複雑に重複しており、土塚墓と推定する。詳細は不明。

SB32は下面で検出したが、上面検出面より上層から掘り込まれているものである。2間×3間の掘立柱建物跡で、柱穴内から弥生時代後期の土器片しか出土しないが、その掘り込まれている層位から中世のものとする。このSB32の下層、調査地の中央部で南北方向に幅約10mで溝状に広がる「落ち込み」がある。最深部で約70cmの深さを測り、溝中より弥生時代後期の土器片が出土する。

なお、調査地内の攪乱部は、建物建設(昭和57年度調査)に伴う工事用車両の搬入路によるものである。

第1トレンチは三面にわたって調査を行い、無遺物層に至ったが、すべて東西方向の中世素掘り溝を検出したのみで、顕著な遺構・遺物は無かった。

第3トレンチでは、地山面が第2トレンチのそれより若干高くなり、重機掘削でほぼ地山面に達していた。検出した遺構は南北走する中世素掘り溝などである。出土遺物は少なく、その大半が中世のもので、弥生土器は散見される程度である。

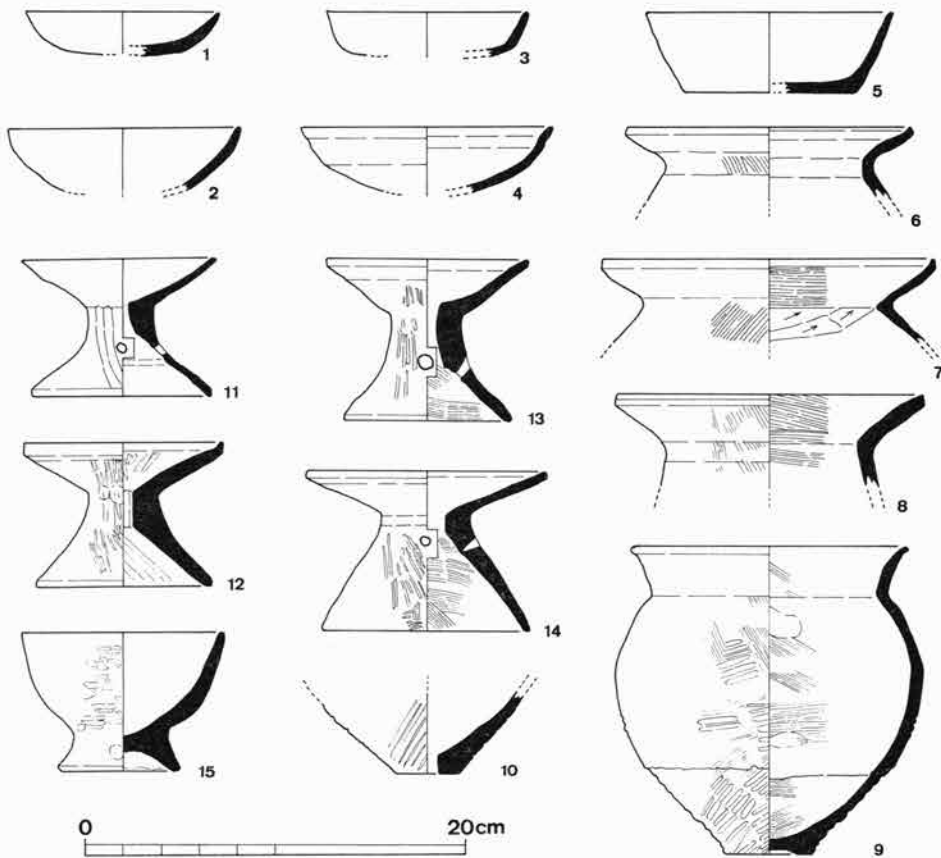
この試掘調査の結果からは、第2トレンチを中心に、一部第3トレンチにまで弥生時代後期～庄内期の遺構・遺物が広がっているものと推定される。(岩松 保)

4. 出土遺物

出土遺物は総計で、整理用コンテナバット40箱程度を数えるが、ほとんどすべてが土器片である。時代は弥生時代後期から近世までと幅がある。このうち、数量的に多いのが弥生時代後期～庄内期のもので、そのほとんどがET2地区で出土した。ET2地区の報告は次回に回すこととし、ここではJN地区と2P地区を中心にみていきたい。

JN・2P地区の出土遺物は中世の土器が主体で、コンテナ3箱程度が出土した。これらの土器は、指頭大の細片ばかりで、すべての土器の角が磨滅している。これは両地区が、田畑として利用されていたため、耕作による破損・磨滅を絶えず受けていたためといえよう。このような状態であったため、両地区より出土した遺物で、図化するものは数点のみであった(第13図1～4)。

図版第7～9に掲載した土器は、中国製及び日本製の陶磁器片である。6・7～9はJ



第13図 出土遺物実測図
(1・2：JN地区，3・4：2P地区，5～15：ET2地区)

N地区より出土したもので、6・9はSD01、7・8はSD02より出土した。ともに、第I面で検出した幅広の溝である。1・3・4は2P地区のもので、1は鉄分混青灰色粘土層、3は第I面のSD06、4は第I面のSD01より出土した。

日本製の陶磁器類は、所謂陶器の範疇で理解されるものが主を占め、肥前系をはじめとした磁器類はごく少量にすぎない。平安時代後期に比定できる緑釉陶器(図版第9 1-1)は近江系の椀で、濃緑色の釉薬を内外面に施し、高台は幅広くかつ高い。緑釉陶器片はそのほかにも椀の口縁部片などもあるがごく小破片である。中・近世に属する陶器類には、瀬戸・美濃地方で生産された胎土の粗悪な灰釉陶器片(同3)や黒色の釉調である天目茶椀の口縁部から胴部にかけての破片(同6)、通常「黄瀬戸」と呼称される底部片(同4)がある。この黄瀬戸片は釉が厚くガラス化し、貫入もみられる。13世紀後半代に比定できる常滑系の甕の口縁部(同2)は、その端面が平滑で、端部は垂直に高くつまみ上げている。近世前半期の代表例としては、京都市内でも多量に出土する唐津系の椀・皿類がある(同5・7~9)。内外面に薄緑色釉が施された薄手の椀(同5)、口縁部の内外面のみ同色の釉を施しその他の地肌には直接紅色の刷文様を描いた小形の皿(同7)や大形の皿(同8)がある。椀はその他に底部内外をケズリ出して高台を造り出した例(同9)があり、濃緑色の釉調で、調整は粗悪である。このような濃緑色釉を施した唐津系椀は、1620年の京都大火に伴う焼土坑の一括遺物中にも多量に確認でき、大坂城三の丸遺跡でも同様であり、この時期に比定して大過なからう。^(注5,6)

中国製の輸入陶磁器は、青磁・灰白磁(白磁を含む)・染付に三大別できる。出土点数は比較的多いが、すべて小破片であり、その三大別中でも青磁片が大半を占める。1・2・4・7~10・12はJN地区より出土し、他は2P地区より出土した。7は鉄分混青灰色粘土層、8は淡青灰色砂質粘土層より出土し、14はSD25、11はSD05、3・5はSD03より出土した。青磁類は総じて椀形である。外面に鎬蓮弁を有する例(図版第9 2-1・4・5)・内面に櫛描きによる画花蓮華文を描き、口縁部が玉縁状口縁を呈する例(同2)・口縁端部内面には3条の櫛描き沈線を描き(同3)、内外面とも貫入が顕著な例(同3・6)や、薄手の底部高台片(4)などがある。灰白磁には椀、合子蓋・身、壺がある(同7~13)。椀にはさらに口禿を有する破片(同7)も含まれている。合子蓋はごく薄手で側面か平面上花卉を形どる。肩部には花文の一部が残存している。同身はその反対に厚手であり、側面の花卉が幅広く彫りも深い大形品の破片である。蓋それ自体は経塚出土例に多数散見できる優品であるが、身は正に粗悪品と言えよう。壺(同11)は肩部片で、内外面の釉が薄いガラス質と化し、良品である。灰白磁より寧ろ青磁に近い釉調である。内面にはロクロ痕が明瞭に認められる。恐らくは四耳壺片であろう。椀(同12・13)には小形の薄手の小さく折

り曲げた丸味を帯びた玉縁口縁(同12)と、通例タイプの折り返し玉縁口縁の上面をヘラケズリ調整しそのため稜線が走る例(同13)に分類できる。青花白磁(同14)は薄手の皿状を呈し、内面に連続三葉文を染付した小破片である。同一文様例としては岐阜県瑞浪市土岐町鶴城跡出土がある。これら中国製輸入陶磁器は、大概、青磁類や灰白磁碗が13~14世紀代に比定されるのに対して、合子は明確に12世紀代の様相を呈する。なお今回の調査では明代の典型例を見い出せないことは注目されよう。

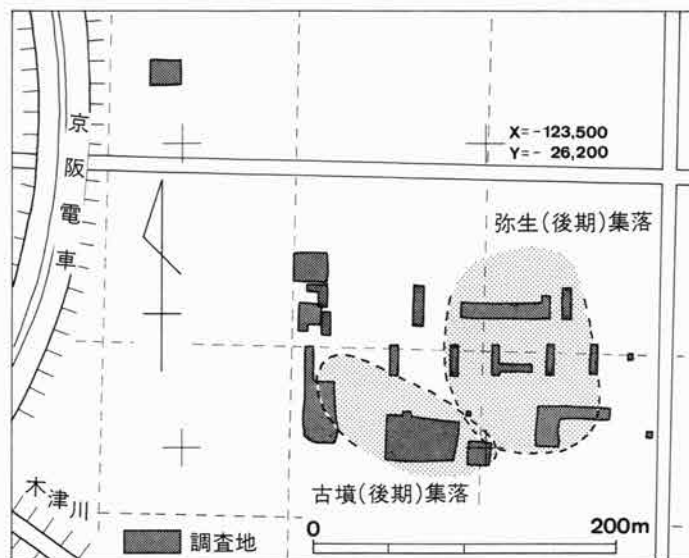
これら陶磁器類以外の出土遺物として、長崎県産と肉眼観察できる滑石製石鍋片や、北宋銭の一種である「元符通宝」(鑄造年1098~1100)、及び髪差しの一具である筭がある。筭は赤銅製で、頭部に小さな耳搔きを有し、身表面には二葉の開花した花卉を貼り付けている。下半部は既に折損消失しており詳しくは不明である。

ET2地区では、1・3トレンチの出土遺物はJN・2P地区と同じ様相を示す。2トレンチにあっては、弥生時代後期~庄内式併行期の土器が多く出土した(第13図 6~15)。

(松井忠春・岩松 保)

5. ま と め

概述のように、JN地区・2P地区では顕著な成果は得られなかったが、ET2地区では、予想を大きく上回る遺構・遺物を検出した。ここでは、ET2地区の成果を中心に、以下、若干のまとめを行いたい。



第14図 集落分布推定図

1) 今回の木津川河床遺跡の調査によって、同遺跡内で、弥生時代の集落遺構が初めて確認された。広く南山城地域に目を転じてみても、低湿地遺跡の調査としては初めてである。八幡市の同時期の集落遺跡は、幣原遺跡^(注8)、南山遺跡^(注9)などが挙げられるが、これらは

丘陵上に立地する。この地域にあっても、集落間の母村一子村の関係が弥生時代における通有なありかたとして一般化しうるかもしれない。

2) 従来の研究によると、弥生時代後期の山城地域は近江型土器の分布範囲として考えられている。八幡市幣原遺跡では約50%、田辺町天神山遺跡では21%の比率で近江型土器が出土する。今回の調査により出土した遺物が未整理の段階にあって、速断はできないが、木津川河床遺跡はそのような傾向にはなく、その比率は極めて少ない。それに対して、生駒西麓産の胎土をもつ土器片が目につく。他地域より搬入された土器は、その地域との交流を端的にものがたるものである。周辺遺跡、周辺地域との比較・検討をしていく必要があるだろう。

3) 掘立柱建物跡(S B32)・土塚群ともに、その直接の時期を示す遺物が出土していないため、細かな時期区分は与えられないが、大まかに中世のものと考えられる。従来、木津川河床遺跡からは、中国製陶磁器をはじめとする中世の土器片が比較的多く出土していたが、今回の調査でそれらと直接結び付くと思われる遺構が確認できた。

4) 噴砂は今までの調査トレンチのほぼすべてで見つかっているが、今回地震地質学の専門家に指導を仰ぎ、明らかとなった。噴砂によって下層の層序の乱れが観察できるように、その直下約3mを断ち割り、土層断面の観察を行い、併せて土層の剥き取りを行った。この噴砂の生成時期は、遺構・包含層の切り合いより、中世末～近世初頭の年代が与えられる。詳細については、来年度のET2地区の報告の際に触れたい。

5) 古墳時代前期の遺構・遺物は、KH地区・OD地区・Cトレンチ(昭和59年度)で確認されているが、今回のJN地区では認められなかった。この時期の集落は、JN地区の西側もしくはKH地区の南側に広がっているものと予想される。

6) 今までの調査成果により、集落分布がある程度推定されるようになった(第14図)。今後、この集落予想範囲内及び周辺地には集落遺構が包蔵されていることが期待される。

(岩松 保)

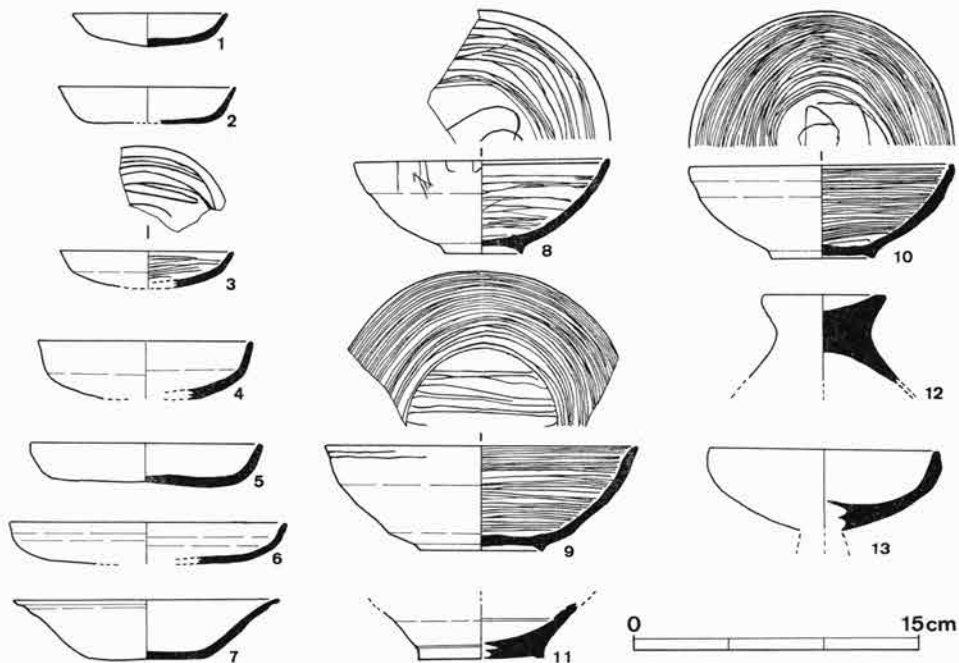
資 料

ここに掲げる実測図は、木津川河床遺跡内での表採資料を図化したものである。表採地点は、木津川左岸で御幸橋近辺の河原である。表採日は、昭和61年8月2日で、7月後半の京都府南部地域の豪雨による木津川の氾濫が治まった後に行った。遺物は、弥生時代後期から近世にまで至り、その中では中世の土師器・瓦器が大半を占める。須恵器や弥生土器、陶磁器は多くない。この御幸橋下の河原には、現在でも旧橋脚や、池の木杵、石材等が残っており、この地がかつて生活の場として利用されていたことを物語る。因みに、現在の木津川は明治2年に付け替えられたものである。

この河原と洛南浄化センター内の調査地との高さの関係をみてみると、国土地理院発行『淀』1:25,000の地形図によると、この河原内に10mの等高線が通っている。調査地内の中世相当面の高さは、JN地区でL=8.5m、2P地区でL=8.0mで、南から北に向けての緩傾斜を持つ。これは、表採地点のL=10mとは矛盾しない。当時の生活面は、男山丘陵から北東に延びる微高地上にあったものと推定される。

遺物は河原に埋まっていたこともあり、水に当たる側は磨滅している。また、比較的大きな破片や完形のものも含まれることから、上流から流されたものではなく、この地が生活の場であった名残と考えられよう。

(岩松 保)



第15図 表採資料実測図

付表3 出土遺物観察表

器種	番号	器形	各部長 (cm)			残存率	出土地点	備考
			口径	器高				
土 師 器	1	皿	10.2	2.2	1/2	JN SD02	○茶褐色 ○反転復元	
	2	皿	12.2	3.3	1/8	JN6F 褐色粒泥淡青 灰色砂質粘土	○黄褐色 ○反転復元	
	3	皿	10.6	2.3	1/7	2P	○淡黄褐色 ○反転復元	
	4	皿	12.2	3.4	1/9	2P	○淡黄褐色 ○反転復元	
須 恵 器	5	杯身	13.0	4.1	1/4	ET-2	○淡青灰色 ○反転復元	
土 師 器 ・ 弥 生 土 器	6	甕	14.9 (復元)	3.9 (現存)	1/9	ET-2	○黄褐色 ○ハケメ(5本/cm) ○口縁端部	
	7		17.4	4.2	1/4	ET-2	○反転復元 ハケメ(9本/1.3cm) ○生駒西麓産	
	8	甕	16.0 (復元)	5.0 (現存)	1/8	ET-2	○黄褐色 ○ハケメ(8本/1.4cm)	
	9	甕	口径 14.6 底径 4.6	器高 16.2	2/3	ET-2	○明褐色 ○たたき(6本/2.5cm)成形ののちハケ 目調整(12本/1.2cm)	
	10	甕	3.4	3.8 (現存)		ET-2	○茶褐色 ○底部に穿孔(幅1cm)	
	11	器台	10.3	9.4	6.1	完形	ET-2	○黄褐色 ○スカシ3方向
	12	器台	10.4	9.2	7.6	2/3	ET-2	○淡黄褐色 ○黒斑を有する
	13	器台	10.6	9.0	8.4	1/3	ET-2	○淡黄褐色 ○スカシ3方向 ○ハケメ(9本/cm)
	14	器台	12.4	10.8	8.4	完形	ET-2	○黄褐色 ハケメ(14本/2cm) ○スカシ3方向(貫通しない)
	15	脚付椀	10.6	5.8	7.3	完形	ET-2	○茶褐色

付表4 表 採 土 器 観 察 表

器種	番号	器形	各 部 長 (cm)				残存率	備 考
			口 径		器 高			
土 師 器	1	皿	8.3		1.7		完形	○淡茶褐色 ○内面にスス付着
	4	皿	11.4		2.9		1/7	○反転復元 ○黄褐色
	5	皿	12.4		2.0		1/2	○黄褐色
	6	皿	15.0		2.2		1/6	○反転復元 ○茶褐色
	7	皿	14.2		3.1		1/4	○反転復元 ○茶褐色
瓦 器	2	皿	口 径	高台径	器 高	高台高	1/4	○内・外面磨滅のため調整不明 ○反転復元 ○黒色
		9.4	—	1.8	—			
	3	皿	9.2	—	1.9	—	1/5	○反転復元 ○黒色
	8	椀	13.6	4.1	4.9	0.4	1/4	○外面磨滅 ○反転復元 ○黒色
	9	椀	18.4	5.8	5.4	0.3	1/3	○外面磨滅 ○反転復元 ○黒色
10	椀	14.1 (長径) 13.8 (短径)	4.8	4.9	0.4	完形	○外面磨滅 ○黒色	
白 磁	11	椀	口 径 6.6 (底径)		器 高 2.8 (現存高)		1/2	○反転復元 ○乳白色
土 師 器 ・ 弥 生	12	蓋	6.4		4.5 (現存高)		1/3	○一部反転復元 ○茶褐色
	13	高杯	12.2		4.2 (現存高)		1/5	○反転復元 ○茶褐色

- 注1 木津川河床遺跡の発掘調査成果は各年度毎に報告されている。
- ①長谷川達「木津川河床遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
 - ②黒坪一樹・長谷川達「木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
 - ③黒坪一樹・松井忠春「木津川河床遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
 - ④岩松 保・松井忠春他「木津川河床遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第19冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 注2 現地調査及び整理作業には下記の方々の参加を得た。記して感謝の意に替えたい。
西岡成郎・福富 仁・中井英策・立川明浩・水野哲郎・松本英人・湯浅研史・細川貴久・室田博子・村上和佐子・古賀敦子・室田真理子・小早川志穂・来田容子・大松千尋・三輪寿子・三谷育代
- 注3 調査地名は、その調査の原因となる新設建物の名称に因って、英数字2〜3字で表わしている。但し、既報告の際に調査地名を明記したものについては、その報告内の名称をそのまま用い、その前に調査年度を付すこととしている。
- 注4 噴砂は大地震に伴う軟弱地盤によく発生し、軟弱地盤中の水分の多い砂層が激しい震動によって高圧状態となって、上位の地層をつき破り地表へ吹き出す現象である。特に、①活段層の近辺、②砂層と粘土層が覆うところに生じやすい。
- 注5 寺島孝一他『押小路殿跡・平安京左京三條三坊十一町 平安京跡研究調査報告 第12輯』(財)古代学協会 1984
- 注6 藤井直正他『大坂城三の丸跡Ⅱ 大手前女子短期大学の校舎増築に伴う発掘調査報告書』大手前女子大学史学研究所・大坂城三の丸跡調査研究会 1983.4
- 注7 『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館 1978
- 注8 高橋美久二・堤圭三郎「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』京都府教育委員会) 1969
- 注9 『南山遺跡』(現地説明会パンフレット 八幡市教育委員会) 1986
- 注10 都出比呂志「他地域との交流」(『向日市史』上巻 P. 89-P. 98) 1983
- 注11 國下多美樹「近江型甕についての一試論」(『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会) 1986
- 注12 中沢圭二(京都大学名誉教授)、寒川 旭(通商産業省工業技術院地質調査所)の諸先生方には、現地まで赴かれ、貴重な御助言、御指導を賜った。

3. 栗ヶ丘古墳群昭和61年度発掘調査概要

1. はじめに

栗ヶ丘古墳群は、綾部市小呂町の丘陵地にある。丘陵の上部縁辺・端部・頂部に、総数12基の古墳が散在している。

この丘陵地が、綾部工業団地の用地として造成されることになり、昭和60年度から古墳群の発掘調査や周辺部の試掘調査を、当調査研究センターが実施している。昭和60年度には、3・5号墳の発掘調査、1・2・6号墳および周辺の試掘調査を実施した。その結果、1号墳が古墳ではないことがわかり、3号墳の北西側に新たに13号墳が確認された。^(注1)

昭和61年度の調査は、事業担当の京都府企業局および京都府教育委員会との再三にわたる協議を経て、7月2日から開始した。本年度の調査計画は、2・4・6・7・8・9・11・12・13号墳および栗ヶ丘東古墳の発掘調査、周辺部約1,000m²の試掘調査である。また、昭和60年度に発掘調査した3号墳の、墳丘断ち割り段階で確認された埋葬主体部についても発掘調査することとした。

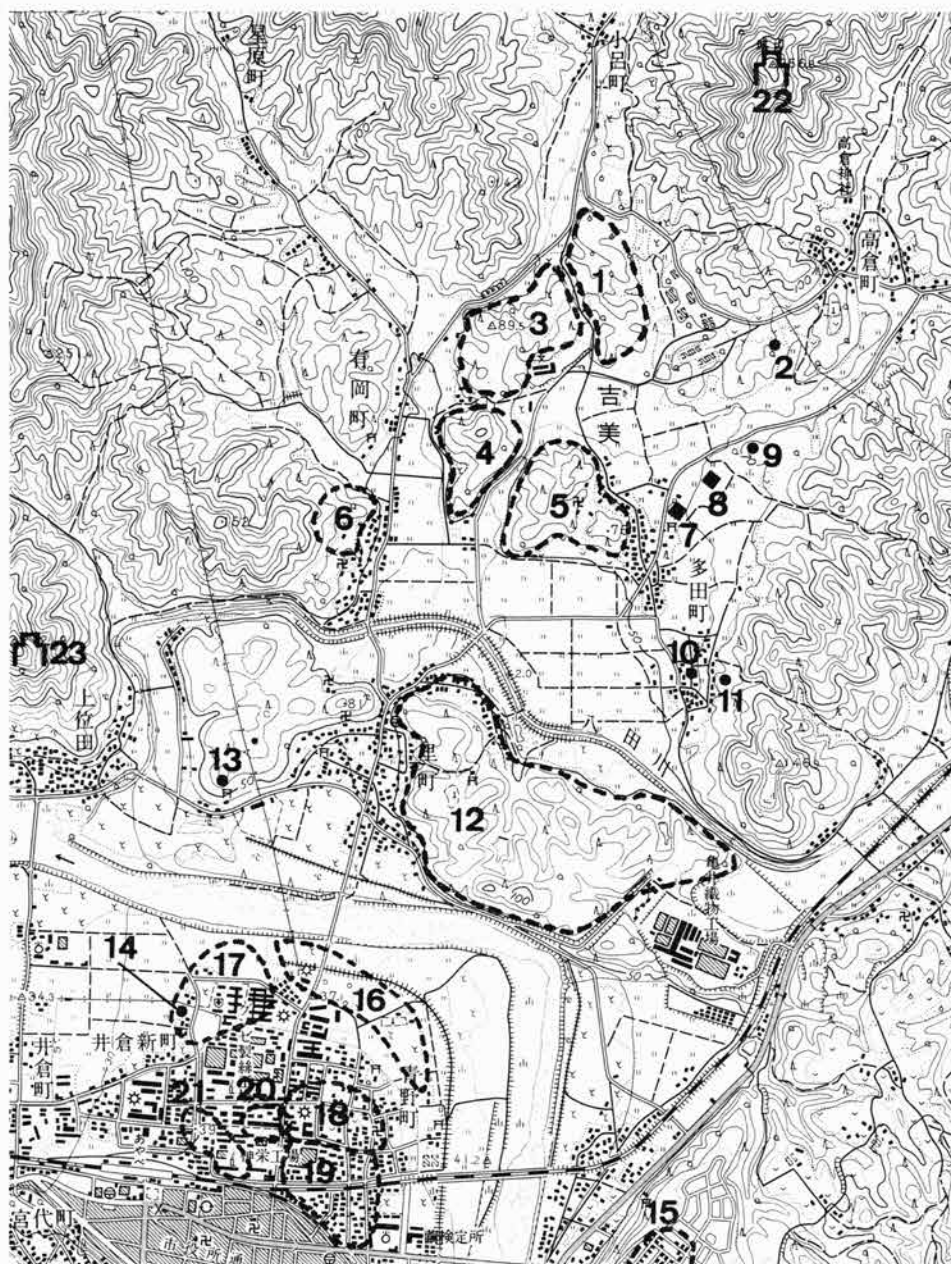
調査を担当したのは、当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克・調査員引原茂治であるが、現地での調査については、主に引原が担当して実施した。調査にあたっては、関係諸機関に協力していただき、実際の現地作業に際しては、調査補助員・整理員・作業員として地元および近隣市町の方々の御協力があつたことを記して感謝したい。^(注2) また、綾部市教育委員会技師中村孝行氏には、並々ならぬ御協力・御教示をしていただいたことを特記して感謝したい。

なお、この概要報告では、昭和61年11月までに調査をほぼ終了した2・3・6・7・8・9・13号墳について、その概略を記述することとする。詳細な調査内容やその他の古墳の調査については、後日報告することとしたい。

2. 位置と環境

綾部市街地がある由良川沿いの平地部から、久田山などの低い丘陵地をへだてた北側に小さい盆地がある。吉美盆地と呼ばれている。栗ヶ丘古墳群は、この吉美盆地の北側丘陵地に位置している。

吉美盆地およびその周辺では、旧石器・縄文時代の遺跡は、現時点では確認されていない。しかし、栗ヶ丘6号墳の墳丘盛土中から、縄文時代のものとみられる石鏃が出土して



第16図 調査地位置図 (1/25,000)

- | | | | |
|-----------|------------|---------------|------------------|
| 1. 栗ヶ丘古墳群 | 2. 栗ヶ丘東古墳 | 3. 田坂野古墳 | 4. 石井根古墳群 |
| 5. 坊主山古墳群 | 6. 二ノ宮古墳群 | 7. 聖塚古墳 | 8. 菖蒲塚古墳 |
| 9. 上多田古墳 | 10. 後路古墳 | 11. 狐塚古墳 | 12. 久田山古墳群・久田山遺跡 |
| 13. 里古墳 | 14. 青野大塚古墳 | 15. 味方平古墳群 | 16. 青野遺跡 |
| 17. 青野西遺跡 | 18. 青野南遺跡 | 19. 綾中遺跡・綾中廃寺 | 20. 西町北大坪遺跡 |
| 21. 西町遺跡 | 22. 高倉城跡 | 23. 位田城跡 | |

おり、その時代の遺跡が将来的に確認される可能性が無いとはいえない。

弥生時代についても、前期・中期の遺跡は確認されていない。後期から終末期頃に、盆地南側の久田山に台状墓・周溝墓が営まれる。^(注3)なお、この久田山には、古墳時代にも墳墓が営まれている。また、7世紀頃の住居跡も確認されており、丘陵上の集落が想定されている。^(注4)

古墳時代には、盆地周辺に多くの古墳が築造される。上述の久田山にも、古墳群が形成される。この盆地内において特筆すべき古墳として、聖塚・菖蒲塚古墳という大方墳がある。範囲確認調査の結果、聖塚古墳は一辺54.2m・菖蒲塚古墳は一辺32.3mであり、両墳とも南側に造り出しをもつことが判明した。^(注5)埴輪・葺石をもち、周濠がめぐる。5世紀前半頃の築造とされ、中丹地域全体を勢力範囲とした首長の墓と考えられている。

栗ヶ丘古墳群付近の丘陵地にも古墳群がある。田坂野・石井根・坊主山などの古墳群である。このうち、田坂野古墳群は、昭和40年に5基の古墳が発掘調査されている。^(注6)いずれも木棺直葬墳で、6世紀から7世紀にかけての築造とされる。なお、田坂野古墳群は、栗ヶ丘古墳群の西側に隣接しており、その境界は、新しい切り通しの道であるので、本来は一体のものであったかもしれない。

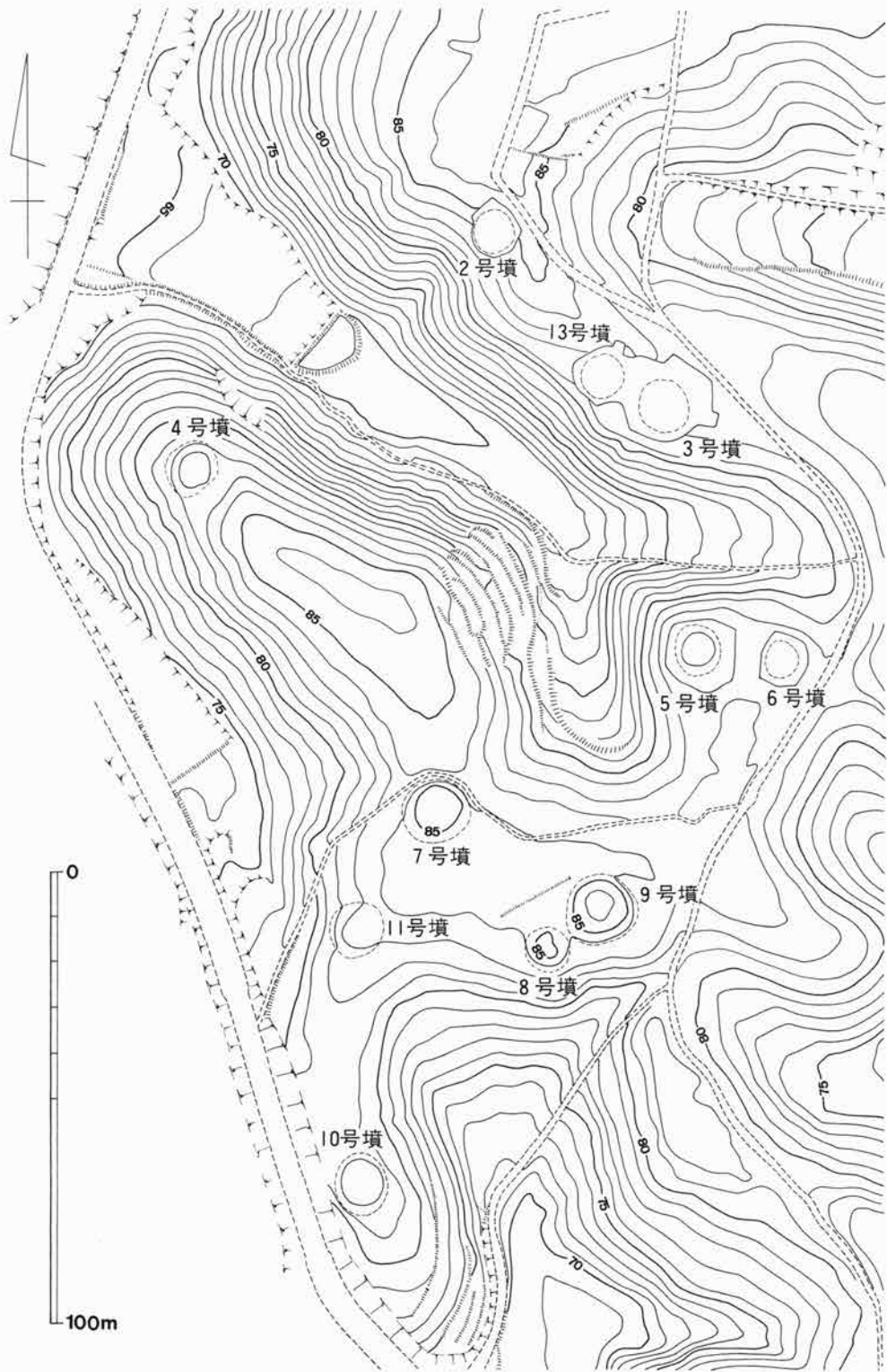
古墳時代以降の遺跡としては、高倉城跡などの中世の山城跡があるが、そのほかには、顕著な遺跡は確認されていない。

3. 調査経過

現地調査は、まず草刈り・樹木伐採を行った後、昨年度試掘され表土が除去されている2・6・13号墳の、埋葬主体部(以後、「主体部」とする。)検出および掘削から着手した。いずれも主体部は木棺直葬である。2・6号墳は主体部が1基であったが、13号墳では後に実施した墳丘断ち割りですらに1基の主体部を検出し、2基の主体部をもつことを確認した。また、昨年度、3号墳の墳丘断ち割り段階で検出された主体部(第3主体部)についても、その全容を検出し、掘削した。このような作業と並行して、7・8・9・11号墳およびその周辺の地形測量を実施した。

つぎに、8・9号墳、続いて7号墳の調査に着手した。8号墳からは1基の主体部、この古墳群のなかでは比較的規模の大きい7・9号墳からは、それぞれ主体部2基と土坑2基を検出した。また、7号墳の周溝底部から供献用とみられる一群の須恵器が出土した。

この間、10月11日に現地説明会を実施した。地元の歴史に関心をもつ方々や学校関係者など、約70名が参加された。



第17図 栗ヶ丘古墳群地形図

なお、今年度調査した古墳については、12月に航空撮影を行う予定であったので、墳丘断ち割りは、その終了を待って行うことにした。

4. 調査内容

この古墳群を形成する古墳は、何れも円墳であり、主体部は木棺直葬である。

(1) 2号墳

2号墳は、直径約9mである。丘陵稜部から南西側斜面にかけて墳丘が築かれている。稜部側には、幅約0.5~1m・深さ約0.3~0.5mの周溝がある。周溝は、墳丘をほぼ半周し、斜面側で消滅する。

主体部は、墳丘南西側寄りに1基設けられている。北西から南東方向に主軸をとる。主体部の掘形は、長さ約3.5m・幅約1.5mの長方形土壇である。棺は、長さ約2.3m・幅約0.6mの規模をもつものとみられる。掘形底部には、主体部主軸に直交する3条の溝状の掘り込みがある。棧の痕跡であろうか。

副葬品としては、主体部掘形上部西隅付近から須恵器提瓶(第22図41)・土師器杯(第20図30)各1点が出土したのみである。出土状況からみて、棺埋納後に置かれたものとみられる。棺内からは全く遺物が出土しなかった。

(2) 3号墳

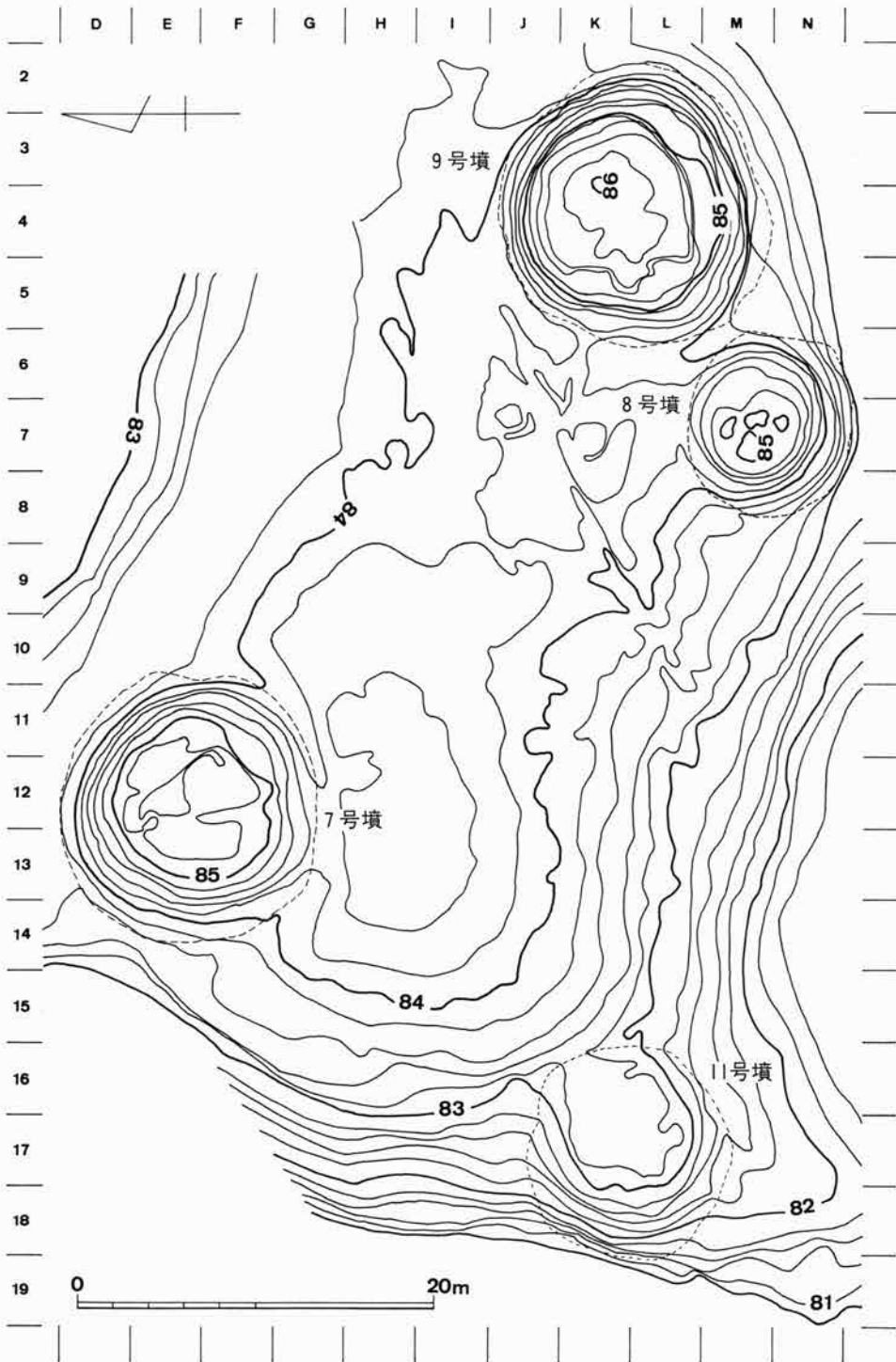
3号墳は、直径約13mである。丘陵稜部の平坦地から南側斜面にかけて墳丘が築かれている。稜部側には、墳丘をほぼ3/4周する周溝が設けられる。周溝は、幅約2~3m・深さ約0.3~0.5mである。斜面側には、幅約1mの平坦部がある。

昨年度の調査で、2基の主体部が検出されている。墳丘断ち割りによってさらに1基の主体部を確認し、今年度調査した。第3主体部とする。第3主体部は、墳丘のほぼ中央に設けられており、層位的にも他の2基の主体部より古いものである。北西から南東方向に主軸をとる。第3主体部の掘形は、長さ3.1m・幅1.8mの長方形土壇である。棺は長さ2.1m・幅0.7mとみられる。掘形底部は、平坦である。

副葬品としては、須恵器杯蓋(第20図7)・杯身(第20図19・20)・蓋(第20図24)・甕(第21図38)、鉄刀・刀子・鏃がある。このうち、須恵器類は、棺の南東側から出土した。棺上および棺側の副葬品とみられる。鉄製品のうち、鉄刀は、棺埋土上部から出土しており、棺上の副葬品とみられる。鉄刀・鏃の切先は北西方向である。

(3) 6号墳

6号墳は、直径約8.5mで、他の古墳よりやや小規模である。昨年度調査済みの5号墳の東側にある。墳丘をほぼ半周する周溝をもつ。周溝は、幅約0.7m・深さ約0.2mの、浅く



第18图 7・8・9・11号墳地形图

で狭いものである。

主体部は、墳丘中央部に1基設けられている。ほぼ東西方向に主軸をとる。主体部の掘形は、長さ約3.5m・幅約1.6mの長方形土壇である。棺は、長さ約2.6m・幅約0.9mとみられる。掘形底部には、主体部主軸に直交する3条の掘り込みがある。

副葬品としては、碧玉製管玉5点・須恵器杯蓋(第20図9)1点・不明鉄製品1点がある。管玉は棺底部東側から、鉄製品は棺底部中央付近から、杯蓋は掘形底部の3条の溝状の掘り込みのうち西側のもののなかから出土した。

(4) 7号墳

7号墳は、直径約15mで、古墳群中でも規模の大きい古墳である。現存高では後述する9号墳に劣るものの、直径ではほぼ同規模である。墳丘を全周する周溝をもつ。周溝は、幅約1~2m・深さ約0.7mであり、断面は逆台形である。

主体部は、墳丘中央部とその北側に2基設けられている。中央部のものを第1主体部、北側のものを第2主体部とする。両主体部の主軸は、ほぼ東西方向である。第1主体部の掘形は、長さ約5.2m・幅約1.8mの長方形土壇であり、棺は、長さ約3.5m・幅約0.6mとみられる。第2主体部の掘形は、長さ約3.8m・幅約1.6mの長方形土壇であり、棺は、長さ約2.7m・幅約0.8mとみられる。第1主体部が第2主体部に先行する。

第1主体部の棺内からは、須恵器提瓶(第21図34)1点と鉄刀1振が出土した。鉄刀は、棺底部南辺東側から出土した。切先は西方向を向く。提瓶は、棺底からわずかにういた状態であり、棺上の副葬品かもしれない。また、棺の東側木口板の外とみられる位置から須恵器杯身(第20図16~18)3点・土師器杯(第20図27・28)2点が出土した。このほか主体部掘形埋土から土師器壺(第21図40)1点が出土している。第2主体部の棺内には、副葬品は無い。掘形埋土から鉄鏃とみられる鉄製品2点が出土したのみである。

7号墳墳丘部の遺構としては、上記の主体部2基のほかに、土壇2基がある。この2基の土壇の内部からは、遺物が出土せず、その性格は不明である。

周溝南側底部から、須恵器杯蓋(第20図3~6)・杯身(第20図12~15)・甕(第21図36・37)・甕(第22図42)などが出土した。この古墳に供献されたものとみられる。

(5) 8号墳

8号墳は、直径約10mである。9号墳の南西側に隣接する。墳丘をほぼ半周する周溝をもつ。周溝は、幅約2.3~0.5m・深さ約0.8~0.5mである。

主体部は、墳丘やや北側寄りに1基設けられている。ほぼ東西方向に主軸をとる。主体部掘形は、長さ約3.2m・幅約2mの長方形土壇で、棺は、長さ約2.5m・幅約0.7mである。掘形底部は、平坦である。

棺埋土から、鐔付の鉄刀1振・土師器甕片が出土した。鉄刀は、その出土状況から、棺上に置かれていたものとみられ、切先は西向きである。そのほか、主体部掘形内から、須恵器杯蓋2点・鉄鏃2点・刀子1点が出土した。

(6) 9号墳

9号墳は、直径約16mであり、古墳群中最大規模をもつ。墳丘をほぼ完周する周溝をもつ。周溝は、幅約1.4~2.6m・深さ約0.2~0.3mである。

主体部は、墳丘北側寄りと南東側とに2基設けられている。2基ともほぼ東西方向に主軸をとる。北側のを第1主体部、南東側のを第2主体部とする。第1主体部の掘形は、長さ約5.2m・幅約2mの長方形土塚で、棺は、長さ約3.6m・幅約0.9mである。第2主体部の掘形は、長さ約3.8m・幅約1.4mの楕円形気味の長方形土塚で、棺は、長さ約2.5m・幅約0.6mである。掘形底部は、ともに平坦である。層位的にも、出土遺物からみても、第2主体部が第1主体部に先行するものとみられる。

第1主体部の棺内からは、鉄鏃3点が出土した。切先は西方向である。また、棺東端部から、須恵器杯蓋(第20図1)・杯身各1点が出土した。木口板の外側に置かれていたものか。第2主体部の棺底部には、木棺に塗られていたものとみられる赤色顔料が「H」字形に残る。棺底部東側から、土製丸玉251点以上が出土した。また、棺底部中央付近および西側から、鉄鏃・刀子などが出土した。切先は西方向である。このほか、棺東端部から須恵器杯蓋(第20図2)1点・杯身(第20図10・11)2点が出土した。木口板の外側に置かれていたものか。

このほかの墳丘内の遺構として土塚2基がある。このうち、第2主体部南側の土塚(SK02)からは須恵器提瓶(第21図35)1点が出土したが、これらの土塚の性格は不明である。

周溝西側底部から、土師器杯(第20図29)1点が出土した。供献用のものか。

(7) 13号墳

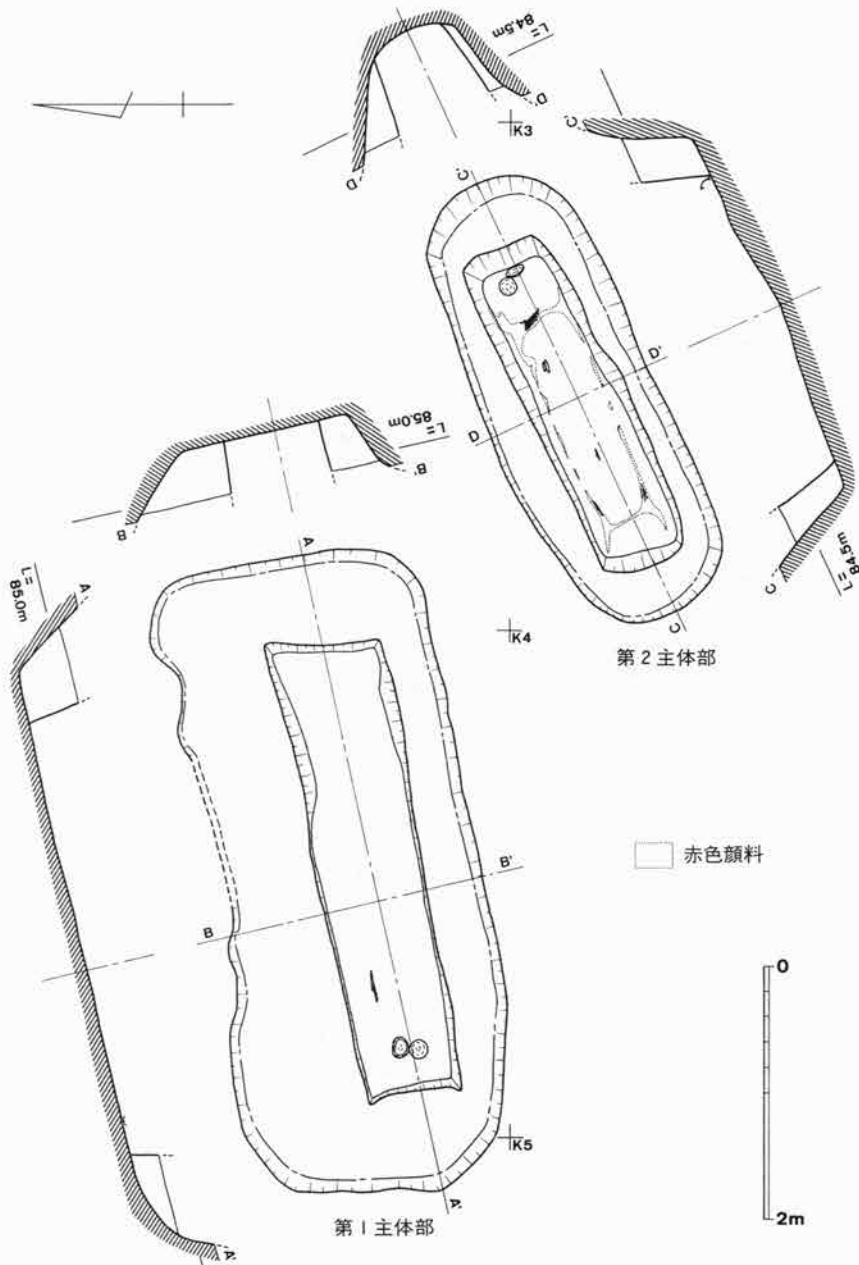
13号墳は、直径約9mで、3号墳の北西側に位置する。墳丘をほぼ半周する周溝をもつ。周溝は、幅約1~2m・深さ約0.3~0.5mである。

主体部は墳丘中央部と南西側とに2基設けられている。中央部のを第1主体部、南西側のを第2主体部とする。なお、第2主体部については、現在調査中であり、後日報告することとしたい。

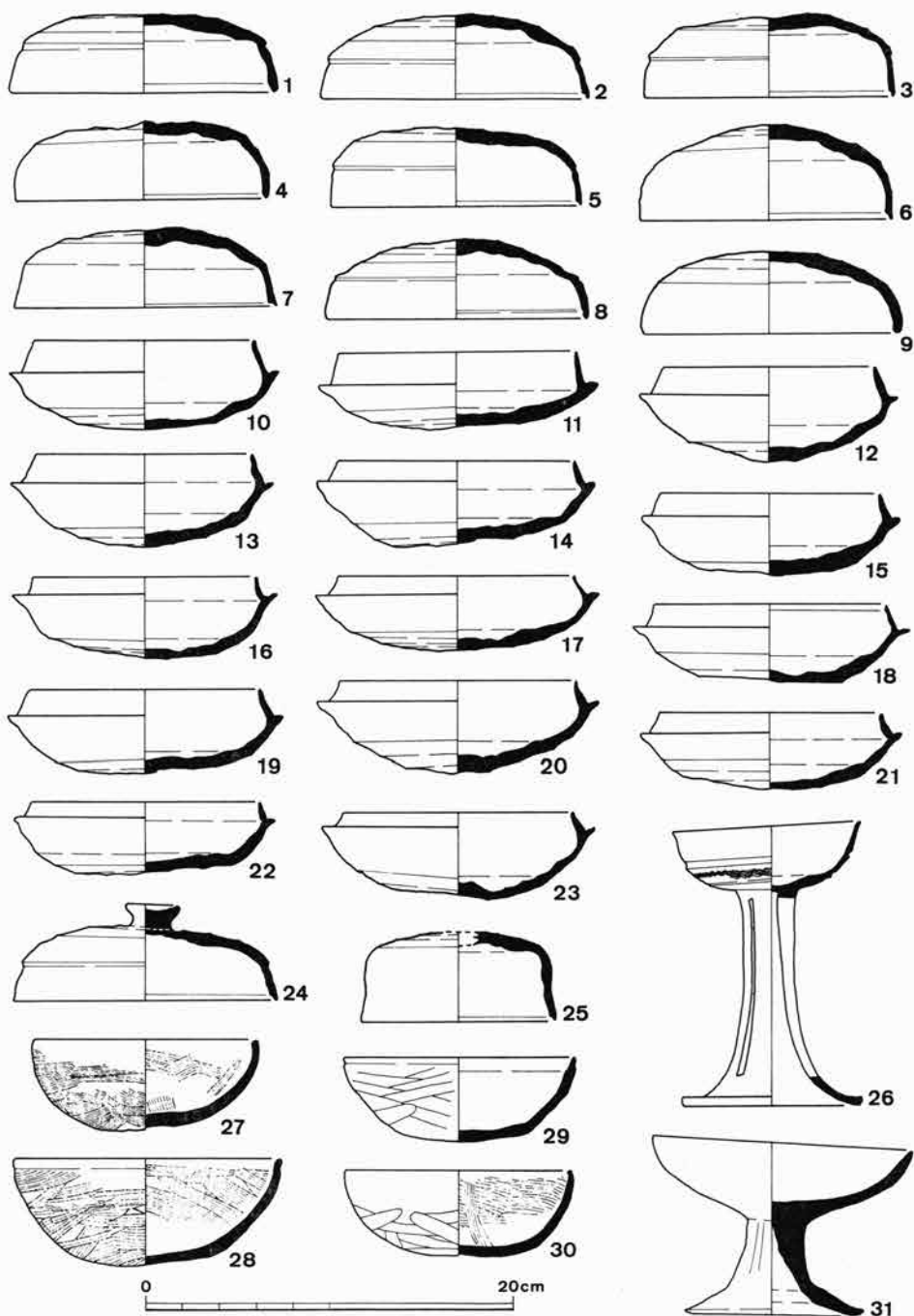
第1主体部の掘形は、長さ約2.8m・幅約2.1mの長方形土塚で、棺は、長さ約1.8m・幅約0.7mである。主軸は北西から南東方向である。掘形底部は、平坦である。

棺内から、須恵器杯蓋(第20図8)2点・杯身(第20図23)1点、鉄鏃3点が出土した。須恵器は、転落したような状態で出土しており、棺上の副葬品とみられる。鉄鏃の切先の方

向は、北西である。

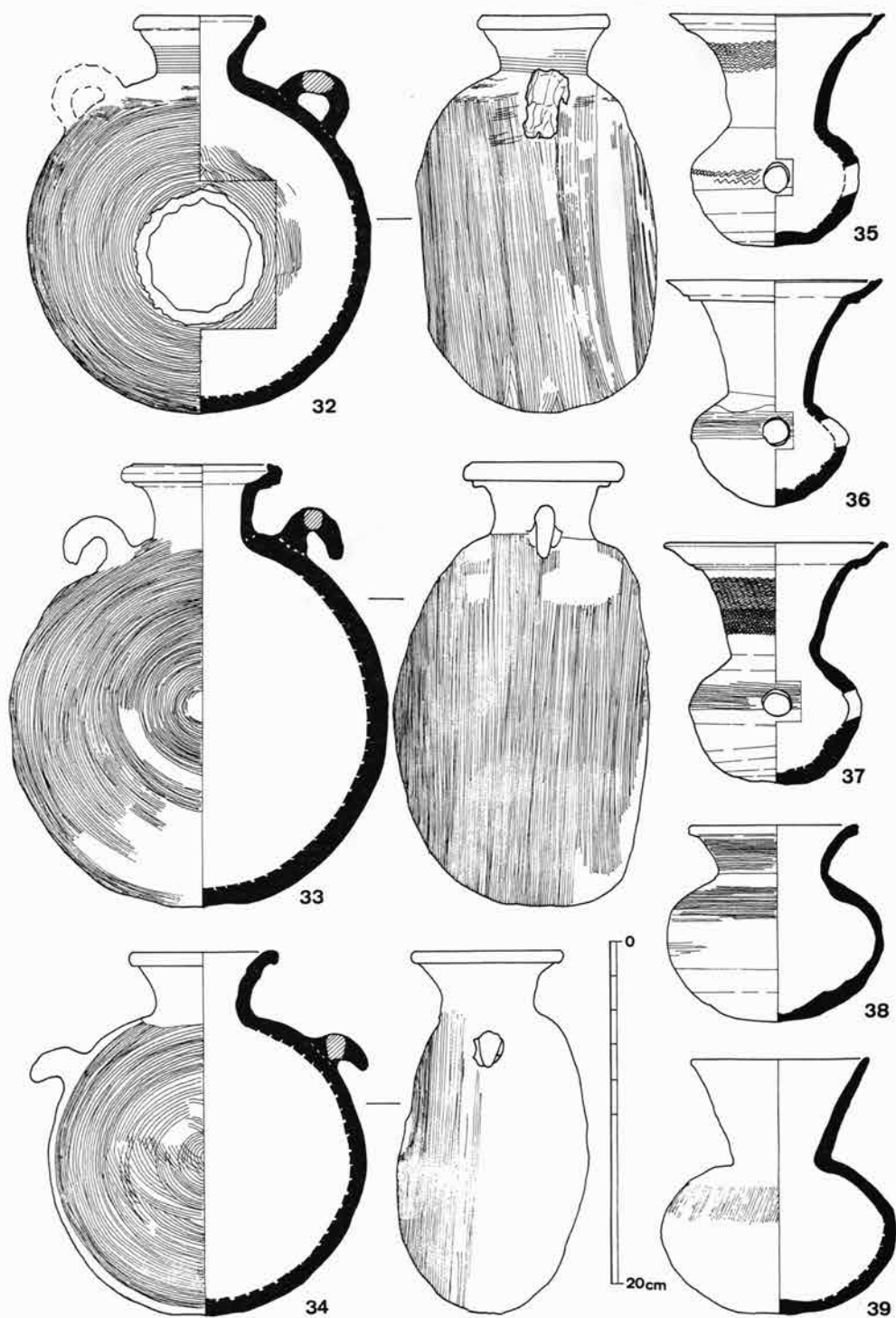


第19図 9号墳主体部実測図



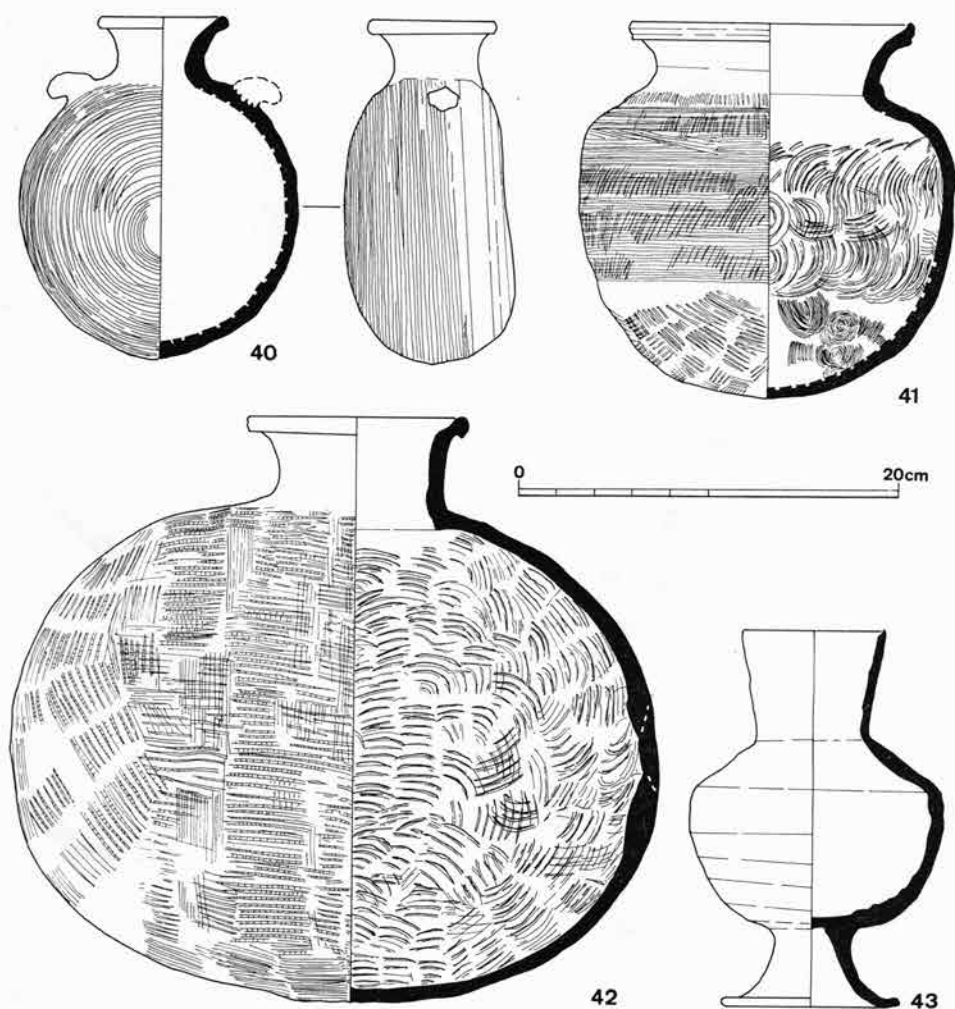
第20図 出土遺物実測図(1)

30: 2号墳, 7・19・20・21・22・24: 3号墳, 9: 6号墳, 3・4・
5・6・12・13・14・15・16・17・18・25・27・28・31: 7号墳, 1・
2・10・11・26・29: 9号墳, 8・23: 13号墳



第21図 出土遺物実測図(2)

37・38：3号墳，33・35・36・39：7号墳，32・34：9号墳



第22図 出土遺物実測図(3)
40：2号墳，41・42：7号墳，43：6号墳

5. 出土遺物(第20・21・22図)

今回の調査で出土した遺物は、須恵器・土師器の土器類と、鉄鍬・鉄刀などの鉄製品が主たるものである。その他、碧玉製管玉5点が6号墳主体部から、土製丸玉251点以上が9号墳第2主体部から、石製紡錘車1点が7号墳墳頂部から出土している。

古墳に直接関係しない遺物としては、6号墳墳丘盛土から出土したチャート製石鍬1点と、試掘トレンチから出土した石鍬1点がある。これら2点の石器は、縄文時代のものとみられる。

以上のような遺物が出土しているが、今回は比較的整理が進んでいる土器類について、

須恵器を中心にして、その概略を述べることにしたい。

杯蓋(1)は、9号墳第1主体部から出土したものである。形骸化した稜をもち、口縁端部内側には段がない。提瓶(33)が、この主体部上から出土している。

杯蓋(2)・杯身(10・11)は、9号墳第2主体部から出土したものである。杯蓋は、形骸化した稜をもち、口縁端部内側に段をもつ。杯身は、比較的高い立ち上がりをもつ。長脚一段透の高杯(26)が、この主体部上から出土している。

杯蓋(3・4・5・6)・杯身(12・13・14・15)は、7号墳周溝底部から出土したものである。杯蓋は、形骸化した稜をもつものと、ほとんど稜の痕跡をとどめるのみのものがある。杯身は、9号墳第2主体部出土のものよりやや立ち上がりが低くなるものがある。この周溝底部からは、甕(36・37)・甕(42)が出土している。

杯身(16・17・18)は、7号墳第1主体部から出土したものである。立ち上がりはやや低いが、周溝底部から出土したものと同様の形状である。提瓶(34)・土師器杯(27・28)が、この主体部から出土し、主体部埋土から、土師器壺(40)が出土している。なお、土師器高杯(31)が、この主体部上から出土している。

杯蓋(7)・杯身(19・20・21・22)は、3号墳第3主体部から出土したものである。杯蓋は天井部と口縁部の境が明瞭に屈曲する。杯身は、7号墳出土のものと同様であるが、22のように、立ち上がりが低くやや扁平気味のものもある。この主体部からは、蓋(24)・甕(38)が出土している。

杯蓋(8)・杯身(23)は、13号墳第1主体部から出土したものである。杯蓋は稜があまり明瞭でない。杯身は、立ち上がりが低くなる。

杯蓋(9)は、6号墳主体部から出土したものである。この杯蓋は、稜がなく、口縁端部内側に段をもたない。なお、6号墳墳丘表土から、台付長頸壺(44)が、出土している。

6. 小 結

栗ヶ丘古墳群から出土した須恵器は、陶邑編年^(注7)によると、Ⅱ形式2段階から4段階までに並行するものとみられる。年代的には、6世紀前半から後半にかけてということになる。須恵器蓋杯をみると、9号墳第2主体部出土のものが最も古様を示す。7号墳出土のものも、9号墳出土のものに近似するが、相対的にやや新しい様相である。3号墳第3主体部出土のものは、7号墳出土のものと同様のものもあるが、22のように、若干新しい傾向を示すものがある。以上の蓋杯の次に、13号墳出土の蓋杯が位置するものとみられる。なお、8号墳の出土遺物は図示していないが、13号墳出土のものと同様である。6号墳出土の杯蓋は、最も新しい様相を示す。2号墳の出土遺物については、蓋杯がないので

比較することができないが、須恵器提瓶をみると、あまり古くなる様相はなく、13号墳にほぼ並行するものか。

以上のことから、古墳の築造順序は、9号墳→7号墳→3号墳→2・8・13号墳→6号墳となる様子である。

このほかにも、多くの検討課題があるが、いずれまとめて報告することとし、この概要報告の筆を置きたい。(引原茂治)

- 注1 伊野近富「栗ヶ丘古墳群昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 注2 調査補助員 繁田 豊・赤井敏行・村木 伸・由良秀樹・佐々木幸徳・佐竹尊樹・藤田順基・塩見 学・中村信章・西田博紀・山本由美・平魯基永・山口陽一郎・大槻勝康・村上祐樹・藤山真理・山口正明・谷口康夫・大槻智彦・川見晋也
- 整理員 堀 美幸・藤原恵子・四方三智子・渡辺節子・上田律子・大槻純子・塩見京子
- 作業員 出口貴志野・柏原春雄・今井助雄・森岡義雄・今井和二郎・安野正夫・白木 茂・大槻和子・白木琴枝・四方直一・大槻與三郎・高橋清一・繁尾善治・石戸良和・今井ヒサエ・柏原きみ枝・今井とめ・四方勝蔵・白木良夫(登録順・敬称略)
- 注3 大槻真純「久田山」(『綾部市文化財調査報告』第5集 綾部市教育委員会) 1979
- 注4 中村孝行「久田山遺跡第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第13集 綾部市教育委員会) 1986
- 注5 中村孝行「聖塚・菖蒲塚試掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第11集 綾部市教育委員会) 1984
- 注6 堤圭三郎「田坂野群集墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1972
- 注7 中村 浩ほか『陶邑』I～IV (大阪府文化財調査報告書第28輯～31輯大阪府教育委員会) 1976～1979

4. 尊勝寺跡発掘調査概要

1. はじめに

794年桓武天皇の命により、長岡京より平安京へ都が移された。京域内は、中国の都城を模した碁盤目状の条坊区画に、朱雀大路を中心に右京域、左京域を配した長方形の平面プランであり、整然とした姿を呈していた。平安時代中期以降、地勢の卑湿などの理由から右京域が衰退する一方、藤原氏をはじめとする貴族が勢力を増し、鴨川東の白河の地(現京都市左京区吉田・岡崎一带)に、貴族の別業や私寺が創建され始め、京域外区が栄える。

承保2(1075)年に白河天皇が関白藤原頼通の別業白川殿の地を、頼通の没後、その子左大臣師実から献納を受け、法勝寺を建立した。その後、白河・鳥羽・後白河の三上皇の院政時代を通じて、白河の地は盛期を迎える。特に、格式の高い寺院として、在位中の天皇を願主とする白河天皇の法勝寺、堀河天皇の尊勝寺、鳥羽天皇の最勝寺、崇徳天皇の成勝寺、近衛天皇の延勝寺の5寺に、崇徳・後白河両天皇の母后となった待賢門院璋子の円勝寺を加えた6寺は、総称して「六勝寺」と呼ばれた。

六勝寺跡の調査は、六勝寺研究会・京都市埋蔵文化財センター・奈良国立文化財研究所・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの調査組織により実施され、多大なる成果が挙げられている。尊勝寺跡に関する主な調査は、1959年に京都公会館建設工事に伴う事前調査により、石組みの溝・建物跡・瓦溜めなどを検出し、中門と金堂をつなぐ東回廊の西側溝と東塔であろうと推定された^(注1)。1973年には市立芸術大学構内の調査で、建物基壇(2間×5間の身舎に廂・孫廂・縁側をめぐらす)・地覆の延石・雨落ちの石列を検出し、灌頂堂(現在では五大堂とみる)^(注2)と推定された。その他、建物建設工事・下水道工事に伴う事前調査が数多く実施され、岡崎幼稚園内で寺域西部を確定する南北方向の溝の検出や、阿弥陀堂とみられる大規模な建物跡等を検出し、断片的ではあるがその様相が解明されつつある。杉山信三氏は、それら多くの調査成果をもとに尊勝寺伽藍配置の指定復原図を作成された。

今回、京都市左京区岡崎に所在する府営西天王町団地の改築工事が進められることになり、この地が先述の推定復原図によれば尊勝寺観音堂に比定されることから、建物跡・瓦溜め等何らかの遺構が検出できるものと予想された。そのため、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府土木建築部住宅課・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターとの間で再三にわたる協議を行い、建設工事に先立ち事前に調査を実施することになった。

調査対象地は、府営住宅敷地総面積2,170m²である。発掘調査は、既設建物居住者のた

め早期完成という時間的制約の厳しい条件下で実施することになり、調査の対象地を建物の建設予定地690m²に限り、周辺に計画されている駐車場用地や公園等は地下の掘削が行われないため、調査対象からは一応除外した。

現地調査にあたっては、当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克・同調査員竹原一彦が担当して行い、整理作業においては同調査員森下 衛・土橋 誠の協力を得た。また調査においては、当調査研究セ



第23図 調査地位置図 (1/50,000)

ンター福山敏男理事長、(財)京都市埋蔵文化財研究所杉山信三・木村捷三郎・上村和人・辻 純一、京都市埋蔵文化財センター梶川敏夫、奈良国立文化財研究所上原真人、畑美樹徳の各氏より、専門的な立場より御指導を得、記して謝意を表したい。

また調査期間中、橋本稔氏をはじめ竜谷大学考古学研究会等の有志学生諸氏には、補助員・整理員として調査に参加していただいた。^(注3)

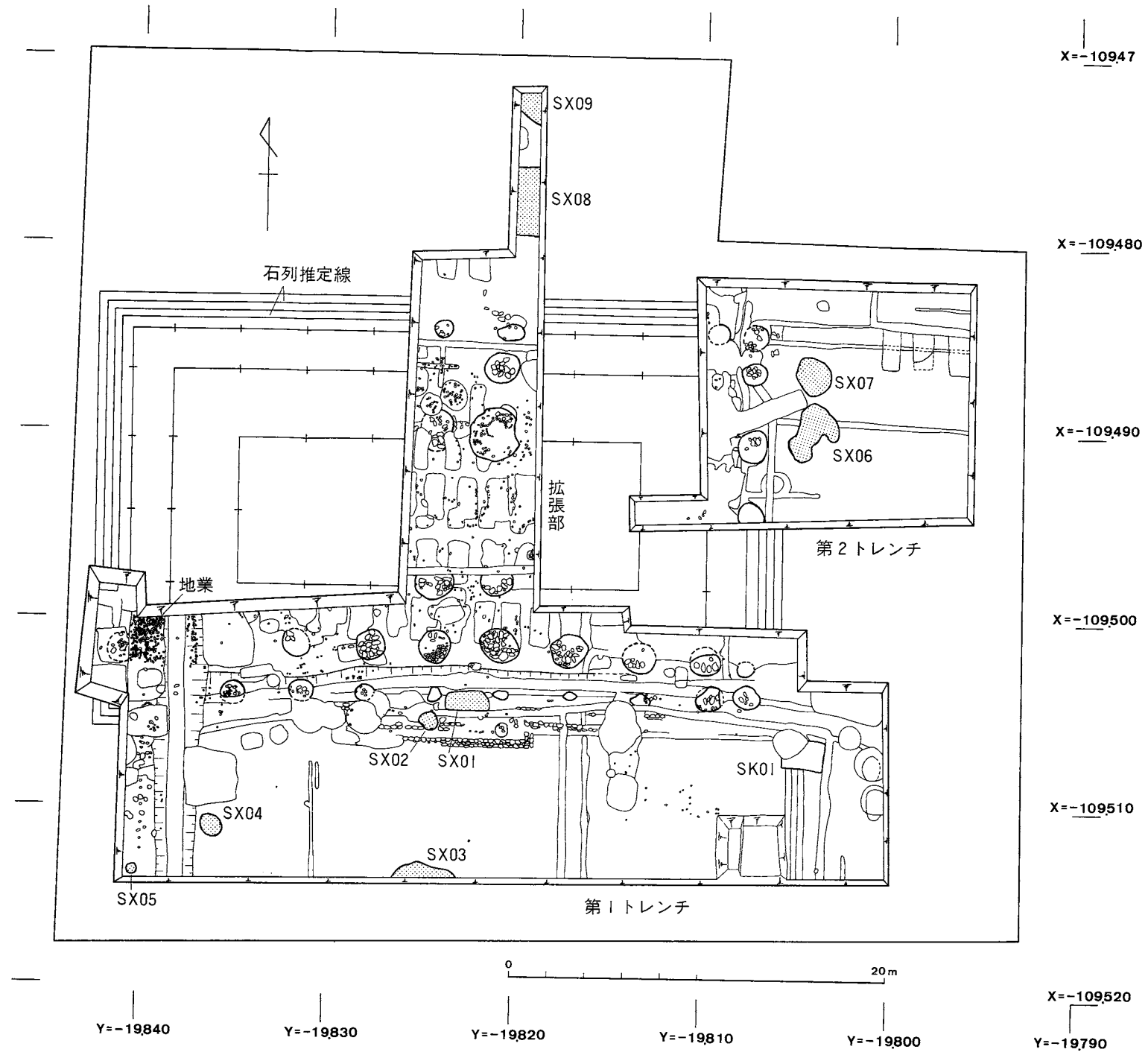
本書の作成にあたっては、出土遺物瓦の項を森下が、文献にみる尊勝寺観音堂の項を土橋が、他の項を竹原が執筆した。

なお、尊勝寺観音堂跡については、京都府文化財保護課・京都府住宅課の協議により、一部設計変更が行われ、建設建物下に保存されることになった。

(竹原一彦・水谷寿克)

2. 調査経過

調査対象地には府営住宅の旧建物が残り、建物解体工事に伴って遺構の破壊が危惧されたため、建物基礎下の状況把握のため解体工事に先だつ試掘調査を昭和61年7月6日～22日の間実施した。試掘調査の結果、基礎は遺構面(G L-60～80 cm)に達しておらず、旧住宅基礎による遺構の破壊はみられないとの判断が下された。その後、建物の解体・基礎部分の撤去を待ち、昭和61年9月1日から発掘調査を開始した。調査は新住宅建設予定地の2か所を対象とし、全面発掘を実施した。調査の結果、敷地内中央部やや西寄りの地点で、尊勝寺の主要伽藍の一つとみられる東西棟の建物跡1棟が存在することを確認した。2か所の調査地は建物遺構の東と南の一部を検出したのにとどまり、中心となる身舎部分は調査地外に位置することが判明した。建物遺構に伴う礎石および礎石据え付け跡は23か



第24図 調査地平面図

所を検出した。建物遺構は身舎部分と北部が不明であり、細部にわたる検討ができないため、関係諸機関と協議の上、建物跡中央の身舎と北部施設の確認をめざし、11月6日から調査地の一部拡張を実施した。拡張部から身舎分4か所を含む7か所の礎石据え付け跡を検出した。

検出した建物跡は、2間×6間の身舎の周囲に2重の柱と雨落ち溝を巡らせていることが判明した。また、建物の南に階段施設をもつことが判明した。11月22日に現地説明会を実施し、その後、遺構の平面図等の作成を行い、昭和61年12月6日に調査を終了した。調査総面積は約850m²であった。

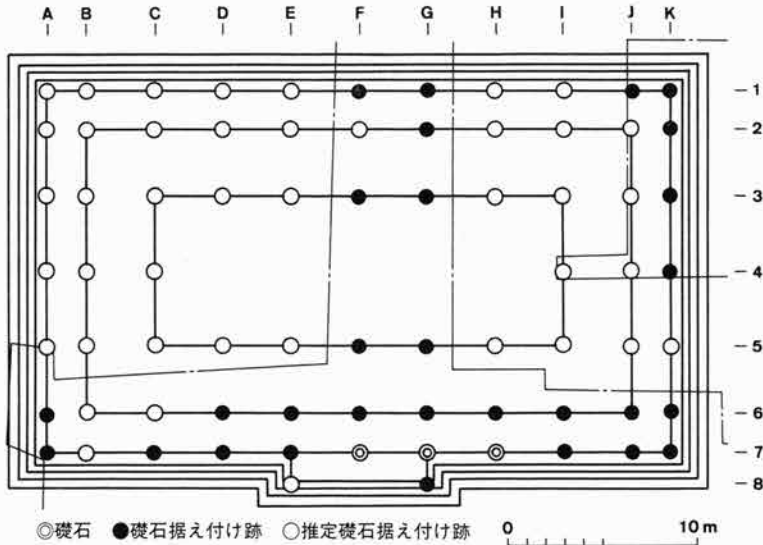
3. 検出遺構(第24図)

調査対象地全域には40~80cmの盛土層がみられ、下層には厚さ約30cm前後の耕作土層が存在した。耕作土は第1トレンチの南部では深く、北部では浅い地点で検出したことから、旧地形では敷地の中央部以北が南部に対して40cm前後の高まりを残していたことが判明した。この旧地形の高まりは、建物基壇部分に相当することが後に調査により確認された。

調査地内には平安時代の建物遺構に伴う礎石と礎石据え付け跡等のほか、近世以降の溝・土壇・井戸等の攪乱遺構が多数存在した。攪乱遺構は基壇上とその周囲に集中して認められ、検出した平安時代の建物遺構を各所で寸断していた。

建物遺構 住宅敷地内ほぼ中央に遺存する東西約33m・南北19.2mの規模をもつ建物1棟を検出した。建物遺構は、2間×6間の身舎に2重の柱を巡らせていることが判明した。この2重の柱列は廂と回縁であることが判明した。

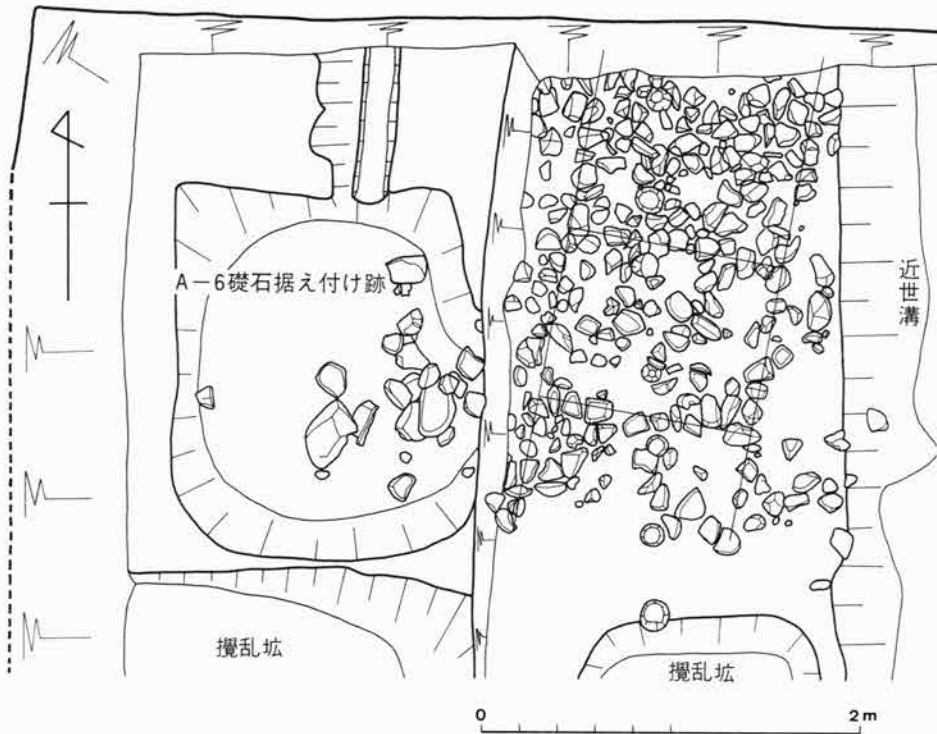
第1トレンチでは、トレンチ北部で建物遺構に伴う基壇と廂・回縁の礎石および礎石据え付け跡を検出した。また、建物遺構に付属する階段および雨落ち施設を検出した。基壇上では直径約2m前後の規模をもつ廂柱礎石据え付け跡7か所(D6~J6)を検出した(第25図参照)廂。の礎石据え付け跡内には根石が充填され、根石は長さ約40cm程度の大型の河原石を使用するものが多い。E6・G6・H6にみる礎石据え付け跡は、礎石が取り去られただけの状況を示すものとみられる。礎石据え付け跡内の根石は、最上部の根石が掘形の南側に片寄って集中する傾向をもつ。根石の上に据えられていた礎石も掘形の南側に位置していたと判断する。廂列の外側には回縁に相当する礎石据え付け跡12か所を検出した。回縁柱礎石据え付け跡は、建物の西南と東南のコーナー部分(A7・K7)を検出した(A7はトレンチ断面にて確認)。今回の調査では建物遺構の南部全体を調査でき、先述の両コーナーと中軸線を確定することができた。建物の中軸線上には柱が位置することが判明した。回縁



第25図 尊勝寺推定観音堂跡模式図

では中軸線上にF7が位置し、礎石の遺存も認められた。今回の調査では回縁部分F7・G7・H7で花コウ岩製の礎石(直径0.8~1m前後)を検出している。H7の礎石は、上部に直径40cmの円形柱座を削り出していた。柱座の加工は、G7では東南部にのみ認められ、F7は加工を施していなかった。各礎石間の中心距離は12尺(3.6m)等間の間隔を保っていた。回縁部分の礎石据え付け跡は廂に比べて、掘形・根石の状況は小規模である。掘形は直径約1.2m前後、根石は20cm前後の石を使用していた(図版第27・1)。中軸線上F7からK7まで55尺(16.5m)であることから、この建物遺構は東西110尺(33m)の規模をもつことが判明した。回縁礎石の軸線は亀腹基壇の下縁ラインと同一であった。基壇下縁から外側2尺(60cm)は犬走りとみられる平坦地が巡り、さらに外周には2条の石列が並走していた。

検出した2条の石列は、建物遺構に伴う雨落ち溝に付属する石列と判断される。石列の石材は20~30cm前後の河原石を使用し、平坦面を上面にして据えている。内側の石列は2個の石を並走させ、石列幅は約40cmを測る。外側の石列は2~3個の石を並走させ、石列幅は約50cmを測る。2条の石列間は浅く掘り込まれ、配石は認められない。2条の石列間は約45cmの間隔を保っている。2条の石列は、回縁柱礎石G7の東南部で南へ大きく屈曲し、南側へ約40cm程度の突出をみせている。この突出部は、外側石列の外周でみると、東南コーナーの石から西南コーナーの配石掘形までの間10.6mを測った。内側石列の内周は8mを測った。この雨落ち溝の突出部は建物遺構の階段施設部分に相当すると判断できる。階段部分、G7礎石の南約1.6m(内側石列部分)には直径約30cm・深さ約50cmの柱穴跡が認められた。この柱穴は階段を支えた柱の存在を示すものとみられる。



第26図 建物基壇地業石敷実測図

第2トレンチでは、建物遺構の東北部を調査地の西端部で検出した。検出した遺構は、回縁柱礎石据え付け跡5か所と雨落ち溝に伴う石列の一部である。礎石据え付け跡は、回縁の東北コーナー部(K1)を検出している。建物遺構の東部、回縁部南北両コーナー(K1, K7)を検出したことから、建物遺構は南北の梁間が64尺(19.2m)の規模をもつことが判明した。

第1トレンチ中央部以北で実施した拡張部の調査では、身舎柱4か所・廂柱1か所・回縁柱2か所・計7か所の礎石据え付け跡を確認した。身舎柱礎石据え付け跡は廂部分と同様な規模をもつ。G3は掘形の直径が約2.5mの規模をもち、根石も存在しなかったことから、この掘形は礎石と根石の抜き取り跡とみることができよう。建物遺構の中軸線に位置する身舎柱礎石据え付け跡F3・F4間は26尺(7.8m)の間隔をもつことが判明した。

雨落ち溝に伴う石列は調査地内に認められなかった。石列に使用された石材は、他の調査地でも近世以降の攪乱等により、大部分が取り去られていたことから、建物遺構の北部でも同様な状況を示したものと判断する。南側階段部で検出した柱穴(G8)に対応する柱穴跡を検出していないことから、建物遺構の北側に階段施設は、当初から存在していなかったと判断する。

今回検出した建物遺構は、各礎石および礎石据え付け跡の検出状況からみて、2間×6間の身舎に廂と回縁を巡らせることが判明した。身舎の桁行6間分は12尺等間の柱間中心距離を取ることが判明した。身舎の梁間はF3・F5間が26尺を測ったことから、柱間1間分は13尺の距離を測ることが判明した。身舎柱と廂柱間は13尺(3.9m)・廂柱と回縁柱間は7尺(2.1m)の間隔を取ることが判明した。

基壇 今回検出した建物遺構は、亀腹基壇上に築かれていることが判明した。旧地表面は東北から西南方向に急傾斜をもって下がる地形であることが、断面観察により確認できた。第2トレンチは白川砂(白黄色系)の地山面が広がり、第1トレンチ南部は版築状の整地層が厚く認められた。基壇の高まりは建物遺構の南部で確認できたが、東部と北部の両地点では地山(整地面)と同一レベル(標高約47.9m)で検出した。もともと基壇は傾斜地に築かれたとみられ、基壇の東北部と西南部の比高差は約60cmを測った。基壇は黒色系の粘質土による版築によって築かれている。版築層の厚みは4～10cm前後である。亀腹南斜面部には褐色系の粘土による版築が認められた。版築層は、旧地形と同様に西南方向が低まる状況がみてとれた。

地業 調査地の西南部は平安時代以前は湿潤な地であったとみられ、有機物を含む暗灰色系の粘質細砂層の広がりが、整地層下に認められた。旧地形における低位部分に版築工法的な整地を行っている。整地層は黄色系・褐色系・黒色系の粗砂を使用し、50cm前後の厚さをもっていた。基壇はこの整地層に続くものであったが、整地部分の各版築は15cm前後の厚さをもつ。基壇部分では、基壇の内側最下面に川砂利が3cm前後の厚みで敷かれ、砂利層の上部に拳大の円礫を敷きつめていることが判明した。石敷きは基壇の最下部に認められ、基壇上部では所々に円礫が存在する程度であった。基壇下部の石敷きは約20cm程度の厚さをもつ。

地業の石敷きは基壇の西南部と拡張部の各遺構底部で部分的に確認しただけである。基壇の西南部では、東西約4m・南北約2.5mと限られた範囲であったが、石敷きの敷設状況を確認した。石敷きを含む基壇は南北方向に延びる近世溝(幅約1.5m)によって寸断されていた。礫を敷くにあたっては短冊形の単位をもって実施されたものとみられる(第26図)。南北方向に延びる石列状の配石状況がみてとれる。石列間は約1.4mの間隔をもっていた。

その他の遺構 建物遺構に伴うとみられる土坑(SK01)と瓦溜め9か所(SX01～09)を検出した。SK01は、回縁柱礎石据え付け跡(K8)の東南約2.7mの地点で検出した。土坑は方形であり、一辺約1.5mと2.1mの規模をもつ。土坑は内側へ斜めに掘り込まれ、坑底はほぼ水平を保ち、整地面から約1.7mの深さをもっていた。土坑の西北部は近世の井戸によってコーナー部が断ち切られていた。土坑内からの出土遺物は少なく、布目瓦片と土

師皿片が少量出土しただけであった。土坑は、建物遺構に伴う雨落ち溝の石列東南コーナーに接して存在したものとみられる。

瓦溜め(SX01~09)は、建物遺構の周囲から検出し、基壇に瓦溜めはみられない。SX01は、階段施設部分の基壇下端に認められた瓦溜めであり、掘り込み遺構は認められない。この瓦溜め内には第27図12にみる軒丸瓦が多量に存在した。また、丸瓦・平瓦とも大型破片の出土が多い。SX01以外の瓦溜めはすべて掘り込みによるものであった。SX06・07・08には軒先瓦が比較的多く含まれており、SX08には第28図17にみる軒丸瓦が多数含まれていた。

(竹原一彦)

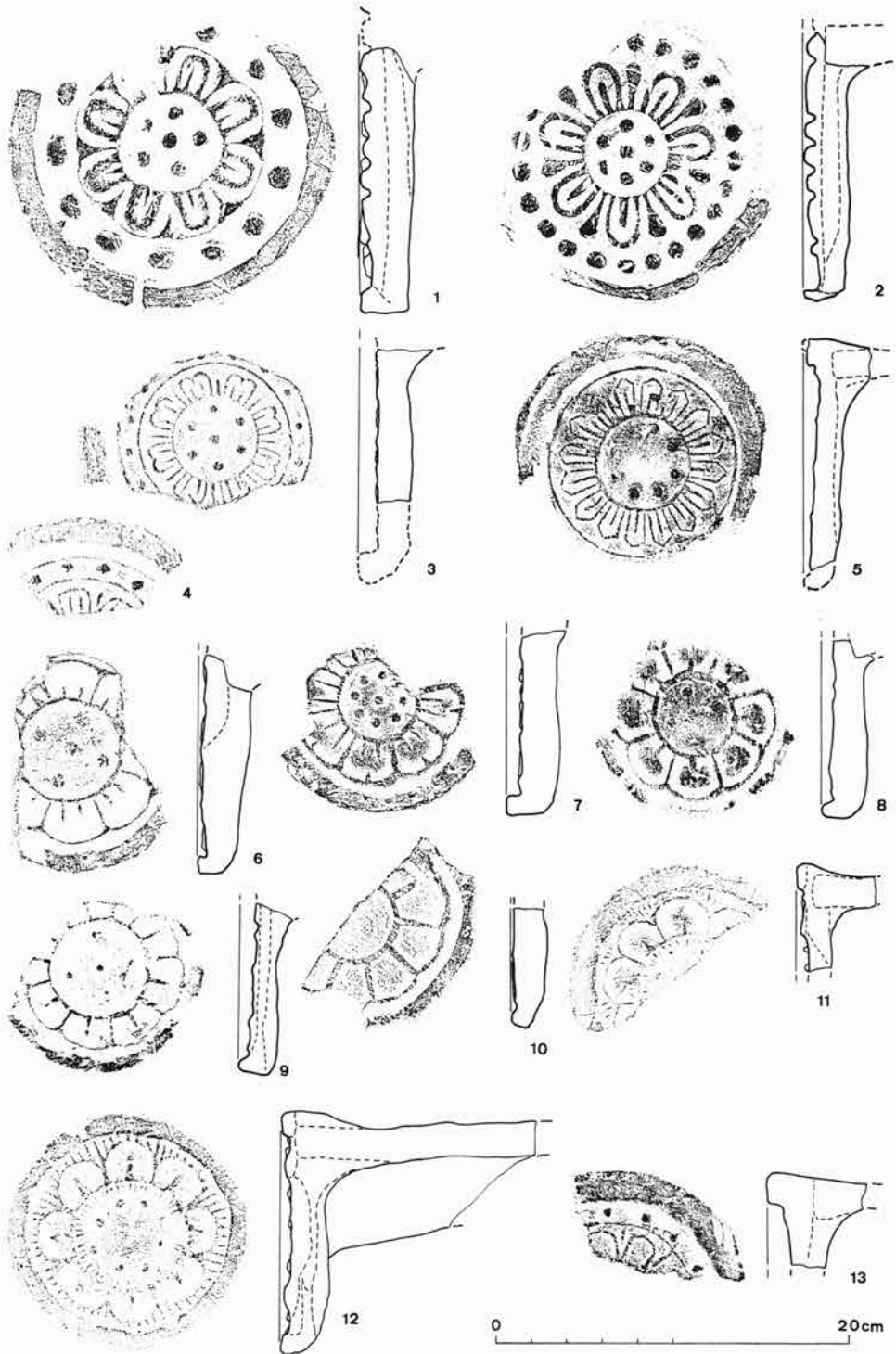
4. 出土遺物

今回の調査では、多量の瓦とともに金属製品・土師器・緑釉陶器等の遺物の出土をみた。出土遺物のうち、大部分を占める瓦は、9か所の瓦溜りを中心に整理箱約400ケース分のにぼった。

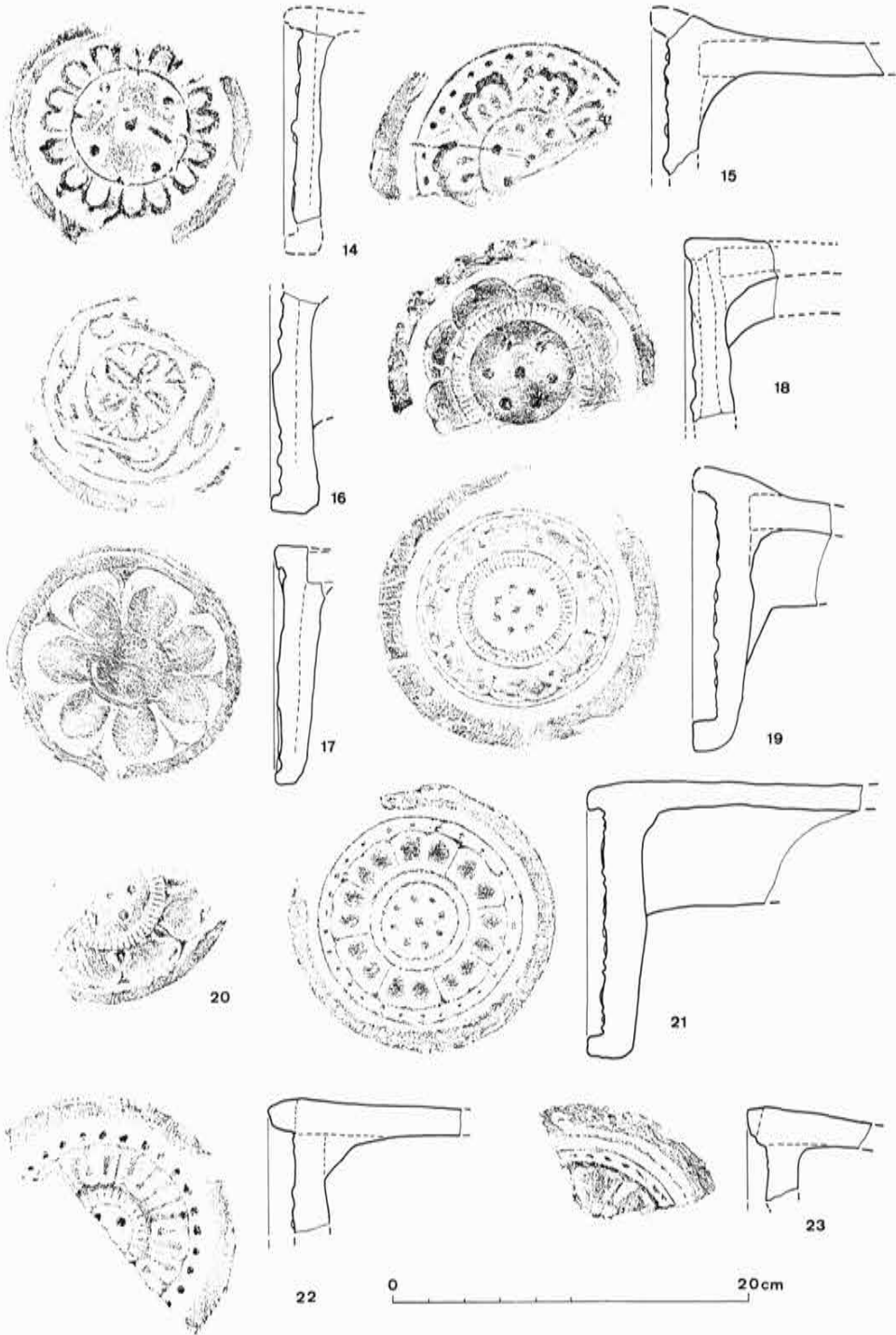
瓦類 大半は丸瓦・平瓦が占めるが、中には軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦片などを認めた。また丸瓦・平瓦中には、印刻(スタンプ)・ヘラ記号を施したものや、平瓦の凸面に0.5cm程の段を有する、いわゆる有段の平瓦片も確認している。瓦類の整理作業は、その量の膨大さのためはかどっておらず、ここではとりあえず、現在までに確認しえた軒瓦類を中心にその概要を報告する。^(注4)なお、現在までのところ軒瓦のうちで瓦当文様の判明したものが軒丸瓦43種類6点、軒平瓦39種類107点を認めた。

軒丸瓦 1・2は大型の単弁蓮華文軒丸瓦である。1は単弁八葉蓮華文、2は単弁七葉蓮華文を内区主文とする。共に文様は深い。1はナデを基調として成形され、2は瓦当周縁部下端をヘラ削りするほかはナデで仕上げる。生産地不詳。

3~12は、瓦当裏面下半を粗いナデで仕上げ、指押さえ痕を明瞭に残すという共通性をもつ一群である。焼成はやや軟質で、黒灰色・暗灰色・淡褐色を呈するものが多い。瓦当文様としては、3・4が線的表現による小型の花弁からなる複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、5はいわゆる剣頭文状の花弁を有す単弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。また、6~9は、幅広で互いに接する花弁を持ち、6・7は棒状の子葉を2つ置く複弁八葉、8・9は1つ置く単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。10は、太い輪郭線のみで表現された無子葉単弁十葉蓮華文で、中房蓮子など表現されておらず、簡略的なものである。11・12は、単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、中房部周縁及び外区に雄蕊帯状の放射線文を配す。これらは、手法的にナデを基調として成形されるが、瓦当周囲に縄叩き痕を残すものもある(9・11・12)。以上の諸特徴は京都近郊産(中央官窯系の製品)とされているものに共通すると思われる。



第27図 軒丸瓦拓影 (1)



第28图 軒丸瓦拓影(2)

13~15・17も上記の一群と類似した特徴を有す。ナデを基調として成形され、遺存する例では瓦当裏面下半に指押さえ痕を残している。この点、上記の一群と同様の生産地の製品であることをうかがわせるが、類似した文様例などに乏しく充分検討を要す。13・14は輪郭線のみで表現される単弁蓮華文だが、花卉の形態はこの時期の京都近郊産の軒平瓦にみる先端がやや丸味を帯びた剣頭文に近いと思われる。17は、飛鳥時代末様式的な、花卉の中央がやや凹む無子葉弁によって構成される単弁七葉蓮華文軒丸瓦である。

16は、小型の単弁五葉蓮華文の周囲に簡略化した唐草文を配す特異な瓦当文様をもつものである。焼成は良好で、暗褐色を呈す。生産地は不詳。

18は、幅広の花弁をもつ無子葉単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。焼成はやや軟質で乳灰色を呈す。瓦当周囲及び裏面はナデを基調として成形を行うが、瓦当周囲の一部に縄叩き痕を認めた。生産地は不詳だが、瓦当文様の類例や瓦当周囲の縄叩き痕から讃岐系の製品の可能性も指摘しうる。

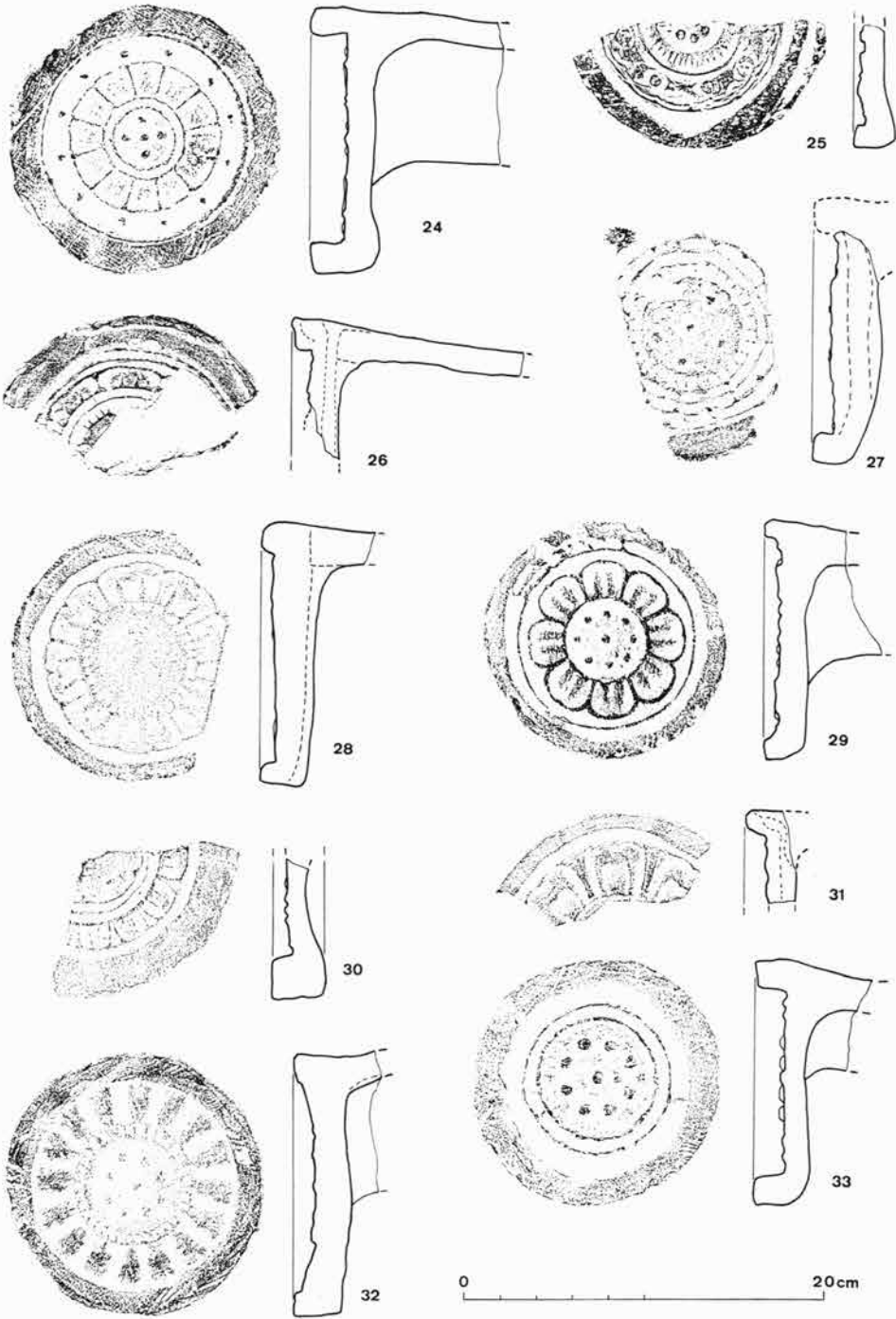
19~33は、従前の研究成果などにより、同一文様例が播磨系の製品であることが確認されているもの及び手法・文様・焼成度などの特徴からほぼ同系の製品と考えて良いと思われる一群である。焼成は硬質で、須恵質を呈するものが多く、瓦当周囲・裏面は丁寧なナデによって仕上げられている。また、瓦当面には離れ砂の使用が認められる場合が多く、瓦当裏面下端部付近が突出するもの(24・25・30)も見受けられる。瓦当文様としては、概して、幅広で高さのある周縁を有し、中房部周縁に雄蕊帯ないしはそれが簡略化され二重の圏線となった文様帯を配す場合が多い。19~27は、先の18を祖型とする花卉の複弁化やその表現の簡略化が想定され、一連の瓦当文様の系譜が指摘されているものである。32・33はあまり類例を見ないものだが、ここでは焼成度という特徴から本群と判断した。検討の余地もある。

34は、焼成は軟質で灰黒色から暗灰色を呈する。瓦当文様や瓦当面に離れ砂を使用している点で上記の播磨系の製品との類似性を指摘しうる面もあるが、十分な検討を要す。

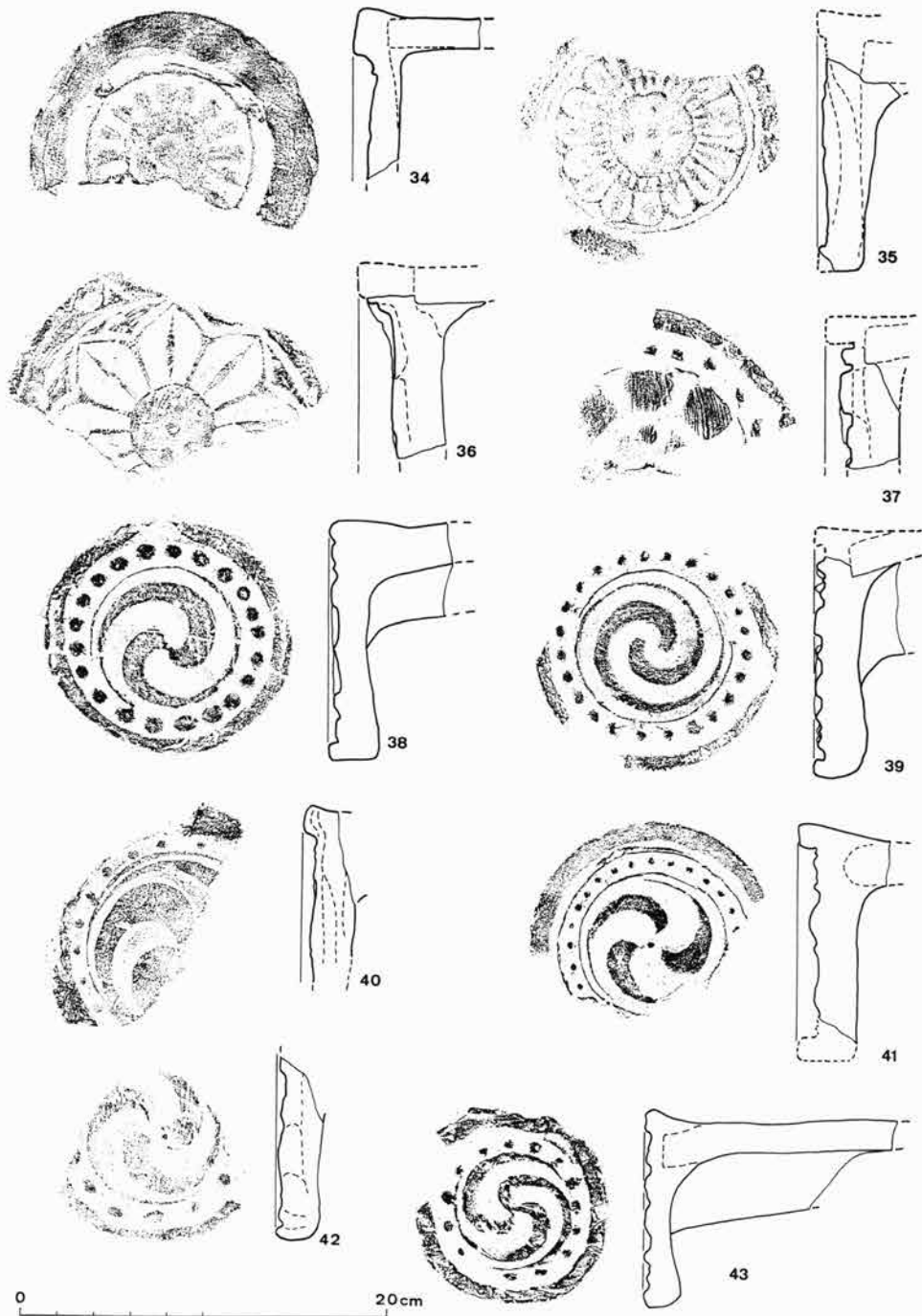
35は、焼成は軟質で、灰黒色を呈する。瓦当周囲・裏面ともナデによって成形されているが、各面とも比較的平滑に仕上げられている。同一文様例に大和産(南都系の製品)と報告されている例を認めたが、^(注5)手法・瓦当文様の特徴を踏まえた上で十分な検討を要す。

36は、従来から讃岐系の製品と認識されている、大型の単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。焼成は良好で、乳灰色を呈する。瓦当周囲・裏面はナデを基調として成形される。

37は、それぞれが独立した幅広で肉厚の無子葉弁からなる単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。焼成は良好で、乳灰色を呈する。花卉の表現などは、丹波系の製品に近似するようだが、文様全体としては類例を欠き、生産地不詳。



第29図 軒丸瓦拓影(3)



第30図 軒丸瓦拓影(4)

38～43は、巴文軒丸瓦である。38・39は二ツ巴文、40～43は三ツ巴文である。いずれも焼成はやや軟質で、ナデを基調として成形される。巴文軒丸瓦については、未だ十分な検討が行えていない。なお、41は大和方面(南部系)の製品、43は京都近郊産(中央官窯系)の製品と思われる。

軒平瓦 1～8は、いわゆる折曲式・半折曲式と呼ばれる製作技法による一群である。瓦当面にはその特徴とされる平瓦部凹面から続く布目圧痕を部分的に確認した。焼成はやや軟質で暗灰色ないし淡褐色を呈する。3のみ、平瓦部凸面側から瓦当顎部にかけて別粘土を足しており、半折曲式とされる技法に属すと考えられる。それ以外は、いずれも完成された折曲式によっている。京都近郊産(中央官窯系の製品)であろう。

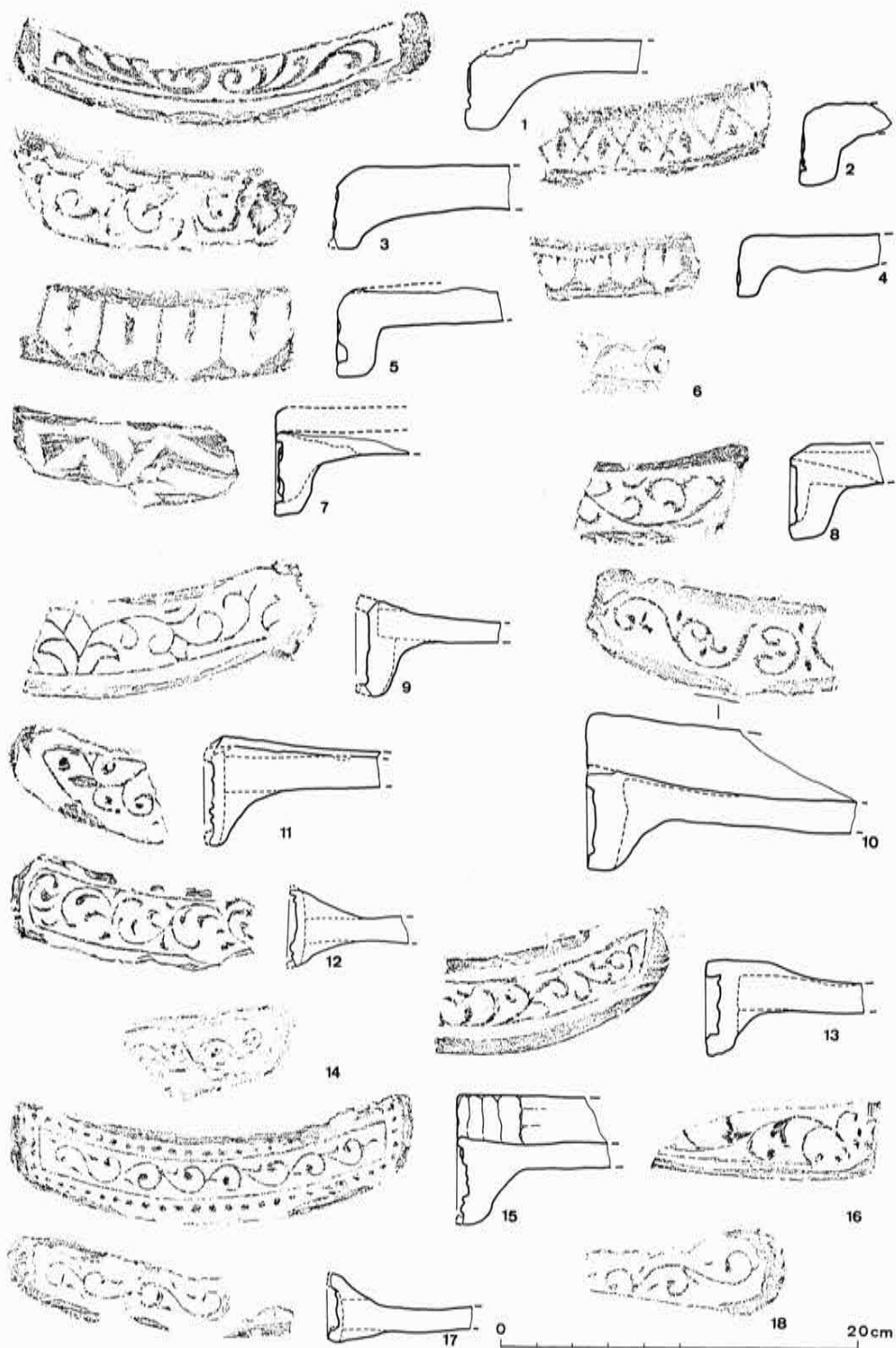
9～27は、硬質に焼成され須恵質を呈す点で、他からは明確に分類される一群である。製作手法をみても、播磨系の製品の特徴とされるいわゆる包み込み技法によっている点で他からは抽出すべきものである。瓦当文様は、9～11が比較的古式と思われる均正唐草文で、その他は簡略化した偏行唐草文や均正唐草文を用いる。手法的にも、前者は瓦当裏面の先端近くに平瓦を接合するのに対し、後者は瓦当裏面中位に平瓦を接合している点後者がやや新様を呈しているようである。27は巴文軒平瓦である。

28は、簡略化した均正唐草文軒平瓦の左半分である。大ぶりの製品で、瓦当周囲はヘラ削りによって仕上げられる。瓦当文様は、従来から讃岐系の製品として認識されていたものである。しかし、当系列の製品は多くの場合段顎を呈さないのに比して、本例は段顎状を呈しており、若干の疑問点も残る。

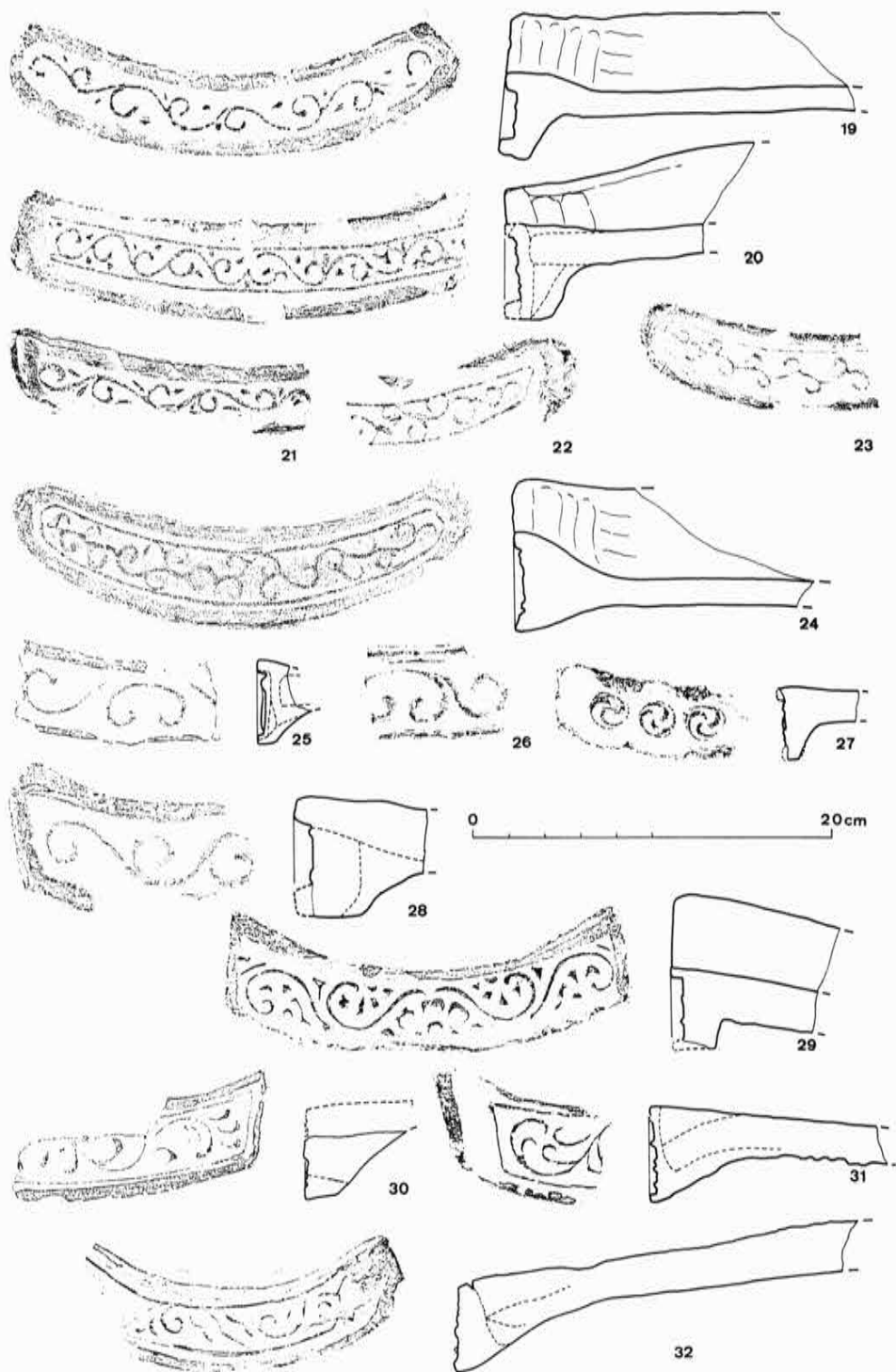
29は、型式化した半截花文を中心飾りとした均正唐草文軒丸瓦である。文様はシャープに表現される。瓦当周囲も非常に平滑に仕上げられ、整った段顎を呈している。焼成は良好で、暗灰色を呈する。瓦当文様などの特徴から、備前・備中方面の製品と考えられる。

30～37は、現在のところ明確に生産地を固定しえないものであり、今後の十分な検討を必要とする。

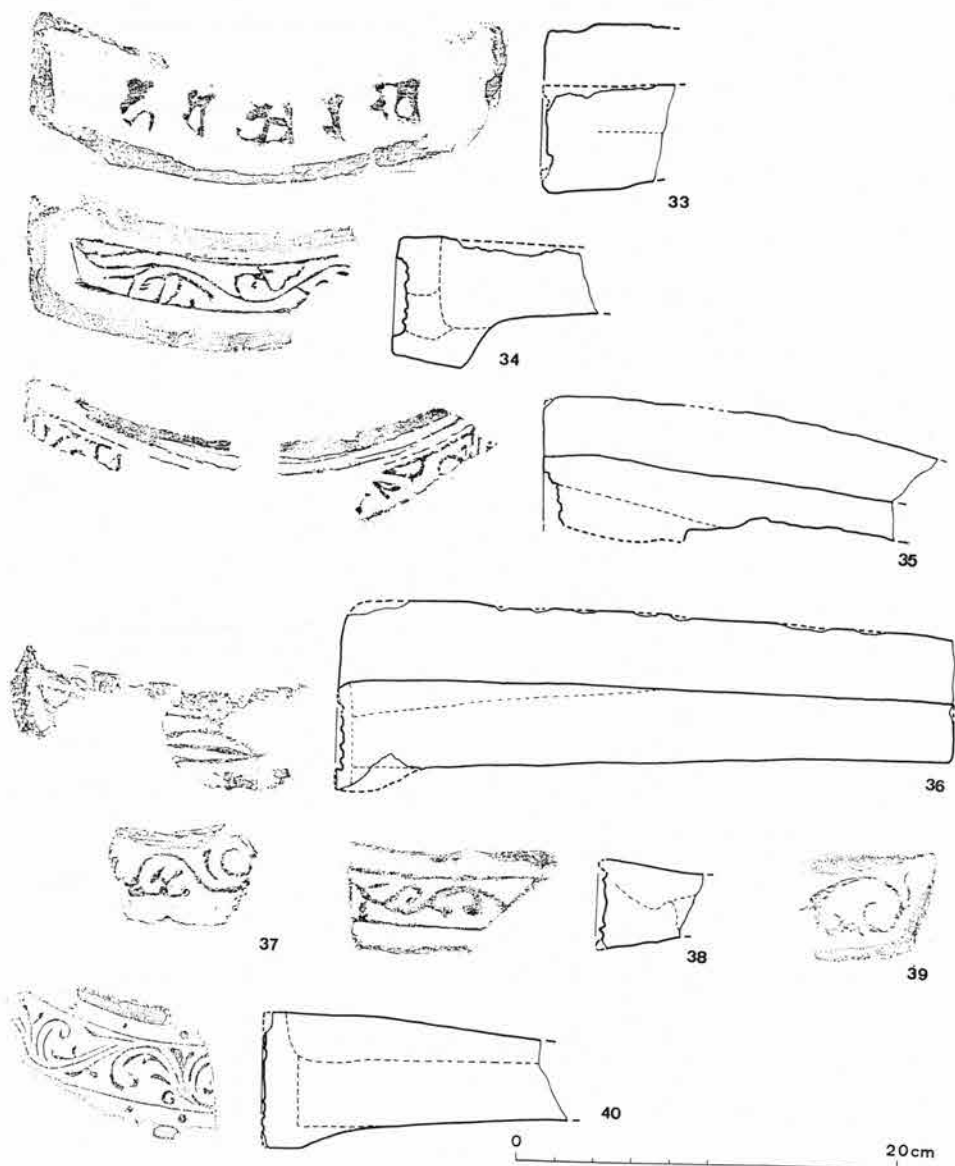
30～32は、いずれも平瓦凸面から瓦当顎部にかけて一連の斜格子叩きが施されている点で類似した製作手法によっていると認識されるものである。焼成は硬質で須恵質を呈している点で、播磨系の製品との共通性をみるが、破面の観察から想定しうる瓦当部の作成手法は、これと明らかに異なっている。30が、平瓦広端部凸面側に粘土魂を足すことによって瓦当部を作成するのに対し、32は、平瓦広端部・瓦当面用の粘土・顎部用の粘土の3者を接合し瓦当部を作成する。また31は、平瓦広端部と瓦当面用の粘土を凹・凸両面からの補強粘土を用いて接合する手法によっている。なお、35は瓦当顎部を欠損するものであるが、須恵質に焼成されている点、平瓦凸面に格子叩きを施している点でこの一群と類似性



第31图 軒平瓦拓影(1)



第32図 軒平瓦拓影(2)

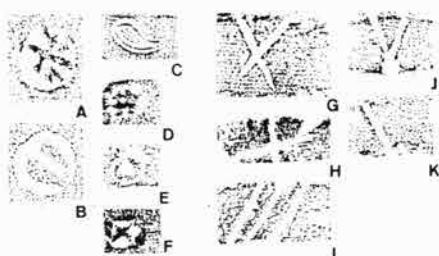


第33図 軒平瓦拓影(3)

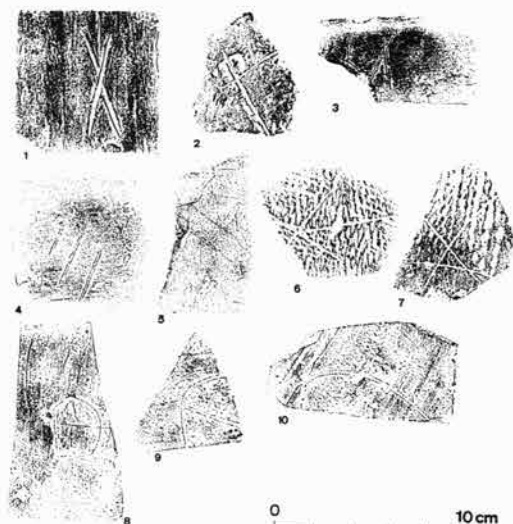
を持つ。ただ、瓦当部の作成に際して、平瓦とほぼ同じ厚さの粘土帯を張りつけていることにより顎部を形成している点で特徴を有する。

33は、梵字文軒平瓦である。段顎を呈さず、平瓦部から徐々に厚味を増し瓦当部へ至る。焼成はやや軟質で、暗灰色を呈する。同様の製作手法によるものとして37・38がある。

34は、かなり形骸化した唐草文を主文とする軒平瓦である。瓦当部は厚味のある平瓦と瓦当面用の粘土・顎部を構成する粘土を接合して作成している。



第34図 印刻・へら記号拓影(1)



第35図 印刻・へら記号拓影(2)

39は、唐草文軒平瓦の右端部片で、やや大ぶりの製品である。瓦部面の一部を残す小片だが、その形態から丹波系の製品の可能性もある。

40は、平安時代前期に属する均正唐草文軒平瓦である。今回検出した建物跡が尊勝寺・観音堂である立場に立てば、本資料はこれに伴うものではなく、何らかの要因によって混入したと理解すべきだろう。

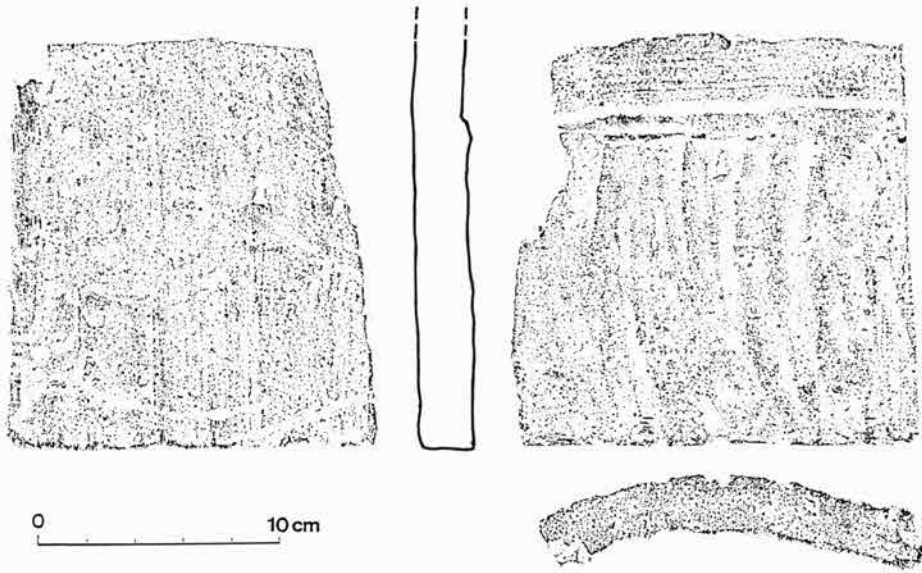
その他 先にも述べたように出土した瓦類の多くは丸瓦・平瓦が占めている。ここでは整理作業の都合もあり、これらの報告は割愛したが、その中には印刻(スタンプ)・へら記号を施した資料をいくつか認めたので、それらについては図示した(第34・35図)。現在までのところ印刻は6種類、へら記号は、5種類を確認している。また平瓦

中には、有段の平瓦片を2点確認している(第36図)。平瓦広端部側から約15cmの凸面側に約0.5cmの段が付加されるもので、焼成は良好で暗青灰色を呈す。凸面には縄叩き痕を認める。

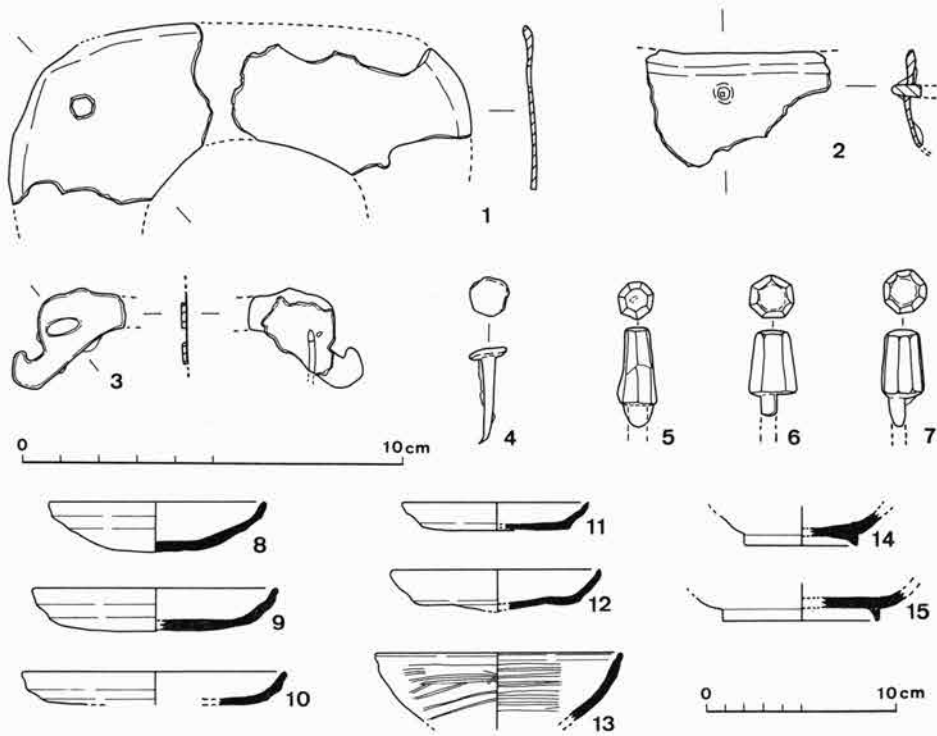
以上が出土した古瓦類の概略である。ここでは軒瓦の様相について簡単に問題点を整理しておく。

量的な面(付表5)からみると、播磨系の製品と京都近郊産(中央官窯系の製品)と考えられるものが多くを占め、少量ずつではあるが讃岐、備前・備中、丹波(?), 大和(?)系列の製品が認められた。今回検出した建物跡が尊勝寺・観音堂であるならば、『中右記』康和4年条によると、尊勝寺造営が国充制によったうちの伊与国の担当にあたり、播磨国が造営を担当した尊勝寺旧境内南半部に比して播磨系の製品が少ないと思われる地区に相当する。ところが、今回の調査区から出土した古瓦類では京都近郊産(中央官窯系の製品)が比較的目立ったものの、播磨系の製品も多くを認めた。

また、時期的な面を出土量の多い播磨系の軒平瓦・京都近郊産の軒平瓦からみると、



第36図 有段平瓦拓影



第37図 出土遺物実測図

1~3. 金銅製裝飾金具, 4. 銅製釘, 5~7. 銅製釘隠し, 8~12. 土師器皿,
13. 瓦器碗, 14・15. 緑釉碗

付表5 軒丸瓦個体数一覧

番号	生産地	個体数	番号	生産地	個体数
1	不明	2	23	播磨系	1
2	不明	1	24	播磨系	2
3	中央官窯系	1	25	播磨系	1
4	中央官窯系	1	26	播磨系	1
5	中央官窯系	9	27	播磨系	1
6	中央官窯系	5	28	播磨系	2
7	中央官窯系	3	29	播磨系	3
8	中央官窯系	2	30	播磨系	1
9	中央官窯系	2	31	播磨系	4
10	中央官窯系	2	32	播磨系	3
11	中央官窯系	3	33	播磨系	1
12	中央官窯系	18	34	播磨系か	1
13	中央官窯系か	2	35	不明	1
14	中央官窯系か	2	36	讃岐系	1
15	中央官窯系か	1	37	不明	1
16	不明	1	38	不明	6
17	中央官窯系か	10	39	不明	5
18	不明	1	40	不明	1
19	播磨系	4	41	大和(南部)系	1
20	播磨系	2	42	不明	1
21	播磨系	3	43	中央官窯系	1
22	播磨系	1		合計	115

付表6 軒平瓦個体数一覧

番号	生産地	個体数	番号	生産地	個体数
1	中央官窯系	3	23	播磨系	1
2	中央官窯系	2	24	播磨系	1
3	中央官窯系	2	25	播磨系	2
4	中央官窯系	2	26	播磨系	1
5	中央官窯系	13	27	播磨系	1
6	中央官窯系	1	28	播磨系	2
7	中央官窯系	2	29	備前・備中系	1
8	中央官窯系	2	30	不明	1
9	播磨系	1	31	不明	1
10	播磨系	1	32	不明	1
11	播磨系	2	33	和泉・河内系?	1
12	播磨系	1	34	不明	1
13	播磨系	3	35	不明	1
14	播磨系	1	36	和泉・河内系	2
15	播磨系	2	37	和泉・河内系	1
16	播磨系	2	38	和泉・河内系	1
17	播磨系	1	39	丹波系?	1
18	播磨系	2			
19	播磨系	2			
20	播磨系	1			
21	播磨系	1			
22	播磨系	1		合計	68

個体数は整理作業の都合上、2月28日段階に明らかとなったもので、それ以後については、型式数・個体数とも増加しているが記入できない。

また、型式名称も、図面番号を仮の型式名として使用し、同文品などの検討を踏まえ改めて、型式名を設定し、報告したい。

播磨系の軒平瓦では、従来の認識によるとやや古式(尊勝寺創建期)に属すると考えられるものは9~11に限られ、多くのものは文様的にも手法的にも創建期以降(12世紀後半)とされてきたもので占められている点、京都近郊産の軒平瓦でも、多くが完成された折曲式の技法によっていることから12世紀後半~13世紀初め頃の時期が考えられる点の2点が指摘できるのである。

このように、使用されていた軒瓦の生産地毎の量的な面、それらにあたえられている時期的な面のいずれをとってみても、今後の十分な検討を必要とする内容を有している。

本資料は、先述のようにまだ十分な整理作業ができておらず、詳しくは機会を改めて報告する予定であり、その際、上記の問題点についても改めて検討を行いたい。

(森下 衛)

金属器(第37図1~7) 出土した金属器には、飾金具と釘がみられる。1~3は金銅製の飾金具である。3点とも建物遺構に伴う階段部雨落ち石列付近から出土している。いず

れも破片であるため、全容は不明である。1・2は外周部を肥厚させ、内側へ少し折り曲げる形態をもつ。表面は平滑に仕上げ、表面の全面に鍍金を行っている。板面は1~1.5mmの厚みをもち、直径5mm前後の釘止め穴をもつ。2には鉄製釘の一部が錆着した状態が残っていた。3は1.5~2mmの厚みをもち、表面には厚い鍍金が行われている。裏面には薄い銅板が残っていたことから、この金具は銅板上に貼り付けられていたものとみられる。これら3点は、出土した地点が雨落ち溝部分であったことから、建物の軒先建築部材を飾っていた金具とみられよう。釘には銅製と鉄製の2種類の材質がみられる。4は銅製釘であり、今回の調査ではこの1本のみ出土した。鉄製釘は数10本の出土をみている。5~7は鉄製釘の頭部を飾った青銅製とみられる釘隠しであり、4点の出土をみた。頭部は丸みをもち、6面体の側面をもつ。釘隠しには細長いものと太く短いもの2型体が認められる。

土器(第37図8~15) 全体的には極めて少量ではあるが、土師器皿・瓦器椀・施釉陶器の出土をみている。8~12は土師器の皿である。皿は口径12cm前後を測るものが多数を占める。8~10は体部外面を2段にわたって横ナデを行う。一部の皿は口縁部にススの付着があることから、燈明皿とみることができよう。1~12の皿は、いずれも瓦溜めから出土したものである。13はS X08の瓦溜めから出土した瓦器椀であり、口径は13cmを測る。14・15は緑釉椀の底部である。施釉は輪高台の内側にまで施釉する。

5. ま と め

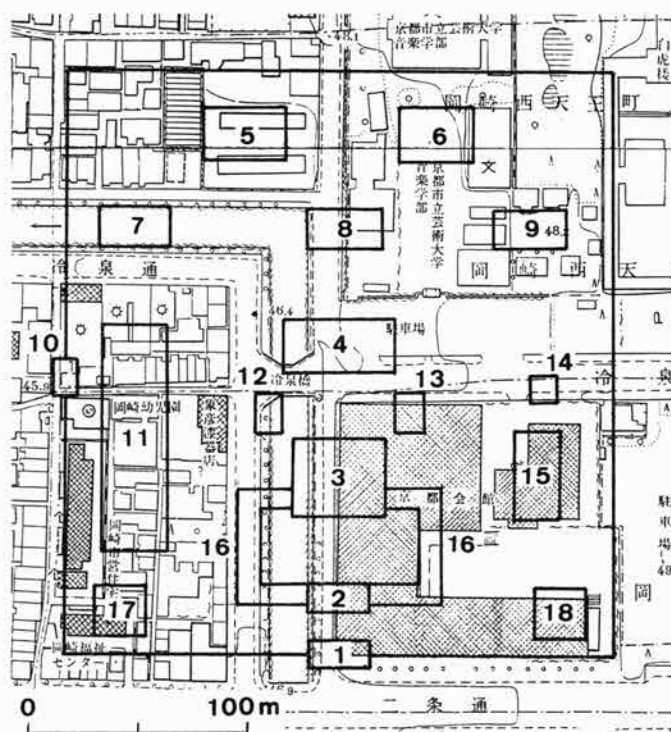
調査の結果、尊勝寺の主要伽藍の一つとみられる建物跡1棟を検出し、かつ、建物跡に伴う階段施設のほか、雨落ち溝や瓦溜めを認めた。

建物跡は、西北部分を除く残り3か所のコーナーを検出し、拡張調査により建物跡の北部の状況が把握できたことから、建物跡の全様をほぼつかむことができた。検出した建物跡は東西棟の建物跡であり、2間×6間の身舎に廂と回縁を巡らせていたことが判明した。身舎を巡る2重の柱は廂・孫廂とみることができ、外側の柱は孫廂とするには廂柱との間隔が7尺と短いことから、回縁柱とみることができよう。建物跡の規模は、身舎の桁行6間(12尺等間)・梁間2間(13尺等間)を測ったことから、身舎全体では桁行72尺(約21.6m)・梁間26尺(約7.8m)の規模をもつことが判明した。身舎を巡る廂は13尺(約3.9m)、廂から回縁まで7尺(約2.1m)を測ったことから、建物跡全体では桁行10間(110尺一約33m)・梁間6間(64尺一約19.2m)の規模をもつ建物跡が復元できた。廂から雨落ち溝までは13尺(約3.9m)を測ることから、廂にはある程度の組み物が存在したと考えられる。回縁部分に遺存していた礎石には、材質・加工等に若干の異なりをもっていた。階段内に隠

れる礎石(F7)は淡い黄色系の花コウ岩を自然石のまま使用していた。残るG7・H7にみる花コウ岩製の礎石は、白色系の石材を使用している。この礎石には円柱座の加工がみられるが、加工の範囲は建物の外部からの視覚的効果の高い部分にのみ行っている。基壇は、その形態から亀腹基壇と呼ばれるものであった。亀腹は、地山を整地するとき建物の下だけを一段高く削り残し、その周囲を粘土としくいで整えるものである。検出した基壇は丁寧な版築工法によるものであり、傾斜部分には拳大の円礫を叩き込んでいた。しくいは使用された痕跡が認められず、褐色系の粘土が化粧土としてしくいの代りに使用されていたものと判断する。地業は、旧地形の傾斜面上に石敷きを行った後、版築による基壇を築いている。地業の石敷は、本例以外に同じ尊勝寺阿弥陀堂跡・鳥羽離宮九躰阿弥陀堂跡・同金剛心院跡等、平安時代後期の寺院跡の地業にみられる。これらの地業はいずれも掘り込み地業によるものである。この地業は当時の共通した工法とみることができよう。

検出した建物跡の時期については、『中右記』によれば尊勝寺の創建は康和4(1102)年であることから、この年には検出した建物跡も完成していたものと判断される。建物跡の廃絶時期は、建物跡に伴う遺構からの出土遺物からみた相対年代によって想定することができよう。各瓦溜めと雨落ち溝から出土した土器は、すべて12世紀中葉～末葉に比定されているものであった。^(注9)瓦では、軒瓦においては現在のところ12世紀後半代を示すものが大部分を占めていることが判明した。現在のところ創建期の瓦が少なく、建物廃絶段階の土器と瓦の年代観が大きく異なることは、瓦における従来からの年代観を再検討する必要がでてきたものとみられる。出土した瓦には焼けた痕跡がみられないことから、検出した建物跡は火災によるものではなく、他の原因により壊れたものと判断する。文治元(1185)年には大地震が平安京を襲い、多くの官舎仏寺の倒壊の記載が『玉葉』、『山槐記』、『古記』等にみられる。現段階では、この地震による建物の倒壊があった可能性が高いが、確定するにはいたらない。

多くの寺院では、主要伽藍の建物は桁行が奇数の間を取る例が大多数を占める。今回検出した桁行に偶数間をとる建物は希な例とみることができよう。本例以外に桁行偶数間をとるものには、飛鳥寺講堂・山田寺講堂・法隆寺講堂などが知られるだけである。3例とも飛鳥・白鳳時代の寺院であり、講堂にのみ偶数間をとる点での共通点のみみだせる。今回調査した建物跡は、規模・形態・寺域内の位置関係等、どれをとっても講堂とみることができず、特異な建物跡とみることができよう。寺院及びこれらの配置については、足立康・福山敏男氏等の研究があるが、近年の調査の成果により復元図の変更が余儀なくされるに至った。新たな調査成果をもとに復原した杉山信三氏案によれば、今回検出した建物跡は観音堂跡に比定される。今回の調査では、ほぼ杉山案のとおり礎石建物跡が検出さ



1. 南大門
2. 中門
3. 金堂
4. 講堂
5. 観音堂
6. 五大堂
7. 灌頂堂
8. 薬師堂
9. 曼荼羅堂
10. 西門
11. 阿弥陀堂
12. 鐘楼
13. 経蔵
14. 法華堂
15. 准胝堂
16. 回廊
17. 西塔
18. 東塔

第38図 尊勝寺伽藍配置推定図(杉山信三氏案による)

れ、第38図にみる復原図の正しさが証明されたかたちとなった。尊勝寺観音堂には丈六の六観音像が安置されていたことが『中右記』にみられ、検出した建物跡身舎も6間であることから、今回検出した建物跡は尊勝寺観音堂跡にまちがいないものと考えられる。

(竹原一彦)

注1 「尊勝寺跡発掘調査報告」(『平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡』奈良国立文化財研究所学報第10冊) 1961

注2 杉山信三ほか『尊勝寺跡発掘調査概報』六勝寺研究会 1973

注3 調査補助員(順不同)

橋本 稔・山尾 摂・長田康平・駒沢啓二・原口春美・藤原ひとみ
整理員

橋本 稔・山尾 摂・原口春美・丸谷はま子・森田令子・和田正子・西川悦子・石原俊子・
田中智子・桂 洋子・田代美穂子

注4 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」(『古代研究』13・14号 元興寺文化財研究所) 1978 以下の古瓦類の記述について、本書を参考とした。

注5 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981

注6 『六勝寺跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980

注7 『鳥羽離宮跡発掘調査概報』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982

- 注8 『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985
 注9 平安京左京跡(内膳町)S E288上層出土遺物に並行する。
 「平安京左京跡(内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』 京都府教育委員会) 1980
 注10 『飛鳥寺発掘調査報告書』 奈良国立文化財研究所学報第5冊 1958
 注11 「山田寺第3次(講堂・北面回廊)の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』第10冊 奈良国立文化財研究所) 1980
 注12 足立 康「尊勝寺の伽藍配置」(『建築史』3-3) 1941
 注13 福山敏男「六勝寺の位置」(『日本建築史研究』所収 墨水書房) 1968
 注14 『六勝寺跡発掘調査<推定尊勝寺阿弥陀堂跡>現地説明会資料』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1979 所収の推定復原図に一部加筆

補、文献にみる尊勝寺観音堂

1. 尊勝寺について

尊勝寺は、堀河天皇の御願寺として洛東の白川の地(現在の京都市左京区岡崎)に建立された寺院である。平安時代の終り頃には、次表のように、このほか五つの寺院が造られており、当時から一般に六勝寺と総称されている。六勝寺が建てられた白川の地は、鎌倉時代、特に承久の乱以降、次第に荒廃し、戦国時代以後はほとんど六勝寺の痕跡はわからなくなり、明治に至った。現在は、市街地化しており、寺院の痕跡は、地名として残っているにすぎない。

いわゆる六勝寺は、いずれも院政期に建立されたもので、鎌倉時代以降のものがないことが下記の表から窺える。なかでも今回調査した尊勝寺は、堀河天皇の勅願寺として建立されたもので、法勝寺の建立から約30年を経て計画された。いわゆる白河院政期に属する時期で、寺地も法勝寺のすぐ近くである。

尊勝寺の建立は、^(注1) 康和2(1100)年3月に造営日時が勘申されたのに始まる。『為房卿記』にはこの年の7月に法勝寺西隣の仏所にて仏像を作り始めたことがみえるので、この康和

付表7 六勝寺対照表

御願寺名	発願者	創立供養日時	備考
法勝寺	白河天皇	承暦元(1077)年12月18日	『法勝寺供養記』による。
尊勝寺	堀河天皇	康和4(1102)年7月21日	『中右記』による。
最勝寺	鳥羽天皇	元永2(1119)年12月17日	『中右記』による。
円勝寺	待賢門院璋子	大治3(1128)年3月13日	『帝王編年記』による。
成勝寺	崇徳天皇	保延5(1139)年10月26日	『帝王編年記』による。
延勝寺	近衛天皇	久安5(1149)年3月29日	『帝王編年記』による。

2年から造営が始まったようである。この間は、この時代の史料でもっとも詳しい『中右記』の記事が欠けているので詳しくはわからない。後に『中右記』の記事を引用するが、尊勝寺に仏像が安置されたのが康和4(1102)年6月29日であるから、約2年間で造営が進んだことになる。そして、翌月の7月21日には尊勝寺の供養会が行われている。

このように、比較的早い造営であったようであるが、この尊勝寺にはどのような堂宇が存在したのだろうか。供養会の時の記録をまとめたものに『尊勝寺供養記』という書物がある。^(注2)そこには、

又被補諸堂供僧等、大臣同以仰右大辨藤原朝臣令下知之、

金堂(分注略) 講堂(分注略) 灌頂堂(分注略) 薬師堂(分注略) 曼荼羅堂(分注略)
 五大堂(分注略) 観音堂(分注略) 御塔(分注略)

とあり、金堂・講堂・塔だけでなく、灌頂堂・薬師堂・曼荼羅堂・五大堂・観音堂といった諸堂のあったことが窺われる。

2. 尊勝寺観音堂

観音堂に安置された仏像については、『中右記』康和4年6月29日条に、「今日新御願寺御佛可被安置諸堂也、(中略)、構麻桂安置御佛、金堂、講堂、曼陀羅堂、薬師堂、観音堂、」とあって、観音堂のところの分注に次のような注目すべき記載がある。

丈六六観音像、去寛治七年於法勝寺薬師堂供養先了、今日被安置、

尊勝寺観音堂には、丈六の六観音像が安置されていたのである。しかも、それは、寛治7(1093)年に法勝寺の薬師堂で供養されたものであるという。『中右記』の記事は、承德2(1098)年から康和3(1101)年までが欠けているので、寛治7年に供養された六観音像がどのようなものであったか知ることはできないが、ほかの史料から少しだが窺うことができる。『阿婆縛抄』卷第九十六の六観音合行のところに、^(注3)「六観音形像并安置次第、処々不一准、」として尊勝寺観音堂の六観音像の配置が記載されている。

北
 千 聖 馬 。 十 不 如
 。 。 。 一 。 。

六観音像は、南に向いて安置されており、東から如意輪観音・不空鞮索観音・十一面観音・馬頭観音・聖観音・千手観音の順に並んでいたことがわかる。ただ、『阿婆縛抄』の同じところには、「理智房畫本」として尊勝寺観音堂の六観音像を東から如意輪観音・十一面観音・聖観音・千手観音・馬頭観音・准胝観音の順に並んでいたとしており、六観音像の中身が異なっている。仏像の形態が異なっていれば、このような異伝の生ずる余地は少ないと思われるので、あるいは、各仏像ともかなりよく似た形態のものであったかもしれ

ない。事実、法性寺観音堂の六観音像は、同じ『阿婆縛抄』に、「六観音皆共如聖観音像、」とあり、すべての観音像が聖観音像とほぼ同一の形態をしていたことが窺われる。この例から推測すると、尊勝寺観音堂の六観音像も六体ともよく似たものであった可能性が高い。また、異伝の方では、不空羂索観音に代わって准胝観音がはいっている。普通、准胝観音がはいるものを東密六観音といい、不空羂索観音のはいるものを台密六観音^(注4)という。この区別は、速水侑の研究によれば、11世紀のはじめには成立していたようであるが、実際には両者は混同して修されていた^(注5)という。現時点では、どちらの様式で並んでいたか決定することはできないが、六観音像が南向きに安置されていたことだけは確実であろう。

この観音堂にはこれ以外の仏像は安置されなかったのであろうか。例えば、同じ『阿婆縛抄』によれば、横川の恵心院では中央南向きに大日如来があって、左右三体ずつ観音像が並んでいる。また、日野の観音堂では、中央南向きに阿弥陀如来があり、やはり左右三体ずつに分かれて六観音像が安置されている。このように、中央に如来がきて、左右に三体ずつ観音像が並ぶという形態が普通のものである。しかし、尊勝寺観音堂では、『阿婆縛抄』による限り、観音像が六体のみで、ほかに仏像は置かれていなかったようである。このことは、先の『中右記』康和4年6月29日条に六観音像の記載しか見えないこと、更に『阿婆縛抄』の他の仏像があれば必ずその配置を示す性質等から考えて、確実であろう。

以上の仏像の配置状況からみて、尊勝寺観音堂は、桁行きが6間の偶数になる可能性が高い。今回、調査の推定観音堂も身舎の桁行きがやはり6間であったことが確認できたことから、観音堂である可能性が一層強くなった。ところで、この観音堂に安置された六観音像が座像か立像かは、はっきりしない。現存の六観音像は、立像のものが多い。しかし、『一六字経曼荼羅』等の絵画に描かれた六観音像では座像のものも見られる。また、『阿婆縛抄』によれば、法性寺観音堂・法成寺観音堂・尊勝寺観音堂・日野観音堂を記した後に、「已上皆坐像也、」とあり、これらの諸堂に安置された六観音像は、すべて座像であったと解釈できなくもない。ただこの字句は、日野観音堂にある六観音像のみにかかっていると解釈できるので、『阿婆縛抄』の記載からだけでは座像とも立像とも決定することはできない^(注6)。

(土橋 誠)

注1 『中右記目録』

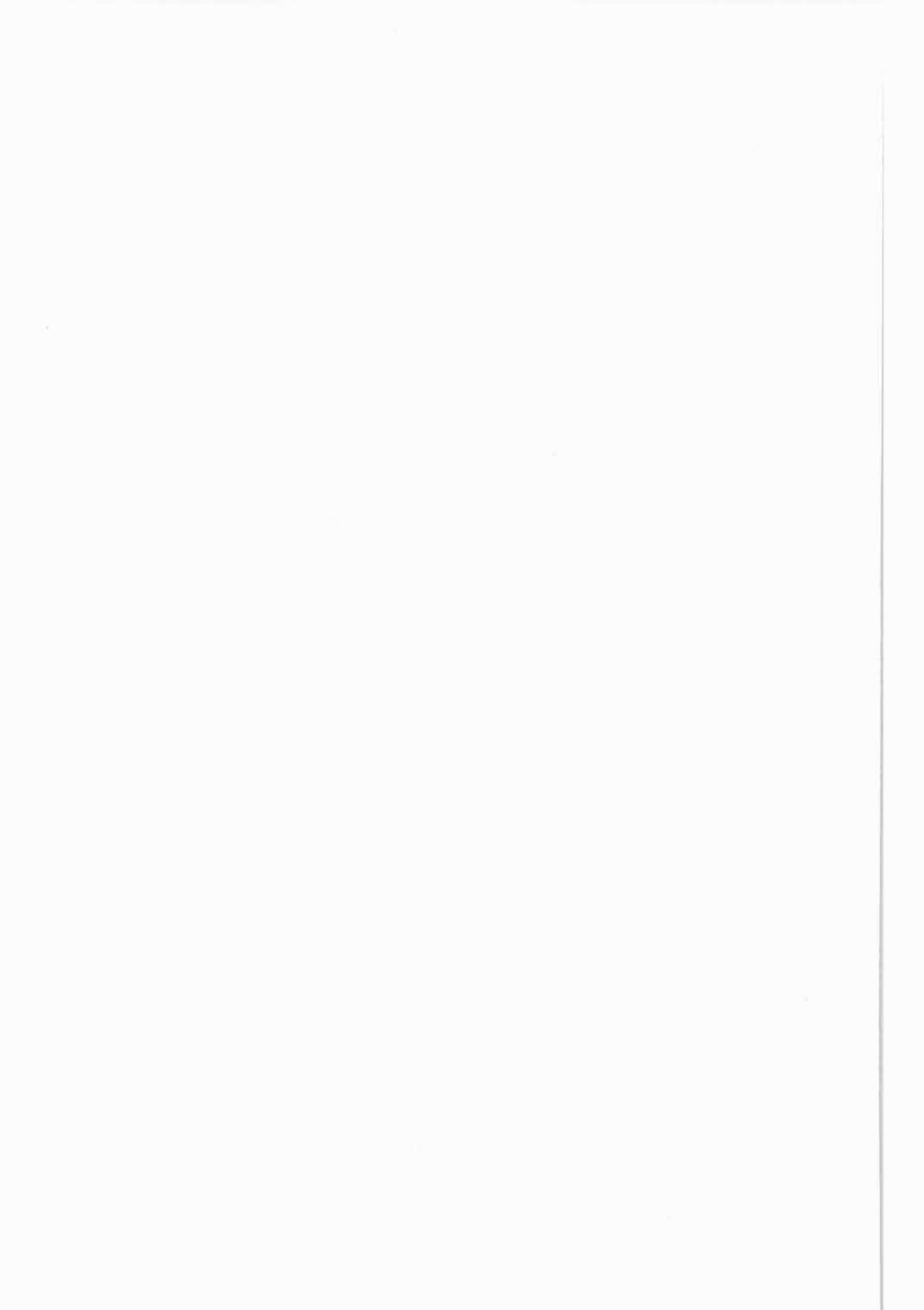
注2 『群書類従』第24輯 釈家部

注3 『大正新脩大藏経』図像9

注4 速水 侑『観音信仰』塙書房 1970

注5 速水・前掲注4書 第二章第三節

注6 福山敏男氏の御教示による。



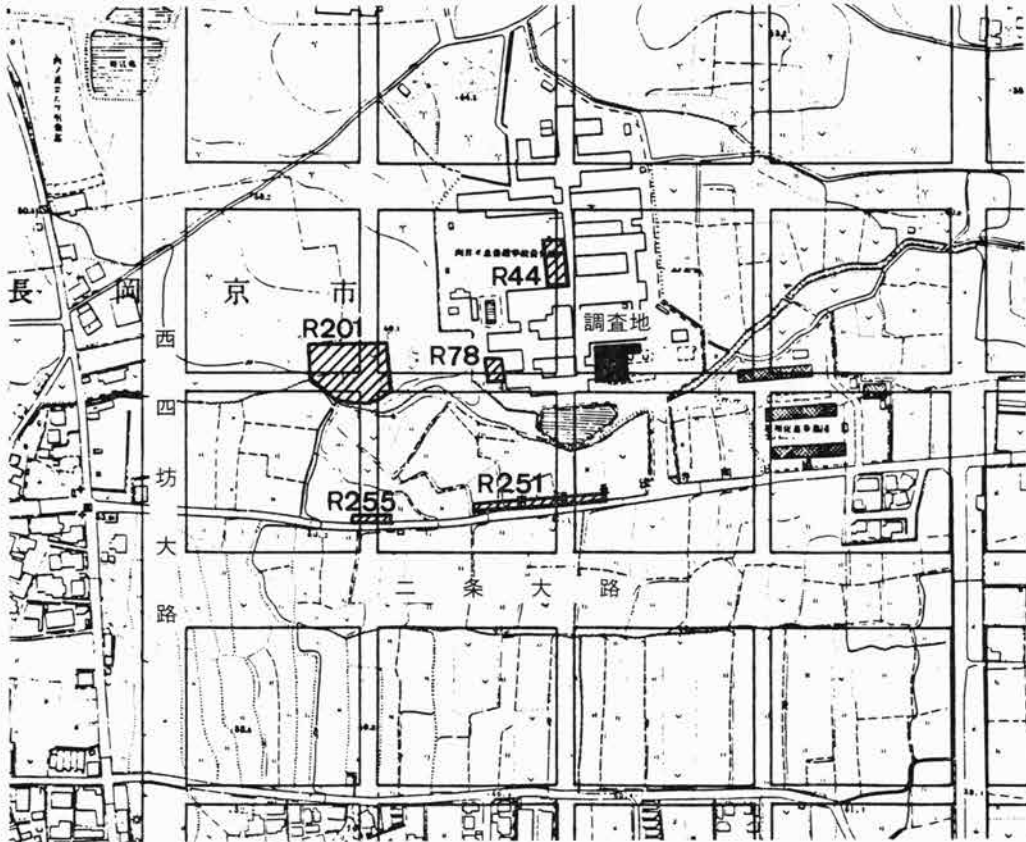
5. 長岡京跡右京第 240 次発掘調査概要

(7 ANGAR-4 地区)

1. はじめに

この調査は、長岡京市井ノ内朝日寺11に所在する、府立向日ヶ丘養護学校の管理棟新築工事に伴う事前調査として実施したものである。

調査対象地は、長岡京の条坊復元によれば右京二条四坊六町にあたり、二条第二小路が当地の南端を通る地点に位置する。また、縄文時代から近世に至る井ノ内遺跡の範囲にも含まれる。調査地は西から東に緩やかに傾斜する段丘上に位置し、南側を坂川の支流が東へと流れている。当地に養護学校が造られたとき、段丘の高い部分(西側)を削って東側に盛土しており、現在の標高は44.7m前後となっている。



第39図 調査地位置図 (1/5,000)

養護学校内では、これまでに2回の調査が実施され、奈良時代から近世の遺構、古墳時代から江戸時代の遺物が^(注1)発見されている。また、西方約120mの右京第201次調査では、中世の井戸・溝・土塚が検出され、縄文土器・すり石や石皿・石鉢をはじめ、古墳時代から飛鳥時代・長岡京期および中世の遺物が^(注2)発見されている。こうしたことから、今回の調査でも、長岡京跡・井ノ内遺跡に関連する遺構・遺物の検出が想定された。

現地調査は、昭和61年9月11日から同年11月17日の期間に実施し、当センター主任調査員辻本和美・調査員石尾政信が担当した。調査面積は約550m²である。

調査にあたり、長岡京跡発掘調査研究所長中山修一先生(京都文京短期大学教授)の御指導をいただき、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会、大山崎町教育委員会、向日ヶ丘養護学校の援助・協力があつた。また、現地調査・整理作業には有志・学生諸氏^(注3)の参加協力を得た。記して謝意を表します。

2. 調査概要

調査対象地は、これまでスクールバス発着場・花壇等がありほぼ平坦地となっていた。これらを撤去した後、20m×25mの長方形トレンチと北東部に6m×8mの拡張部を設定して、重機によって掘削を開始した。表土を重機により除去したところほぼ全域で砂礫層が表われたが、この砂礫層面では遺構が検出されなかったため砂礫層も取り除いた。南東部には砂礫層がなく、旧耕作土、粘質土及び粘土層が認められた。

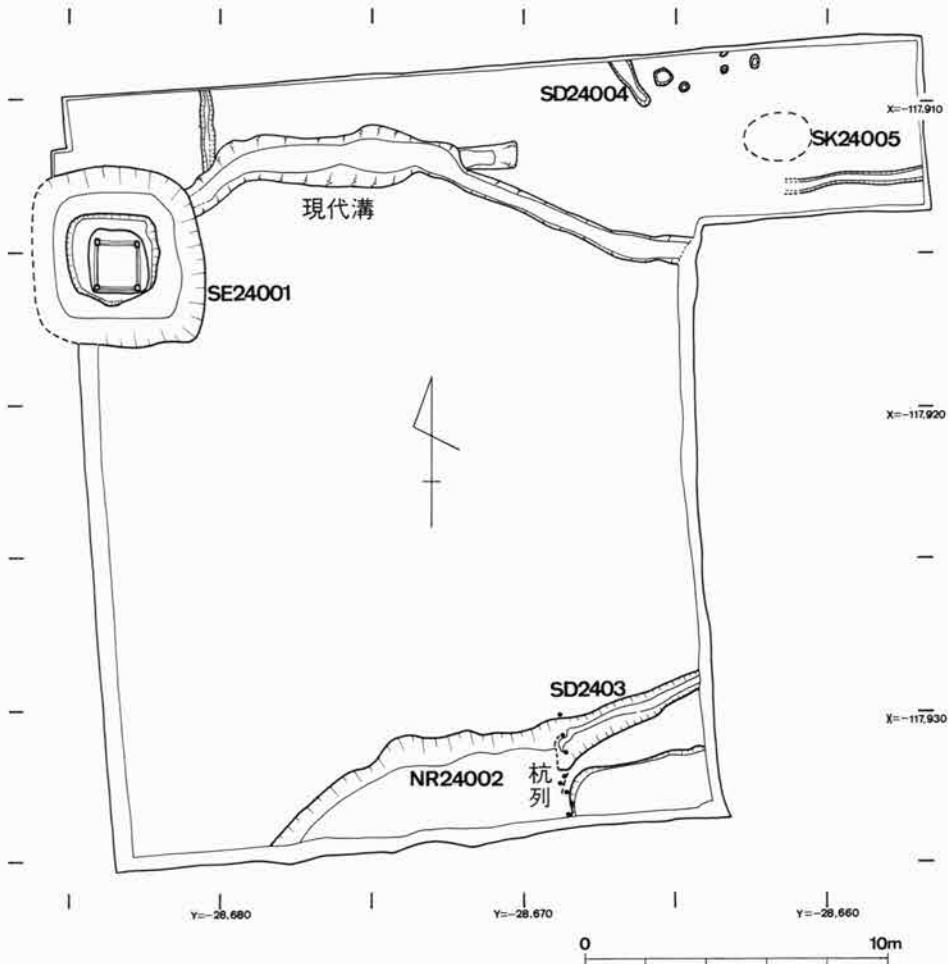
当地の基本土層は、南東部では表土の下に旧耕作土、その下に何層かの粘質土層・粘土層が堆積しているが、それ以外は旧耕作土がすでに取り除かれ、表土の下に砂礫層が表われる。砂礫層の下は固く締まった暗褐色土層・黄褐色土層となり、これらの層は北西から南東に傾斜し、遺構・遺物とも検出されなかった。東拡張部では、一部に旧耕作土・砂礫を含む褐色土層がわずかに残存し、それより下は若干の粘土を含む砂礫層となっている。こうしたことから、当地は緩やかに北西から南東に向かって下がる地形であったことが判明した。ほとんどの遺構はすでに削平されたものと考えられる。

調査地の北西部で井戸(S E 24001)と浅い南北溝、北東部で溝(S D 24004)・柱掘形・土器だまり(S K 24003)と東西溝、南部の一段低くなった場所で湿地または沼状の落ち込み(N R 24002)・溝(S D 24003)と杭列が検出された。以下に各遺構について簡単に記す。なお、調査にあたって長岡京跡基準点54-5・54-5-1を使用して測量を実施した。平面図は国土座標で標示した(国土調査法施行令で定められた17座標系によるもので、座標番号はVI系である。Xは南北軸・Yは東西軸を示す)。

SE 24001 調査地北西部で検出された平面が方形の掘形を持ち、3段に掘られた井戸で

ある。検出した暗褐色土層面での井戸の1段目の掘形は、南北が約5.8mの規模で、東西の長さもほぼ同様と推定される。2段目は南北約2.8m・東西約3mを測る。3段目は上面が2m前後の方形、下面が1.6m前後の方形となる。3段目には、縦板組隅柱横棧どめの井戸枠が半壊状態で残存しており、上部の隅柱・横棧・縦板が内側に落ち込んでいた。最も残りの良い北側で、5段の横棧を確認することができた。井戸の掘形は、1段目が暗褐色、黄褐色土層(下層に少量の礫を含む)を、2段目は暗灰色・青灰色粘土層、3段目は礫層を掘り込んでいる。粘土層以下は、大阪層群と考えられるものである。2段目の粘土層に幅20cm前後の金属分の付着した帯状のものが確認された。これは、水位を示すものと推定される。また西壁の断面観察から、井戸は砂礫層から掘り込まれていることがわかった。

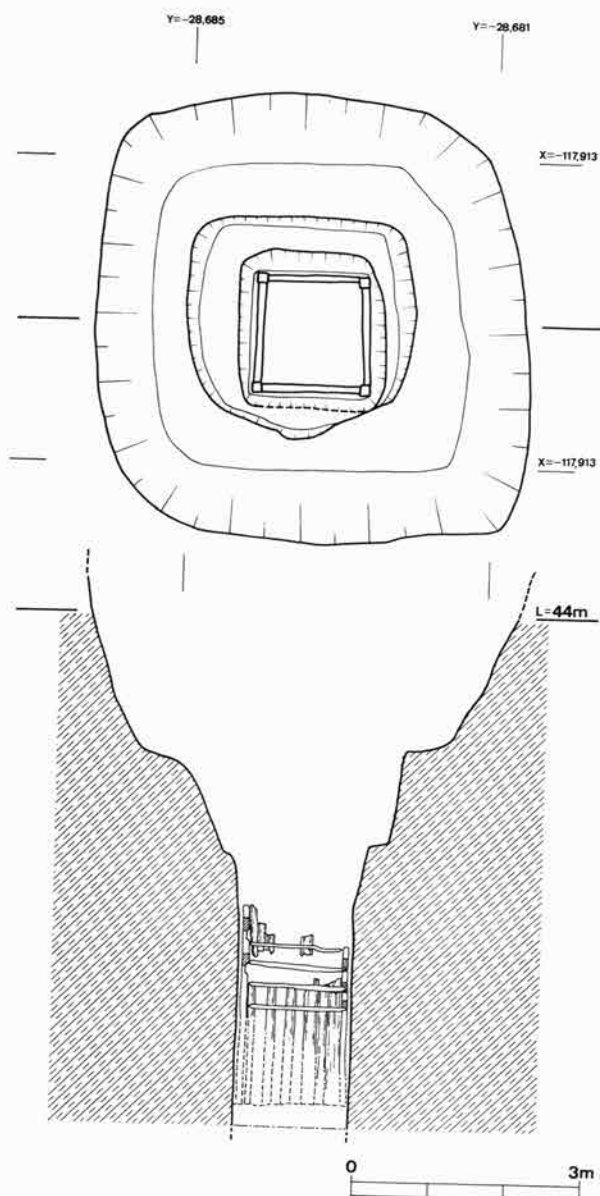
井戸を検出した地点の西側の壁が崩れ、鋼材による補強を行ったが、再度崩れる危険が起きたため井戸の底まで掘ることができなかった。ボーリング棒で突くと部分的に石に当



第40図 調査地平面図

たるが、礫層との区別が困難で敷石等の確認はできなかった。石に当たる部分から、検出面までの深さは約6.7mを測り、井戸の掘り込まれた段丘の砂礫層からの深さは7.3~7.4mとなる。

この井戸は、井戸掘形の方位・出土遺物から、長岡京期に造られたものと考えられる。また、上層の井戸枠を引き抜いた後、一度に埋められたことが、埋土の状況からうかがわれる。出土遺物に古墳時代後期のものを多数含むことから、周辺部に同時期の遺構の存在が推定される。



第41図 井戸 S E 24001 実測図

NR 24002 調査地南部で検出された湿地または沼状の落ち込みである。南東隅は一段低くなり、粘土層を削り込んだ砂層が堆積している。粘土層には凹凸がみられる。坂川の旧流路の一部と考えられる。その後、この湿地が埋められて水田になったことがわかる。水田に伴う杭列が検出された。須恵器・土師器・瓦器等が出土することから、水田となったのは、中世以後と考えられる。

SD 24003 NR24002の北東で検出された素掘り溝である。溝の東端は幅約50cm・深さ25cm前後を測り、西端は幅約1.3m・深さ20cm前後を測る。長さ約5mにわたって検出され、東端は不明瞭となる。須恵器・土師器等が出土した。水田に伴うものと考えられる。

SD 24004 調査地北東部で

検出された素掘り溝である。長さ約1.7mを検出し、溝の北端で幅約60cm・深さ5cm前後を測り、南で細くなり消滅する。少量の土師器が出土した。

SK 24005 東拡張部で検出された土器だまりである。明瞭な掘形をもたないが、径約2m前後の範囲に土器が集中する。土師器杯・皿・甕、須恵器等が出土した。土師器杯・皿は外面へラ削りで、長岡京期のものと考えられる。

これらの他に、溝SD24004の東側で柱掘形が検出されたが、その数が少なく建物規模等は不明である。柱掘形のうち方形のものは、1辺40～50cmを測る。

出土遺物には、須恵器、土師器、瓦器、陶器、瓦、土製品等がある。井戸からは、古墳時代後期の須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器、埴輪等、長岡京期の須恵器、土師器、緑釉陶器、ミニチュアカマド、土馬、鉄製鋤先、木製品等が出土した。出土遺物は第42図に示した。14～16はSK24005から、これ以外はSE24001から出土したものである。以下に各遺物について、簡単に記す。

1は、須恵器杯蓋で、口縁部は直立し、端部は内傾する。天井部との境に稜線をもつ。天井部外面はロクロ削り、他はロクロナデする。胎土・焼成とも良好で、表面が暗灰色を呈す。復元口径は、11.4cmを測る。

2は、須恵器杯身で、口縁部は内傾した後立ち上がり、端部に内傾面をもつ。受部はわずかに上方に伸び、断面が三角形を呈す。内外面ともロクロナデする。胎土・焼成とも良好で、表面が暗灰色を呈す。

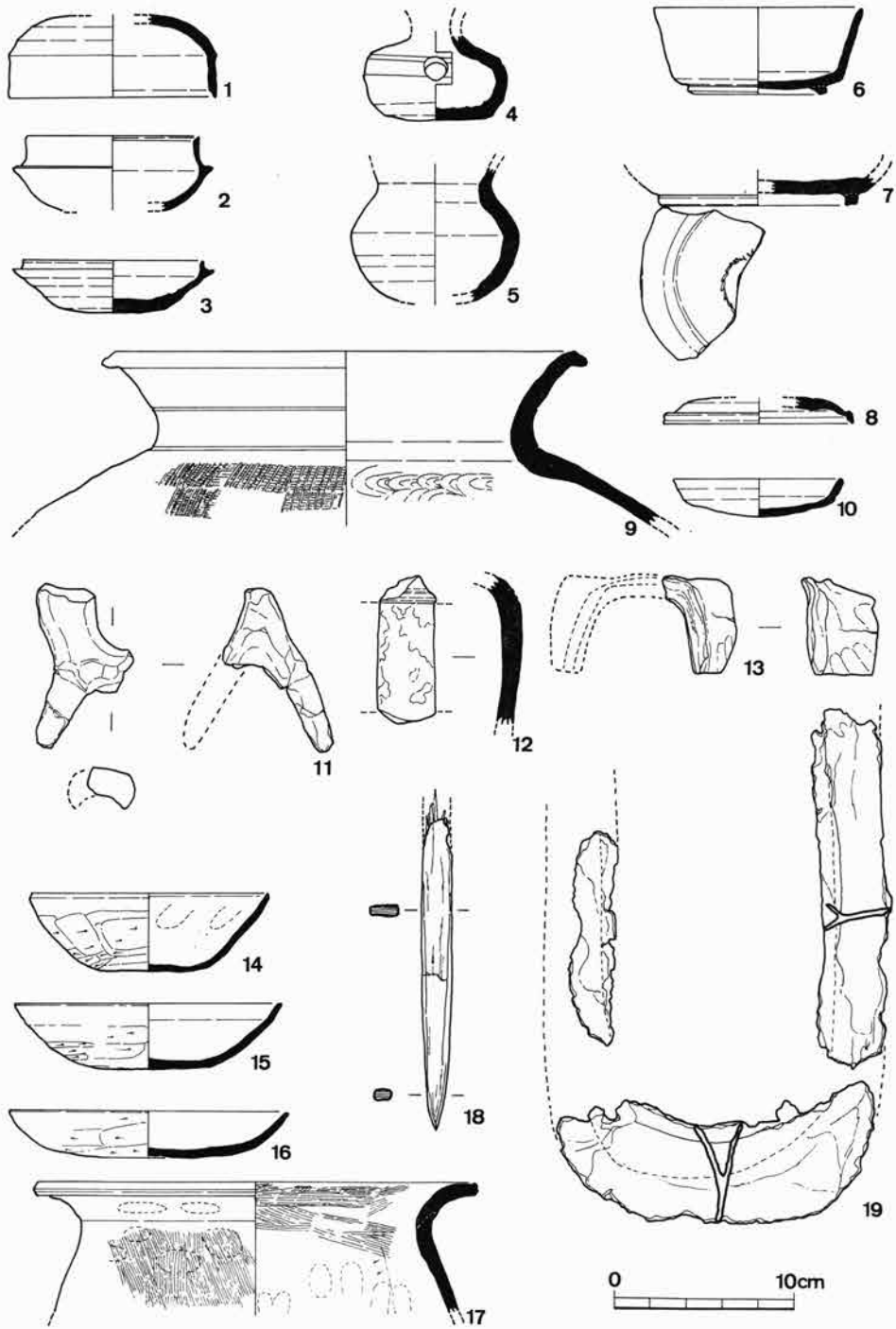
3は、須恵器杯身で、口縁部は短く直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方に伸び、端部は丸くおさめる。底部外面はロクロ削り、底部内面は横方向のナデ、他はロクロナデする。胎土・焼成とも良好で、表面が淡灰色を呈す。

4は、須恵器甕の体部で、圧縮された球形を呈す。注口部は斜め上方・外から内へ穿孔している。体部径は8.4cm・現存高は4.6cmを測る。体部上半はロクロナデ、同下半はロクロ削り調整し、底部にへラ起こしのため凹凸がみられる。胎土・焼成とも良好で、表面が青灰色を呈す。

5は、須恵器壺と推定される体部片である。外面上半および内面はロクロナデ、外面下半はロクロ削りする。胎土・焼成とも良好で、表面が淡灰色を呈す。

6は、須恵器杯Bで、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。高台の位置が体部と底部の境よりやや内側にある。口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面は横方向にナデる。胎土・焼成とも良好で、表面が暗灰色を呈す。

7は、須恵器杯Bの底部で、外面にへラによる刻みが円形に廻る。胎土・焼成とも良好で、表面が淡灰色を呈す。



第42図 出土遺物実測図

8は、須恵器蓋で、端部が屈曲する。内外面ともロクロナデであるが、天井部の一部に削りが残る。胎土・焼成とも良好で、表面が淡灰色を呈す。

9は、須恵器甕で、口縁部が外上方に開き、端部を下方に挽き出す。口縁部内外面ともロクロナデし、体部外面に平行タタキ、内面に同心円タタキを行う。胎土・焼成とも良好で、外面が淡灰色、内面が暗灰色を呈す。復元口径は26.5cmを測る。

10は、底部外面未調整の土師器皿Cである。底部外面以外は横ナデし、口縁部外面がわずかに凹む。胎土は良好で、焼成がやや甘く、表面が淡黄灰色を呈す。

11は、片方の前足と頸から胴部にかけての土馬である。表面の摩耗が著しい。

12は、緑釉陶器の火舎の一部と推定されるものである。肩から体部にかけてのもので、左右に透し窓用の切り取り痕が明瞭である。頸部に二条の浅い沈線が廻る。胎土は緻密で、焼成がやや甘く、淡黄灰色を呈す。表面の釉の剥離が著しいが、透明感のある淡緑色に発色した釉薬が施されている。

13は、やや大ぶりのミニチュアかまどである。表面の磨耗が著しいが、粘土の継目や指頭圧痕が残る。胎土は良好で、焼成が甘く、表面が淡黄灰色を呈す。

14・15は、土師器椀Aで、表面が磨耗しているが、口縁部・底部外面をへら削りしている。内面はヨコナデする。14は、口縁端部をつまみあげる。胎土・焼成とも良好で、表面が橙褐色を呈す。14は口径13.1cm・器高4.2cm、15は口径14.8cm・器高3.6cmを測る。

16は、土師器皿Aで、口縁部・底部外面をへら削りする。胎土・焼成とも良好で、表面が橙褐色を呈す。復元口径は15.5cmを測る。

17は、土師器甕で、口縁部を「く」字に外反させ、端部をわずかにつまみあげる。表面が磨耗しているが、口縁部内面にハケ調整、体部内面に指頭圧痕が残り、体部外面にハケ調整がみられる。

18は、やや厚い板状製品の片方を剣先状に切り落した用途不明木製品である。最大幅0.8cm・残存長18.7cmを測る。

19は、鉄製鋤先で、U字形の鉄板2枚を合せ、叩いて整形したものである。先端部分をわずかに欠損するが、先端幅約5.6cm・袋部の深さ約3cm・横幅17.5cm前後を測る。側面の幅約3.7cm・袋部の深さ1cm前後を測る。表面が暗赤色を呈する。

井戸枠には、隅柱4本・横棧・縦板等がある。隅柱はすべて方形で幅10～12cm前後あり、納穴で残存状況の良いものは長さ10～12cm・幅5～6cmを測る。その間隔は、中心部分で40cm前後ある。横棧は、残存状況の良いもので長さ約120cm・幅7～10cm・厚さ5cm前後あるが、ほとんどが柄部分を欠損している。縦板に、方形の穿孔をもつもので、柱からの転用と推定されるものがある。

3: ま と め

今回の調査では、調査概要に記したとおり後世の削平が著しく、検出された遺構は希薄である。そのうち、検出面での掘形が一辺約6mの規模をもつ井戸S E 24001が特筆される。この井戸は、これまで長岡京跡の調査で確認された井戸の中では最大級のものである。^(注4)井戸掘形の方位・出土遺物から長岡京期と考えられる。その性格については、段丘上にあるために良水を得る必要から地下深く掘り下げ、その結果として規模が大きくなったという構造上の問題だけではなく、当地の地理的環境や長岡宮の真西に位置するという条件から判断して、相当な有力者や貴族の邸宅に付属したものと考えられる。また、出土した緑釉陶器からも、それを推定し得る。

これについては、周辺部で建物跡等が検出されていないため早急な判断はできないが、長岡京の大規模な造営が、西山山麓の近くまでおよんでいたことを示す重要な資料である。

そして、旧坂川の流路が段丘の一部を削り込んでおり、そこが湿地状であって、その後水田化されたことが判明した。当地の土地利用を考える上で一つの資料となる。

この調査から、削平を受けていない場所では、長岡京期をはじめ井ノ内遺跡に関する遺構の検出が予想され、周辺での調査に期待される。(石尾政信)

注1 引原茂治・橋本清一「長岡京跡昭和55年度発掘調査概要・右京第44次調査(7 ANGAR 地区)」
『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』京都府教育委員会) 1981

注2 小田桐淳氏の御教示による。

注3 藤原ひとみ・佐藤賀之・仕名野隆利、以上調査補助員
神山久子・寺升初代・山本弥生・小滝初代・丹新千晶・西川悦子、以上整理員

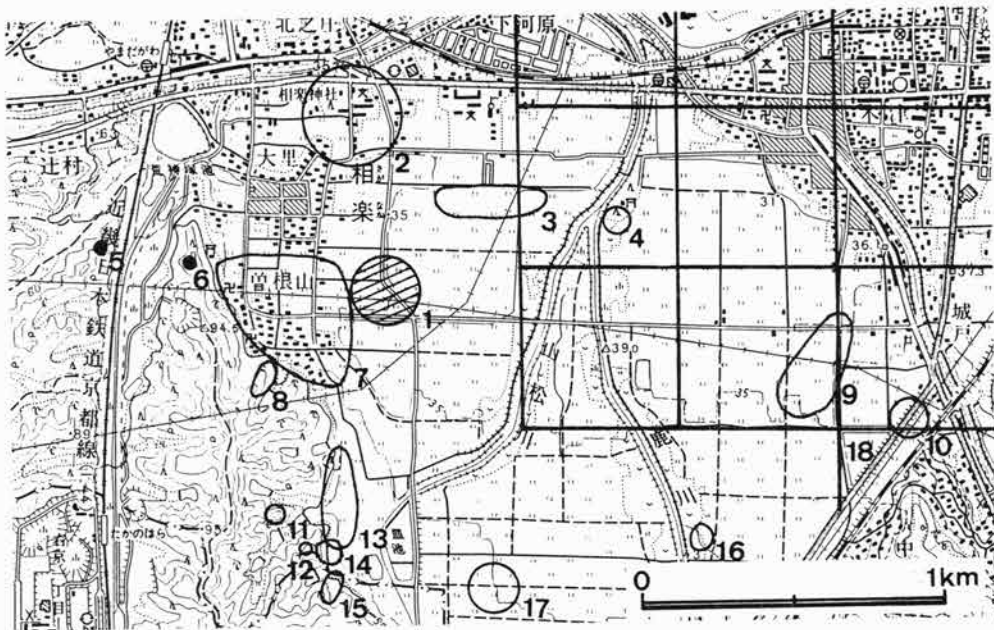
注4 山本輝雄「長岡京の井戸」(『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会編) 1986

6. 八ヶ坪遺跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

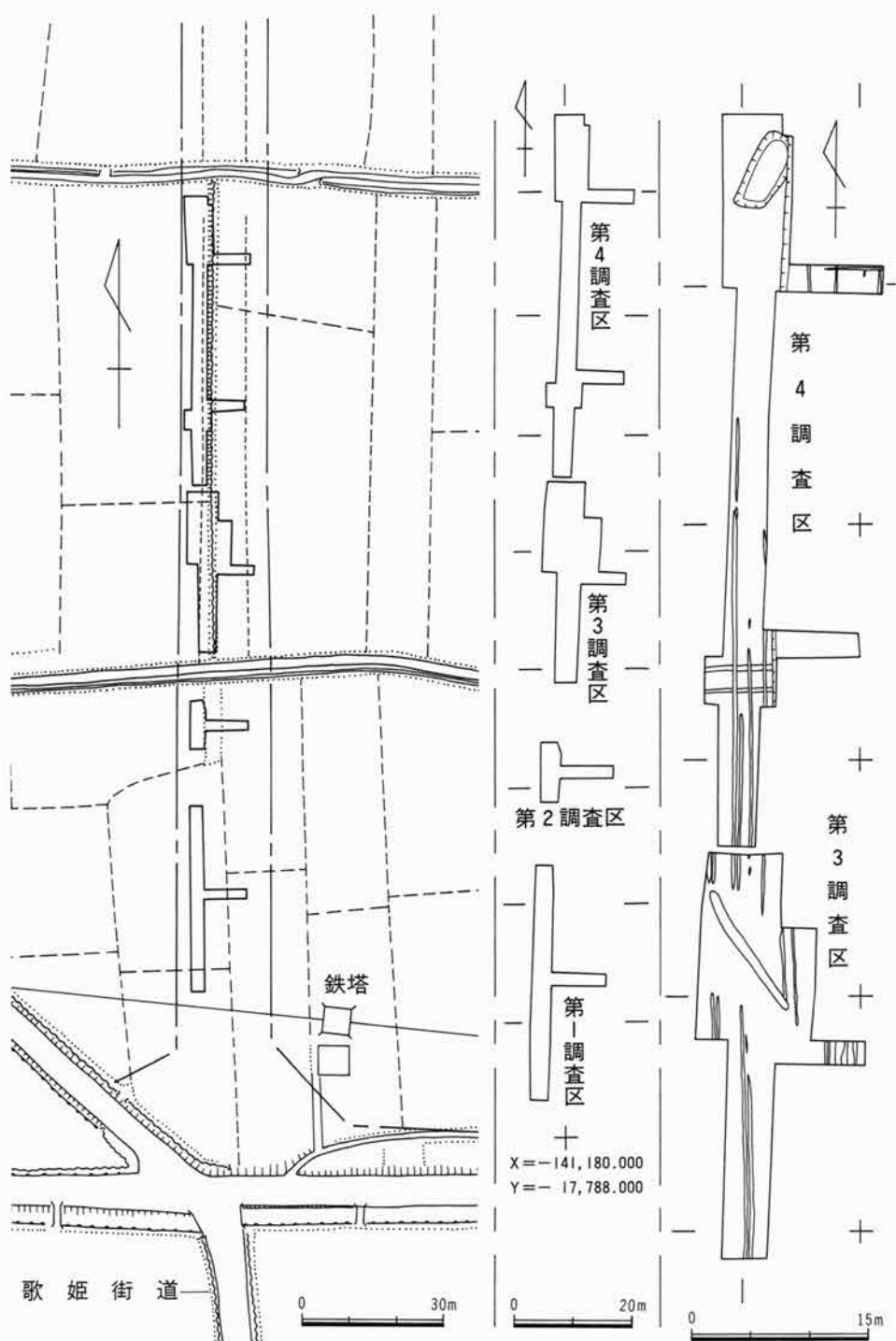
八ヶ坪遺跡は、行政上京都府相楽郡木津町相楽字八ヶ坪を中心とした径200mの正円形に広がる遺跡として、『京都府遺跡地図』に登録された周知の遺跡である。

本遺跡が所在する木津町は、奈良・大和の北の玄関口として古代以来悠久の歴史を刻み込み、今日学術的にも極めて重要な文化遺産が所狭しと分布している(第43図)。玄関口＝交通の要所として、現在においても十字形に交差する一般国道24号と同163号とが幹線道路の一役を担っている。昨今の交通量の増加は飽和状態に達しているため、需要を満たし交通の緩和化を図るため、一般国道163号バイパスが建設されることになった。その計画道路が八ヶ坪遺跡の東端を縦走するため、工事に先行して発掘調査を実施することになり、当調査研究センター調査課主任調査員松井忠春、同調査員荒川史が担当して3.5か月間調査を行った。



第43図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|--------------|-----------|----------|-------------|-----------|
| 1. 八ヶ坪遺跡 | 2. 相楽遺跡 | 3. 鶴ノ町遺跡 | 4. 田中遺跡 | 5. 兜谷古墳 |
| 6. 西ノ宮古墳 | 7. 曾根山遺跡 | 8. 大仙堂遺跡 | 9. 八後遺跡 | 10. 奈良遺跡 |
| 11. 相楽山銅鐸出土地 | 12. 音乗谷古墳 | 13. 大島遺跡 | 14. 音如ヶ谷瓦窯跡 | 15. 歌姫瓦窯跡 |
| 16. 古川遺跡 | 17. 辰ヶ坪遺跡 | 18. 作り道 | | |



第44図 調査地区割及び遺構全体図

2. 調査経過(第44図, 図版第39)

調査は、計画道路西端に沿って幅3mのトレンチを南北方向に四本設定し、さらに東西トレンチ計五本を適宜配し、南側から第1→第4調査区と命名して、昭和61年8月20日から開始した。まず、トレンチ毎に土層の堆積状況を把握した後、重機で現耕作土のみを除去した。以後床土から層位毎に掘り下げ遺構・遺物の検出に努めた。第1調査区を中心に低位の各トレンチで湧水が夥しく調査は思惑通りには進行しなかった。第3・第4調査区での東西・南北走る素掘り溝や土塚の確認により、建設省との協議を経て部分的に調査区を拡張して遺構の全体把握に努力した。その結果、南北・東西走る素掘り溝は条里遺構に深く関わり、その計測値から2本の現農道下に東西行の坪界線が想定できるため、一旦12月7日に調査を終了し、改めて昭和62年3月中旬に立会調査によってそれを補填した。

3. 検出遺構

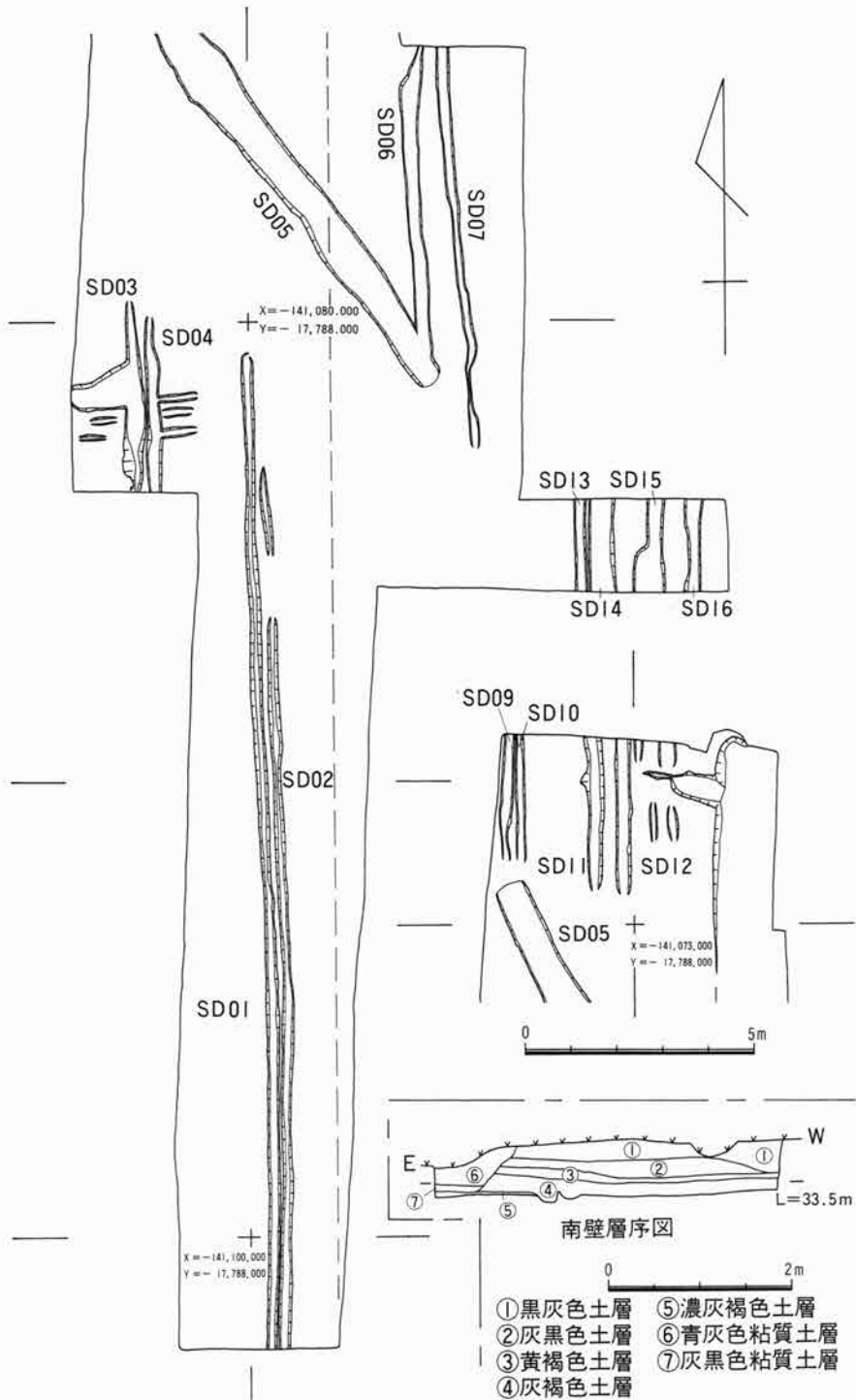
今回の調査で検出した遺構は、ピット・土塚を除けばすべて素掘り溝である。以下、各調査区別に検出遺構ないし調査の所見について概観する。

第1調査区(図版第40—1)

南北長40m・幅3mのトレンチとその中央部に東西方向の長さ8m×幅2mのトレンチを設け調査を実施した。約20cmの現耕作土下に黄褐色粘土層が厚さ約5cmで貼り付く。直下には旧耕作土と思ほしき灰褐色土層が厚さ約20cm堆積する。本層は出土遺物から中世後半を下限とする。さらに4~5cm厚の灰褐色粘土が広がる。旧床土かも知れない。これより地山までの30~40cm間は青灰色粘質土が堆積し、地山直上から14世紀前半代の東播系摺鉢片(図版第43—10)が出土した。本調査区は湧水が著しく、また地山面の状況から谷状地形を推定できる。なお、調査区北端で幅0.9~1m・深さ10cmの東西走る素掘り溝を確認したが、溝内からの出土遺物は皆無である。層的には中世時に属する。

第2調査区(図版第40—2)

南北長10m・幅3mのトレンチに、東側長辺中央部に東西長8m・幅2mのトレンチを設け層位毎に掘り下げ調査を行った。その結果、第1調査区と同様の層序を示し、南北トレンチ内においては何らの遺構もなく、東西トレンチ内で地山の黄灰色砂礫土層上面に穿たれた幅25cm・深さ10cmの南北走る1条の素掘り溝と一辺約50cm・深さ約30cmの隅丸形状のピット2個を検出したに止まった。埋土からの出土遺物はなく、層的判断から第1調査区の素掘り溝同様に中世に比定できよう。ここで指摘を要する点は、地山上面の高さである。33.10m平均に対して第1調査区北端部で32.70mで、約40cmの段差が認められる。恐らくは両調査区間での自然地形における緩斜面を形成していることを意味している。



第45図 第3調査区検出遺構実測図

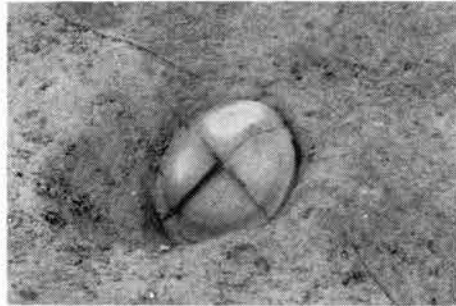
第3調査区(第44・45図, 図版第41-1, 同42-2)

南北長30m・幅3mのトレンチと東西長8m・幅2mのトレンチを設けて試掘調査した結果、南北・東西走る素掘り溝15条と斜走る溝(SD05)を検出した。SD05は試掘調査地内に延伸することが判明したため南北トレンチ北半部の東西両側を有効的に拡張した。

SD01・02は、幅が25cm前後で、深さ10~15cmを測り、灰褐色土を埋土とし、層位的には時期差は認められない。溝内からの遺物の出土は皆無であった。最長はSD01で、21.5m以上で、南方調査地外へ伸びるが、現農道の南側=第2調査区には及ばない。SD02はSD01に間隙をおかず並走する。互いに主・補完の関係にあると推測できるものの、再掘削の結果の可能性もある。両溝の底面は全体的に北→南へと徐々に低くなる。中世に属する。なお、SD02の東側上面はやや硬くSD01の西側は柔らかい。これはSD02の東側を一定幅をもって濃灰褐色粘質土上面を叩きしめた結果によるものであろう。

SD03・04もSD01・02と全く同様の埋土を溝内に充填し、ともに時期差はほとんどない。ただし調査地外南側へ伸びるがSD01・02と性格が同じであるかは今回の調査では検証できない。溝の幅・深さは前二者と同規模である。無遺物であった。中世であろう。

SD05は調査区北半部を北西→南東に斜走する溝で、幅0.7~1m・深さ10~20cmを測る。両端は後世の開削により底面との高低差がない。底面は北西側から南東へ徐々に低くなり、最大高低差約1mを測る。溝内埋土は灰白色砂層が主であるが、後世恐らくは中世段階で幅狭い溝が重複して掘削されたため灰色の砂質土層が部分的に認められる。溝内から



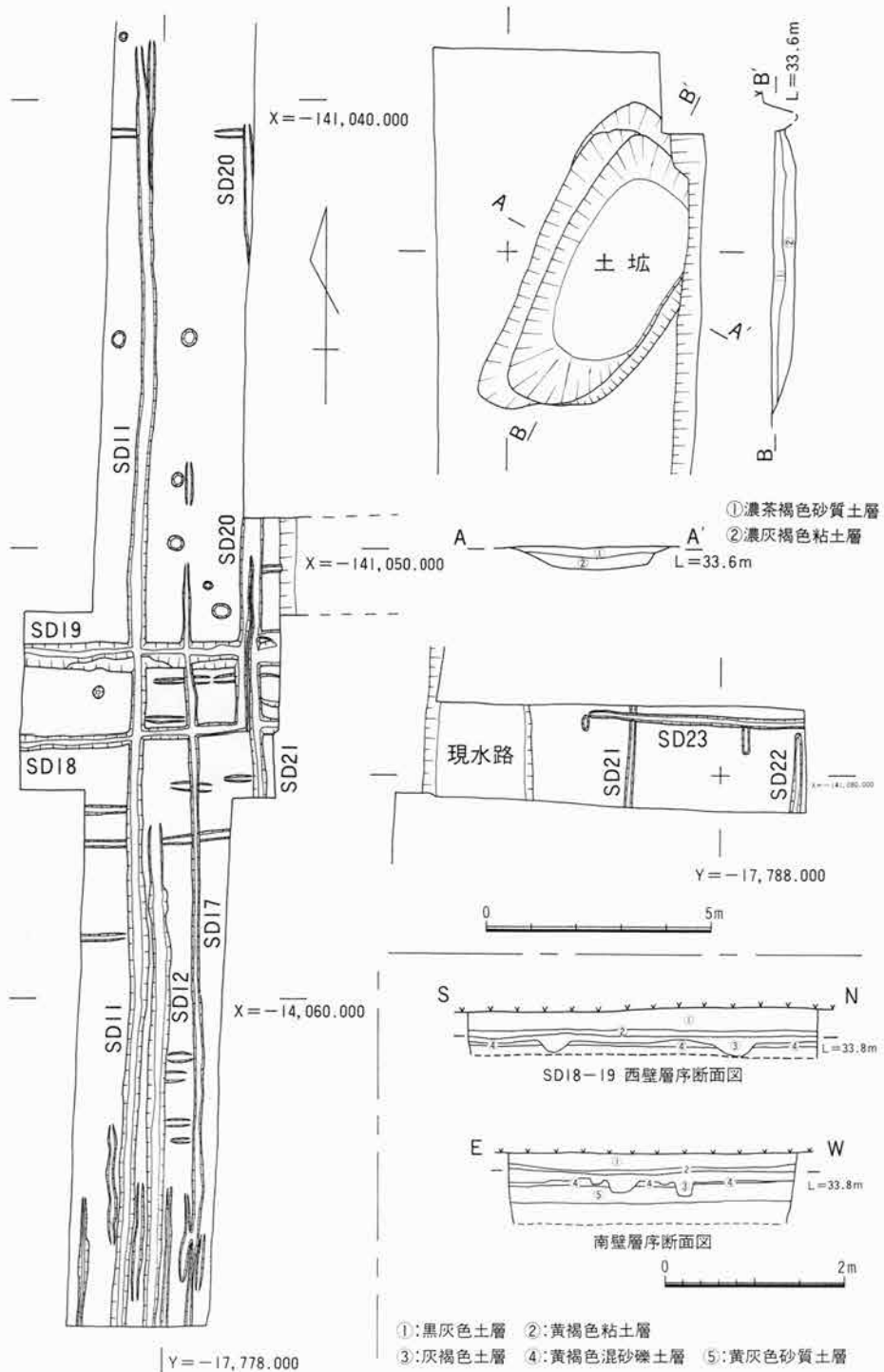
第46図 須恵器杯身出土状況

らは須恵器杯身(第46図・同48図-1, 図版第43-1), 同壺片(図版第43-6), 土師器片などが出土した。遺物から観て古墳時代後期に属する。

SD09は南北に並走する2条の素掘り溝で、西側溝の西肩は調査区壁面に隠れる。深さ約10cmである。埋土は灰褐色土で、出土遺物はない。SD03・04と関連するかも知れない。

SD06・07及びSD13~16は幅20~50cm・深さ5~6cmの浅い溝で、埋土は灰褐色粘質土混り砂土で、いずれも層位的には近世以降と判断される。無遺物である。SD13~16の4条は南北に並行する点や等間隔であることから或いは畝のウミ部分かも知れない。

なお、本調査区での地山上面は、SD09~11の南端から2m幅で東西方向に約20cm低くなり、さらにSD12の東側2mの地点(杭の痕跡あり)で南北方向に約20cm下がる。これは中世以降恐らくは近世段階における開墾によって生じたものと推定できる。



第47図 第4調査区検出遺構実測図

第4調査区(第44図・47図, 図版第41—2・同第42—1)

南北長55m・幅3mの極めて南北に細長いトレンチを設け、さらに南・北2か所に東西長8m・幅2mのトレンチを設営して試掘調査を行った。その結果、調査地東半部は鋭角に約30cmの段をもって低く平坦化することが明確になるとともに、SD18・19の東西素掘り溝と土坑の検出により、その延長を探求し全体把握をより可能ならしめるための有効性あるトレンチの拡張をもって発掘調査を継続実施した。

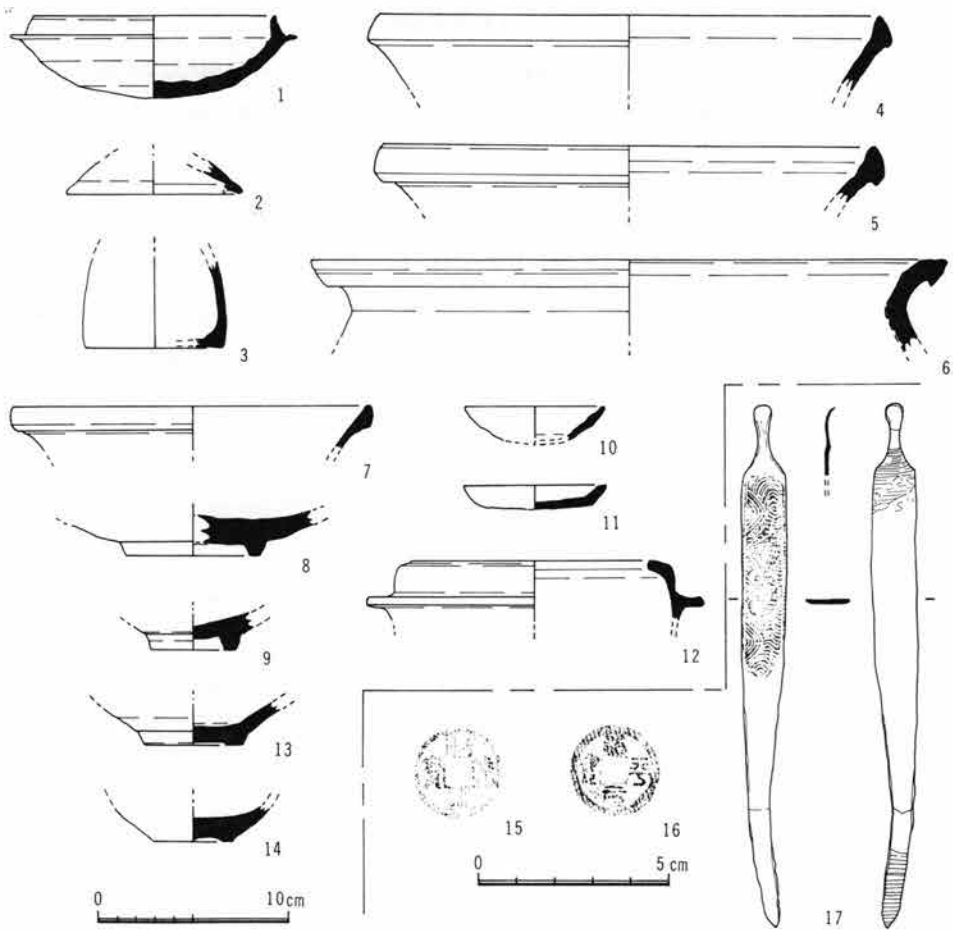
現水田の床土を除去すると、地山面まで灰褐色土層が調査区全域に広がっていたが、北方に向かって徐々に薄くなり調査地北端から10m付近で消滅する。これは地山面が北方に向かって高くなることに起因している。この地山を穿って素掘り溝や土坑が構築されていた。

SD11とSD12は、第3調査区のSD01とSD02と同様の性格を有し一連の遺構として把握すべきものである。溝内には灰褐色土が埋まり、層位上での時期差は認められない。SD11は幅30cmで長さは第3調査区分を含めて40.5m以上になる。一方SD12は若干幅広く40cmを測り、残存長11.5mである。深さはともに最深部で12cmである。SD11の北方では素掘り溝が二叉状に分離しているが、これは大概前溝上面に重複して改築した結果であろう。SD11の溝内から灰白磁碗片(第48図7, 図版第43—15)や瓦器碗片(図版第43—8・9)が出土した。これは14世紀前半に位置付けられる。今回の調査で確認した溝のうち遺物が出土したのはこのSD11のみである。

SD17は残存長16mで、幅は15cm位である。SD11・12とは規模が小さくかつ深さが4cmと浅いことから若干性格を異にすると思われる。埋土は全く同様に、灰褐色土である。

SD20・21は恐らくはSD11・12と対をなすものであろう。若干幅は狭く20~30cmで、深さは約10cmである。この両溝は調査区東壁に沿って縦走するが、第3調査区では残存していない。これはそのまま南へ延伸させた場合、現水田の東肩に一致し、既述したようにこの付近は近世段階に削平を被っており、その時点で既に消失したものと推察できる。杭列は正にその証拠物件と言える。埋土はSD11・12と同じ灰褐色土である。遺物は出土しなかった。なおSD11とSD20の溝の心々間は2.4m = 8尺であり、この間の上面は、SD02の東側と同様に堅く叩きしめられていた。

SD18・19は、SD11・12及びSD20・21と直交する東西向の素掘り溝である。西側は西方の水田下に潜るが、東側は前述のように早い段階=近世段階で開削消失している。SD18は幅30cm・深さ10cmである。SD19は幅60cmと広い。これは南肩で段をなしている点を考慮すると最低2回の造り直しにより生じた増幅と言える。両者の心々間は1.8m = 6尺であり、上面はSD11~SD20間同様に叩きしめられている。埋土は縦走する素掘り溝と大差なく、灰褐色土ではあるが、SD18・19がSD11・12・20・21を切り合う関係にある。時期



第48図 各種出土遺物実測及び拓影図

差は僅少であろう。遺物の出土はないが、SD11から中世に比定できる。

これら顕著な素掘り溝の他に東西・南北走する溝状遺構が部分的に存するが、深さにおいても幅にあっても一定せず、第3調査区で検出された畝のウミ部分と同様であろう。

SD21～SD23はいずれも上面削平後に穿たれた素掘り溝であり、上記した溝状遺構と同一の性格を有していると推定される。

本調査区北端付近で確認した土塚は、長さ7m・幅3m・深さ1.2mの隅丸長方形を呈し、上面を濃茶褐色砂質土層が被い、内側は濃灰褐色粘土で充填されていた。遺物の出土はなかった。時期不明であるが、土壌の変化から推察するに古代に遡上するものであろう。

昭和62年3月中旬に実施した北側現農道下の立会調査では断面観察を行った。現農道上面より約60cm下に溝状の断面が認められたが、対応する溝はなかった。仮りにSD18・19間の距離を符合させれば現水路と一致することから、水路掘削時に削平されたと思われる。

4. 出土遺物(第48図, 図版第43)

調査期間中に出土した遺物は、須恵器杯身1点と金属製品3点以外はすべて破片で、大形破片も少ない。弥生時代以降の各時代の各種類に及ぶが、ここでは代表例のみ図示するに止め、以下時代順に出土遺物を概観してみることにする。

弥生時代に属する遺物としては、サヌカイト製の横剥ぎ技法で製作されたスクレイパー1点と、帯状貼り付け文を有した弥生式土器の極小破片1点がある。

古墳時代の遺物には、須恵器杯身(第48図1, 図版第43-1), 同高杯脚部片(図版第43-4), 同杯蓋片(同第43-5), 壺肩部片(同第43-6), 壺口縁部片(同第43-2)や土師器片がある。杯身は、『陶邑』編年ではⅡ型式4段階に属し、6世紀後半に比定できる。また同編年のⅢ型式2段階すなわち7世紀中頃に属する宝珠形つまみを有する杯蓋(第48図2, 図版第43-3)もある。

奈良時代遺物には糸切り底の須恵器小瓶(第48図3, 図版第43-7)や螺旋ミガキを施した土師器皿片がある。

中世段階では、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器、土師器に大別できる。出土遺物の大半は本期に属する。須恵器類は形態上鉢類(第48図4・5, 図版第43-10~12)と甕類(第48図6, 図版第43-13・14)に二分されるが、いずれも東播系の須恵器である。口縁部などの諸特徴から13世紀後半~14世紀前半に位置付けできる。陶器には丹波系や13世紀後半代の常滑系の甕片がある。瓦器碗は口縁部と底部(図版第43-8・9)とがあり、大和型で、底部高台は退化傾向にあって14世紀前半代の特徴を示す。瓦質土器には摺鉢(図版第43-24), 剣菱文を押印した円形火鉢(同25)や唐草文を陰刻した方形火鉢(同26)がある。また羽釜形土器(第48図12, 図版第43-22)は大和型で、薄手の小形である。いずれも室町時代に属する。その他に灰釉系陶器の口縁部片(図版第43-27)や糸切り痕にケズり出し高台の底部片(第48図13)もあり、土師質皿片も各時代にわたる。中国製陶磁器は灰白磁(第48図7, 図版第43-15・17)と青磁(第48図8・9・13, 図版第43-16・18・21)に二分できる。青磁は鎬蓮弁を表面に有し、器形は碗形が主で、龍泉窯系である。13~14世紀代に比定できる。

近世時の遺物では土師質皿(第48図10・11, 図版第43-23)が最も多量で全期にわたる。陶器には17世紀前半の唐津系の小形鉢(第48図14, 図版第43-29)があり、18世紀前半代の肥前系磁器も数点ある。

金属製品は古銭と筭に二分される。古銭は開元通宝(初鑄年代621年, 第48図15, 図版第43-30)と治平元宝(初鑄年代1064年, 第48図16, 図版第43-31)の各一枚の中国銭である。筭(第48図17, 図版第43-32)は、赤銅製で、全長11.8cm・最大幅1cm・厚さ1mmを測り、表面に波状・扇文・菊花文を線彫りする。先端部には糸状巻き付け痕が顕著である。

5. ま と め

3か月半余の調査期間で検出した遺構・遺物について極めて簡単に記述してきたが、ここで改めて今回の調査で得た成果に基づいて若干の指摘をしまとめにかえたいと思う。

最も注目すべき遺構として中世段階に属するSD01・02・11・12・18～21の素掘り溝がある。これらの溝の相関性は認めざるを得ない。すなわちSD01・02を北方へ直線的に延長するとSD11・12に連続し、その全長は80m以上になる。さらに溝の方位は真北～N2°40'Wを指す。方位はもとより80m以上にも達する溝は極めて人為的な所産であって、単に畝状遺構のみを想起できるものではない。またSD02の東側とSD12～SD20間の上面は堅くしまっており、正に現代風に言えば農道を連想させるに充分である。2.4mの一定間隔を保全していることから肯首できよう。調査地東側は削平により一段低くなっているため根拠付けできないが、現水田の東端を南北に沿って縦走することは元来の姿を暗示しているものと言える。この推定が正しいならば、歴史地理学的に検討されている相楽条里の地割の坪界線と一致することは注目される。こうした中世段階に止まる条里遺構は長野県更埴遺跡で確認されており、同様の埋没条里と判断できよう。これは現字名「野入」の東字境であることから肯定される。とすれば、SD18・19の東西両溝にあっても同様のことが指摘できる。この両溝は恐らくは一対をなすであろう点は既述したとおりであるが、現水田面に残る畦畔を観ると東西側各一面をおいて東西に走る現畦畔ともおよそ一致している。これは条里地割では半折型の場合にのみ生ずるものであり、相楽条里が半折型が主であるとする歴史地理学上からの指摘(注1)をも検証している。この東西溝間の中心点から半町分北側に割付けると、第4調査区北側の農道及び水路付近に坪界線が想定でき、立会調査時で確認した溝状断面はより証拠だてていると言える。

仮りに上記したように素掘り溝と埋没条里の坪界線や半折型を立証しているならば、第1・第2調査区では何らのこうした遺構が存在しなかったことが問題となる。しかしこれとて、第2調査区より以北は低台地であるのに対して、以南は徐々に下降し谷状地形をなすとも湧水量から推しても字名「川久保」・「地獄田」を物語っており、少なくとも中世段階においては条里地割が施行されていなかった可能性がある。

最後に、本調査に際し、地元の方々及び関係諸機関、学生諸氏より多くの協力援助を得た。感謝の意を表す。制限枚数が尽きたのでここで筆を擱くことにする。(注2)(松井忠春)

注1 谷岡武雄『平野の開発—近畿を中心として—』(昭和39年 東京)。

注2 大倉伸也・木村和彦・滋井秀明・白石由香・新谷二三代・田中達也・谷口ゆかり・林 恵子・水野哲郎・宮嶋規早子・森本祐一・柳沢洋子・吉川啓太

7. 長岡京跡左京第160次発掘調査概要

(7 ANDTD 地区)

1. はじめに

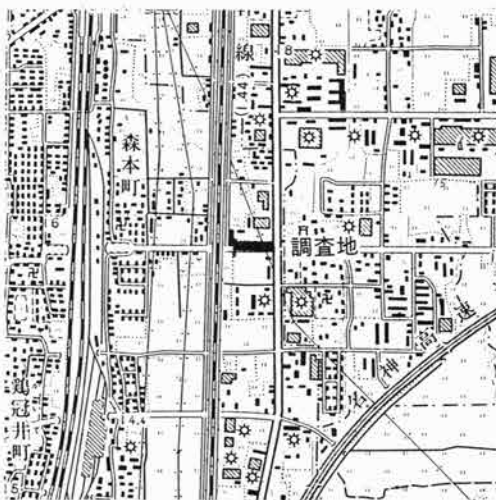
今回の調査は、府道伏見・向日線交通安全施設の整備事業に伴う事前調査として実施したものである。当該地は向日市森本町佃に所在し、標高15m前後の造成された平坦地であり、周辺には水田が残っているものの宅地化が著しい。長岡京の条坊復原によると左京一条三坊一町、八町及び東二坊大路、東三坊第1小路にあたり、また鶏冠井遺跡の北方、東土川西遺跡の西辺に位置している。調査は、上述の長岡京の条坊遺構をはじめ、弥生時代を主とした鶏冠井遺跡に関連する遺構・遺物の検出をも目的とした。

調査を実施するにあたって、京都府教育委員会、京都府乙訓土木事務所等と協議を重ね、^(注1)当調査研究センターが主体となり、調査課主任調査員辻本和美、同調査員竹井治雄が担当した。調査期間は、昭和61年10月18日～同年11月30日まで費した。

なお、調査期間中、向日市教育委員会の方がたの^(注2)助言・協力を得た。さらに、中山修一氏には、御指導を仰いだ。記して感謝の意を表します。

2. 調査経過

トレンチは、長さ190mの狭長な調査範囲のなかで、調査目的が十分に生かされるように



第49図 調査地位置図 (1/25,000)

設定した。このため、前もって基準測量^(注3)を行い条坊側溝の地点を割り出した。Aトレンチは東二坊大路の東側溝の推定地点で長さ18m・幅1.2mを測る。B・Cトレンチは連続するもので、東三坊第1小路の両側溝が想定される位置に設定し、長さ18m・幅1.5mを測る。トレンチの深さは、A・B・Cとも約1.4mで遺構面に達する。

トレンチの掘削は、地表面からアスファルト、盛土、旧耕作土、床土を機械力を用いて行い、以下、褐灰色粘質土、遺

構内の堆積土等の除去は、人力で行った。

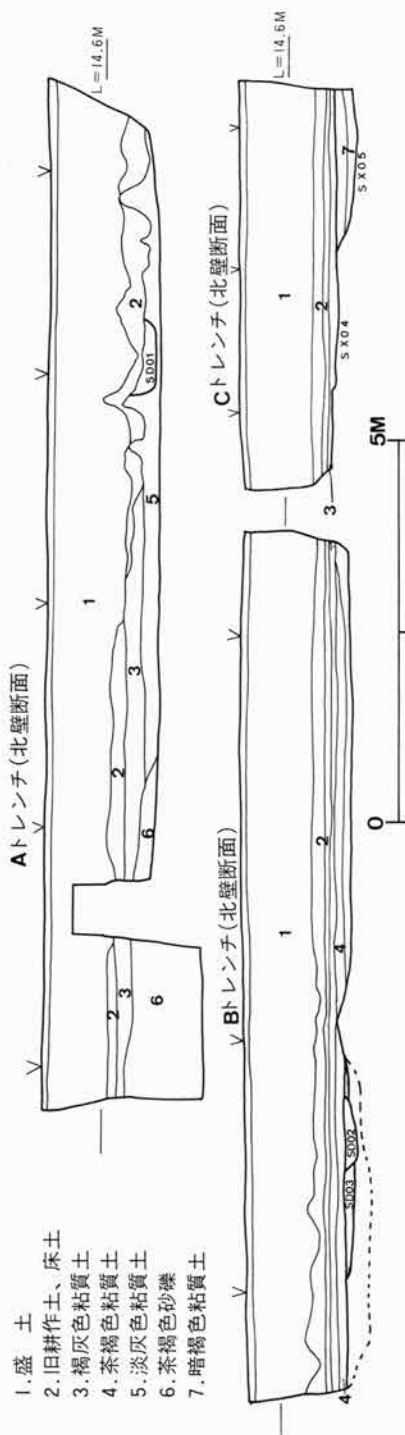
調査の記録は、当初、新設した基準点(BM)を基に、周辺の地形の平板実測図を作成し、遺構図を20分の1の遣り方測量で行った。あわせて、トレンチ全体、遺構、断面の写真撮影を行った。遺構の命名は、溝を「SD」、性格が決定できない遺構を「SX」として扱った。

調査全般の進捗状況は、好天にめぐまれたが、狭長なトレンチのため、若干、作業に手間がかかったところもあった。

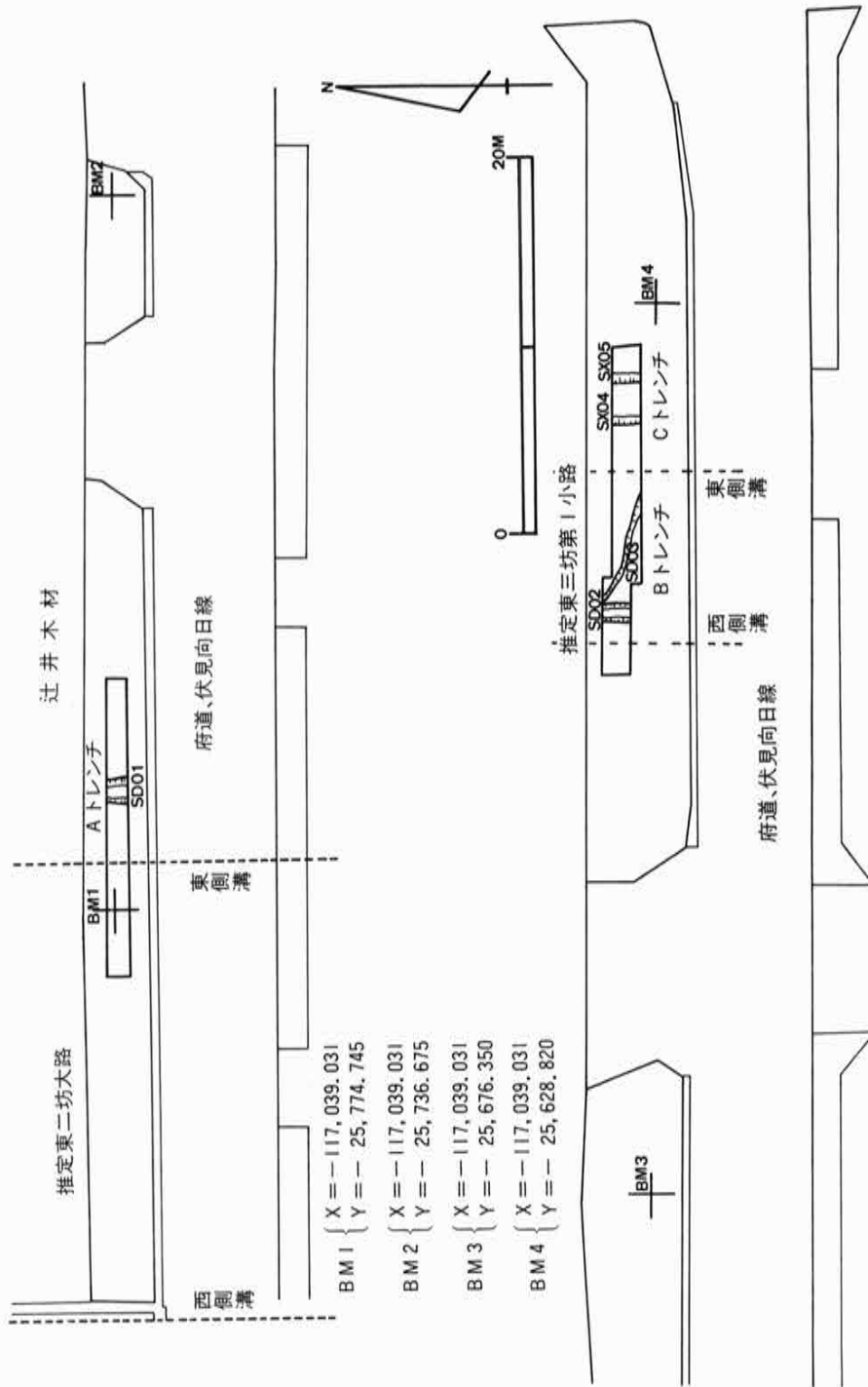
3. 層 序

Aトレンチの層序は、盛土、旧耕作土、床土、褐灰色粘質土、淡灰色粘質土、茶褐色砂礫の順に堆積している。地表の標高は15mを測り、造成作業による盛土が約0.7m堆積している。旧耕作土、床土は、造成工事によって大きく乱されているが、畦の痕跡が残存しているところもあった。この水田は、周辺にみられる水田と同一のものである。褐灰色粘質土は、ほぼ水平に0.2m堆積しており、砂質が多く含まれており、水田か畑地であろう。遺物は土師皿片が含まれているが、時期を決定するに至らない。淡灰色粘質土はSD01の基盤層であり、遺物は検出できなかった。しかし、無遺物包含層(地山)として扱うことはできない。茶褐色砂礫は、トレンチ西端の深掘りの際確認したもので、幅1~5cm、厚さ1mを超え、さらに砂層もあって、河川の堆積の様相を呈している。遺物は出土しなかった。

B・Cトレンチの層序は、盛土、旧耕作土、床土、褐灰色粘質土、茶褐色粘質土、黄褐色粘



第50図 トレンチ断面実測図



第51図 トレンチ位置図

質土、青灰色粘質土(淡青白色砂層)の順に堆積している。

盛土は、Aトレンチから続く、約1mの造成による堆積である。旧耕作土、床土は、近隣の水田と同一のものである。褐灰色粘質土は、厚さ0.2mを測り、若干砂質を含むが安定した土層であり、瓦器片、白磁片が含まれている。この土層も推測すれば、水田、あるいは畑地であろう。茶褐色粘質土は、Bトレンチ全般に認められ、CトレンチのSX04の上面に一部確認することができた。出土遺物には須恵器・土師器があるが、SX04の上面に集中した。黄褐色粘質土は、SD06の基盤層であり、遺物は皆無である。青灰色粘質土は、厚さ1.3mを超え、その間に厚さ0.3m程の灰色砂層がやや東に傾斜して堆積している。遺物は出土していないが、近隣の調査成果から、いわゆる地山(無遺物包含層)であるとは言い難い。

4. 検出遺構

今回の調査では、5条の溝(SD01, 02, 03, 06), SX05と落ち込み状遺構(SX04)が検出された。これらの遺構は、狭い幅のトレンチ(幅1.2~1.5m)調査であるため、形態・規模等を確定し得ないものもあり、また、層序、遺物の有様において時期を決定する根拠の希薄さがあった。しかし、全般的に層位を基本としているため、各遺構についてかなり具体的に記述することができる。

SD01 Aトレンチ中央部で検出された幅約1.2m・深さ0.1mの南北溝である。溝の堆積土は腐植物を含む黒灰色粘質土であり、その中に薄い砂層がレンズ状にみられる。溝の両肩は大きく湾曲した不自然な立ち上がり呈している。底部は凹凸が数多くあって、足跡か杭跡ではないかと思われる。出土遺物は皆無である。溝の中心座標は、Y=-257,69.90である。この位置は、推定される東二坊大路東側溝より東へ2mずれている。

SD02 Bトレンチ西側で検出された幅0.9m・深さ0.1mの南北溝である。溝の平面プランは、直線的である。溝の立ち上がりは、北肩で急激であるのに対し、南側はなだらかである。溝の堆積土は、茶褐色粘質土中に少量の須恵器、土師器の破片が含まれている。溝の中心座標は、Y=-25,645.4mである。この位置は、東三坊第1小路西側溝推定ラインより東へ1mずれている。なお、溝の方位は、検出長が短いため、他の溝と同様、決めることができない。

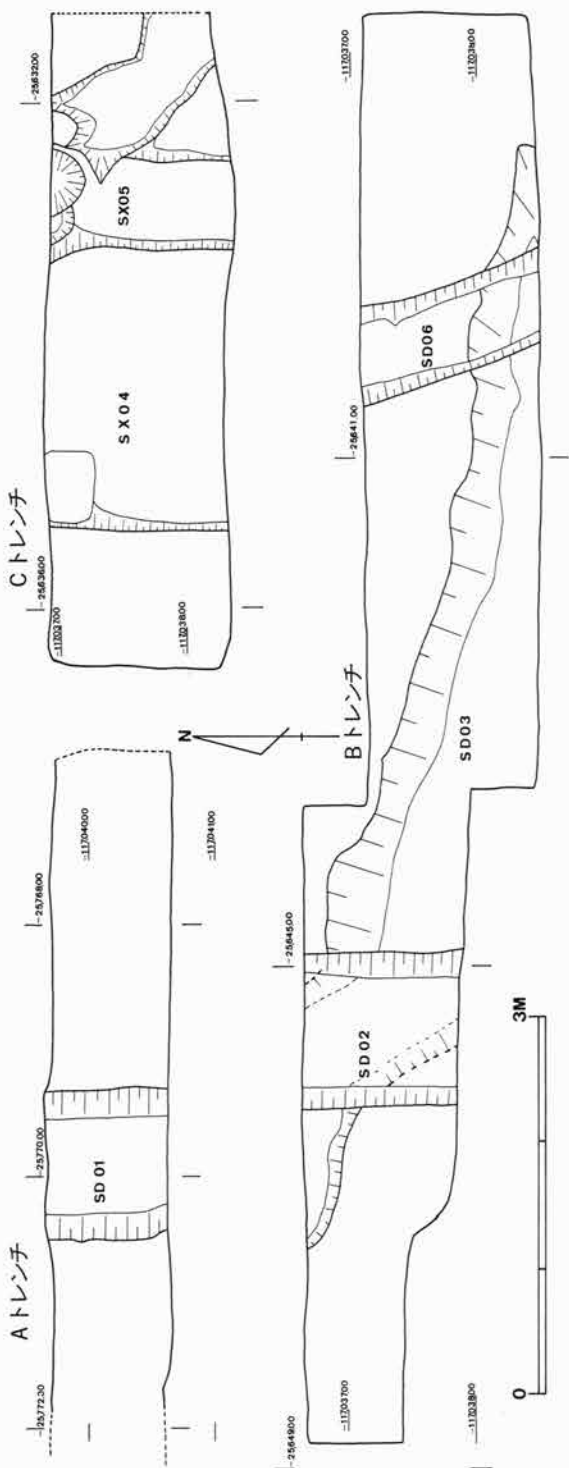
SD03 SD02の下層より検出された東南東方向の溝である。北肩のプランは、やや蛇行きみで、全体の幅・深さ等の規模は不明である。溝の堆積土は、2層に分かれ、上層が灰色砂を含む茶褐色粘質土、下層が灰色粗砂である。溝の立ち上がりや底部では、厚さ2~4cmの固くしまった黄灰色の堆積土があった。これは水に含まれている鉄分や石灰質が沈

殿，沈着したものである。このようにみると，この溝は，自然流路であると思われる。遺物は全く無かった。

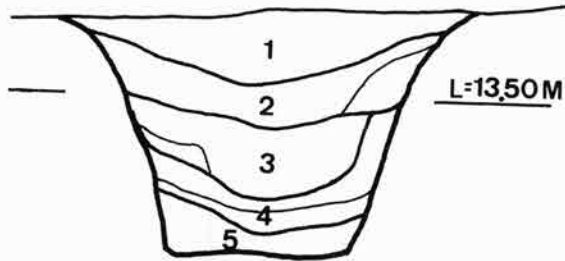
SX04 Cトレンチ東側で検出されたテラス状の遺構である。西側に肩をもち10cmの段差を持ち幅2mを測る。この段上は須恵器，土師器を含む褐灰色粘質土が堆積している。

SX05 SX04に連続して東へ傾斜する遺構である。堆積土は，暗褐色粘質土と茶褐色粘質土の混合層である。層中からは長岡京期の土器類・瓦・炭化物が出土した。この遺構は，断面，底部平面形態から，東肩が未検出ではあるが南北溝であろうと思われる。

SD06 SD03の下層から検出された南東方向に流れる溝である。検出面での肩のラインは，基盤層である黄褐色粘質土と区別しにくい。溝の幅は，0.8m・深さ0.5mを測り，断面逆台形を呈し，するどく直線的に立ち上がる。堆積土(第53図)は，(1)黄灰色粘砂質土，(2)淡灰色粘質土，(3)暗褐色粘質土，(4)灰色粘質土(暗褐色粘質土混り)，(5)灰色粘質土の順である。この溝から弥生時代後期の土器片が出土し，とくに暗褐色粘質土に集中している。この堆積状況から，流路



第52図 遺構実測図



第53図 SD06 断面実測図 (縮尺1/20)

というより、閉塞的な溝であると
考えられる。

5. 出土遺物

出土遺物は、須恵器・土師器・
陶磁器・瓦など、土器類がほと
んどで、整理用コンテナパーッ

ト2箱分に満たない。とくにSX05から多く出土し、この遺構の性格を知る上でも貴重で
ある。また、希少なものとして緑釉の羽釜がある。

(A) SX05出土遺物(第54図)

1は、緑釉陶器、羽釜である。幅広い把手の上面に淡い緑釉が施されている。体部外面
は無施釉で媒が付着する。把手の外径を30cmに復原したが、一般的に口径14~15cm、把
手の外径25~26cmであろう。2は土師器、甕Aで、口縁部は「く」の字形に外反し、端部
は内側に肥厚する。口径10.8cm、小型甕である。3は土師器、甕Aで、口径13.1cmを測
る。口縁部は直線的に外反し、胴部径より大きくなる。端部は、内外に若干肥厚する。6
は土師器、皿A、口径18.8cmを測る。体部外面にややケズリの痕跡があり、口縁部は斜上
方にのび、端部はまっすぐおさまる。7は、土師器皿A、口径20.0cm・器高2.3cmを測る。
6と同様の手法であるが、端部は内外に丸くおさめる。

8は、須恵器、壺Aである。口径11.1cm・器高18.2cmを測る。台形状の高台が付く底部
から、弓状に内湾し、肩は強くはり、口縁部は短くほぼ直立する。端部は小さく三角形に
肥厚する。9・10は、須恵器、蓋Aである。9は、口径14.1cm、天井部には少し扁平な鈕
が付く。10は口径15.8cm、口縁部が強い押さえのため屈曲が目立つ。13は須恵器の甕であ
る。口縁端部内面にヘラによる刻み目が認められる。16は須恵器、杯Aである。口径19.6
cmを測る大型である。体部から口縁部まで直線的に斜上方にのび、端部はまっすぐおさま
る。17は、須恵器の盤Aである。底部は平底で、斜上方に直線的に立ち上がる。

(B) その他の土器

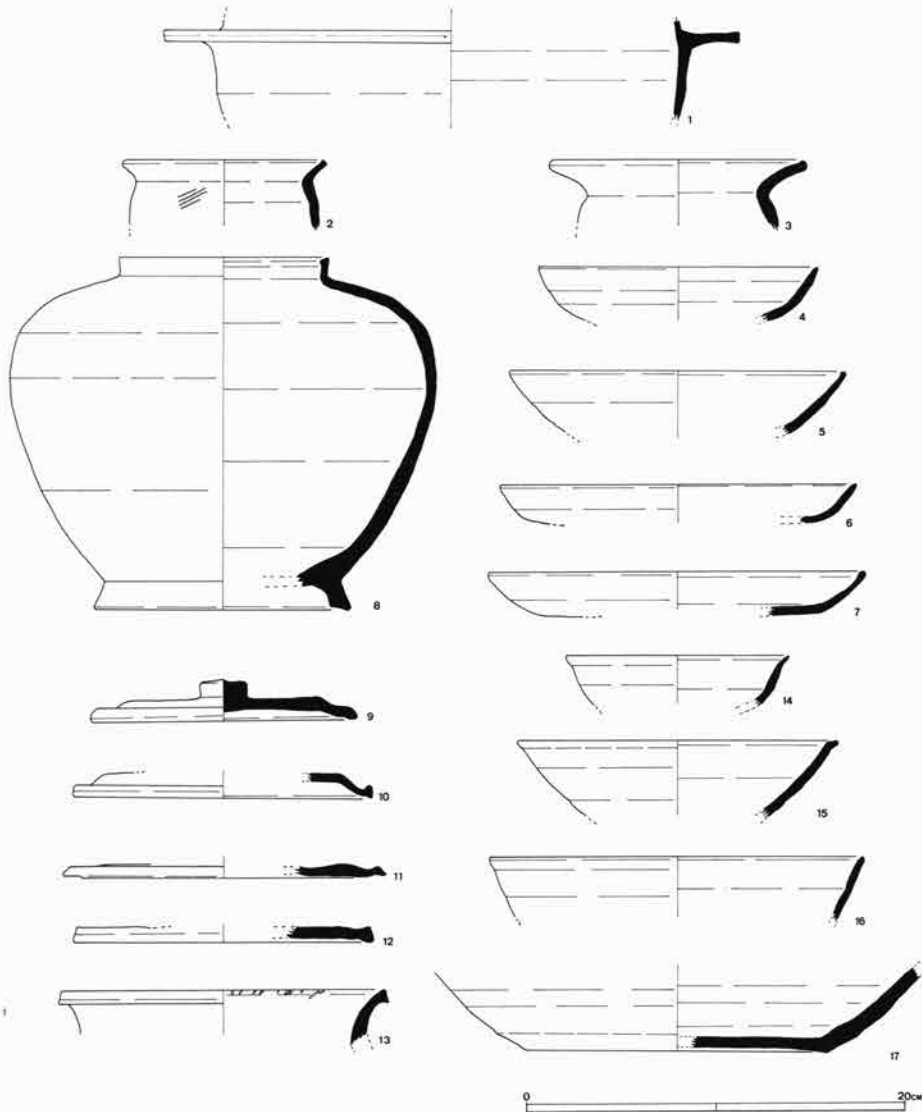
4・5・11は褐灰色粘質土から出土した。4は土師器、杯A、口径14.6cmを測る。5
は土師器、杯A、口径17.7cmを測り、大型である。端部内面がやや肥厚する。

14・15は、茶褐色粘質土から出土した。14は須恵器、杯Aで、口径11.7cmを測る。口縁
端部は外側に屈曲しておさまる。15は、須恵器の杯Aで、口径16.8cmの大型品である。

6. ま と め

今回の調査の結果、S D01は東二坊大路の東側溝、S D02は東三坊第1小路の西側溝である可能性が高い。しかし、否定的な観点で言えば、溝の幅がやや狭い。^(注4)推定位置から少しずれていることがあげられ、条坊側溝であると断定するに至らない。

S X04とS X05を連結してセット関係でとらえる根拠は無い。そこで、S D02との距離で関連性(東三坊第1小路の道路幅)を求めることにしたい。S X04は明らかにテラス状の遺構であり、「瑞地」を想定することができ、S D02とS X04(西肩)との距離は9.4mであ



第54図 出土遺物実測図

る。S X05は、先述のとおり東肩が未検出ではあるが溝の性格を強くもち、S D02との距離は11.4mである。このようにみるとS D02からS X04、S X05は、東三坊第1小路の路面、瑞地、東側溝に比定できると考える。しかし、小路の幅を9m(3丈)に復原されているため、S X04の西肩は、妥当な数値を得られるが、S X05の西肩は2m広く、やや無理ではないかと思われる。

以上、長岡京の条坊側溝に関して確固たる資料は得られなかったが、一つの仮説として記述した。S D03やS D06は、下層遺構として貴重なものであり、性格づけを行わねばならないが、狭小なトレンチのため、その全容を明らかにできない今、将来の調査・研究を待って、考察していきたい。

(竹井治雄)

注1 調査補助員、上田俊章、中西正樹、長谷川聡

注2 SD01の遺構について向日市教育委員会の渡辺博氏の助言を得た。

注3 基準点「52-3」、「52-12」の2点を使用した。

注4 長岡京条坊の推定位置、計画線の座標値は、宮原晋一「長岡京における造営規範についての覚え書」(『長岡京古文化論叢』1986.6)に依った。

8. 田辺城跡第9次発掘調査概要

1. はじめに

田辺城は、天正12(1584)年頃、細川氏によって築かれ、明治4(1871)年に廃城になったもので、舞鶴城とも呼ばれた。現在は、本丸と二の丸の一部が舞鶴公園になっており、石塁や天守台の跡が残っている。昭和56年に始まる本格的な発掘調査は、今回の調査までに8次を数え、二の丸堀跡・同侍屋敷跡・本丸堀跡・大草櫓石垣等が検出され、また、近世陶磁器・瓦・木製品が豊富に出土している^(注1)。

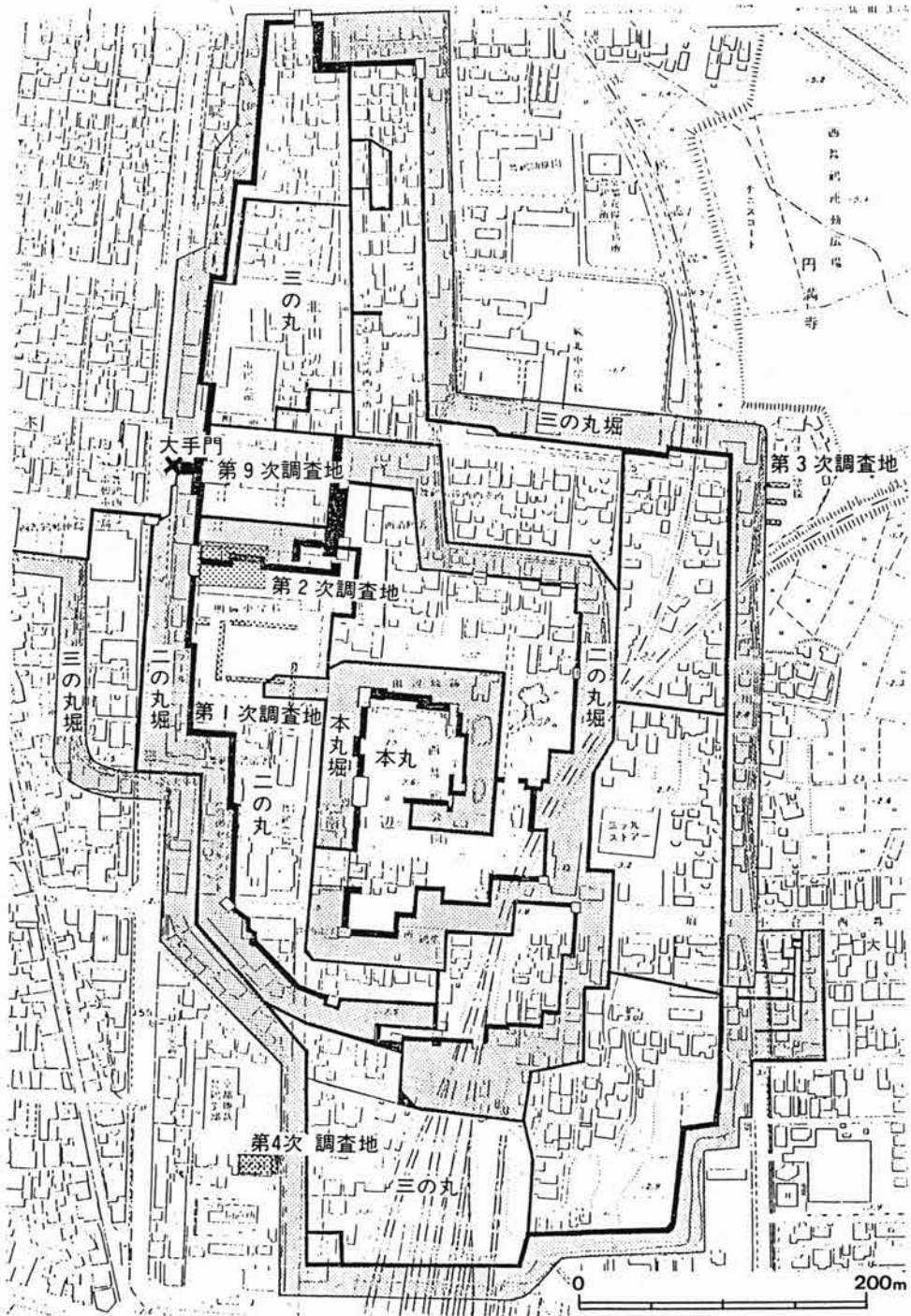
今次の調査は、建設省による国道27号線の西舞鶴地区舗装修繕工事に先立って、当調査研究センターが実施したものである。調査地は、舞鶴市北田辺小字追手前127番地の歩道部分であり、江戸時代の絵図及び近年の発掘調査の成果による城郭の復原によれば、大手門、あるいは西の町屋からそれに通ずる土橋の位置にあたと想定されていた。

発掘調査は、昭和61年10月23日に現地着手し、同年10月30日に終了した。現地の調査は、当調査研究センター調査課主任調査員小山雅人と調査員田中彰が担当した。調査にあたっては、舞鶴市教育委員会の吉岡博之氏に、多大な御教示と協力をいただいたことを記し、深く謝意を表したい。以下の報文は小山、図版は田中が担当した。

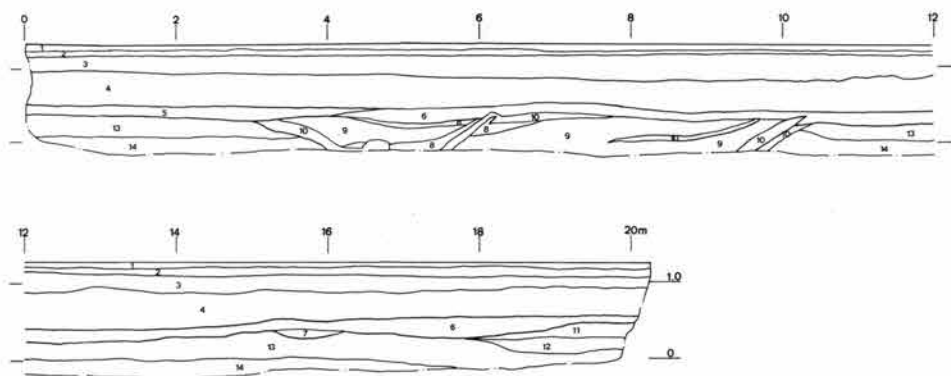
2. 調査の概要

調査にあたっては、まず大手門ないし土橋の位置にあたと推測される位置に南北20m・東西1.5mの長細いトレンチを設定した。このトレンチの北東隅(第56図の0m地点)の国土座標における位置は、 $X = -61,376.910$ 、 $Y = -60,667.095$ であり、南東隅(第56図の20m地点)のそれは、 $X = -61,395.669$ 、 $Y = -60,665.891$ である。

トレンチを重機によって掘削を開始したところ、地表下80cm(G. L. = 0.40~0.58m)までは、無遺物のバラスや砂混り土層(第56図2~4層)であったが、その下層に、北では赤褐色粘質土(同5層)、南では濁黄緑褐色砂土(同6層)を検出した。この厚さ10~20cm(最大24cm)の層は、上記の吉岡氏の御教示によれば、整地層であるとの事である。更にその下層は、暗灰褐色粘土が25~30cmの厚さで堆積しているが、トレンチの北から3m地点と10.4m地点との間には、大きな落ち込みがあり、暗灰褐色粘土(第56図9層)の中に相当量の木質性植物遺体が層をなすように堆積していた。後述する遺物は、いずれもこの落ち込み(第56図8・9層)から出土したものである。海拔0~0.1m以下(第56図14)は明る



第55図 田辺城跡復原及び調査地位置図
(舞鶴市教育委員会作成図を基に加筆・補足したものである。)



第56図 トレンチ東壁断面実測図

1. アスファルト 2. バラス 3. バラス混り黄色土 4. 灰褐色礫混粘土
 5. 赤褐色粘質土 6. 濁黄緑色砂土 7. 6にはほぼ同じ 8. 黄褐色粘質土
 9. 暗灰褐色粘土(木質混り) 10. 木質性植物堆積 11. 灰褐色砂質土
 12. 黄色粘土混り暗灰褐色粘土 13. 暗灰褐色粘土 14. 明灰褐色粘土

い灰色を呈する固く締った粘土で、地山と推察される。

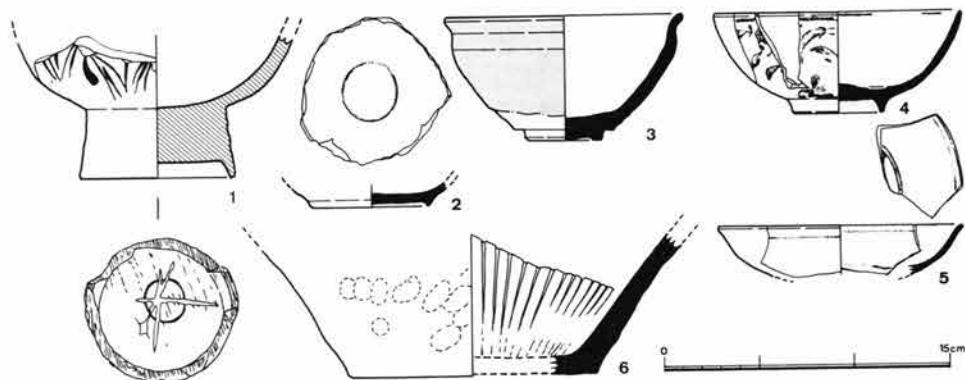
3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナにして1箱に満たない量であるが、主要なものを第57図に図示した。いずれも、上述した落ち込みからの出土である。

1は、木製漆塗りの椀である。2片に分かれて出土したが、残存高7.1cm・底径8.0cmを測る。外面は黒色を呈し、絵柄は朱色である。内面は朱色の漆塗りである。

2は、灰釉の皿である。底径6.1cmを測る。釉の厚さは最大1mmである。見込み部分に、直径3cmの円環文が見られる。

3は、美濃系の天目茶碗である。ほぼ完形品であり、口径12.4cm・器高6.4cmを測る。鉄釉は茶褐色を基調とし、非常に光沢が強い。胎土は軟質で、明黄褐色を呈する。



第57図 出土遺物実測図

4は、伊万里系の染付碗である。口径12.8cm・器高5.2cmを測る。図示し得ていないが、染付文様は内面にも、口縁部に1条・底部と体部の境に2条の圏線、及び見込みに渦巻き状の文様が見られる。

5は、同じく伊万里系の染付皿である。欠損しており見込みの文様は不明であるが、底部と体部の境に2条、口縁部内外面に各1条の圏線が見られる。

6は、挿鉢である。淡橙褐色を呈する。外面は横ナデ仕上げであるが、指頭痕を多く残している。内面の特に底部近くはかなり擦り減っており、相当期間の使用が推察されよう。

4. ま と め

調査開始当初は、城郭の北西部にあった大手門に至る土橋の検出を想定していた今回の調査であったが、上に報告したように、濠よりも外側の西に広がる町屋の整地層が検出されたにとどまった。整地層の下層に関しては、トレンチ中央の7m以上に及ぶ落ち込みがあったが、樹木を主とする植物遺体が折り重なるように落ち込んでおり、溝ないし河川あるいは池状の地形を埋め立て、整地を行ったかのような様相が見られる。田辺城は、天正年間の築城当時には、南側に大手門があったと復原されているが、江戸時代の「田辺御城図」では、今回の調査地付近に移っている。上述した整地層の形成は、下層落ち込み遺構から出土した遺物から判断して、17世紀末ないし18世紀初頭以後と考えられる。もし、城郭北西部に大手門が移った時期に濠の外側の町屋において、整地工事が行われたと仮定すれば、その工事は18世紀初頭あるいは前半頃に限定できるかも知れない。

何分狭小なトレンチによる調査であり、この断片的な資料によって大手門の移築時期という大問題を云々することは早急に過ぎることは当然である。今後周辺での調査が積み重ねられるならば、今回得られたデータも活かされるであろうし、田辺城の城郭の変遷もより詳かに解明されるであろう。

(小山 雅人)

注1 辻本和美「田辺城跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984, 65頁及び引用文献参照。

图

版



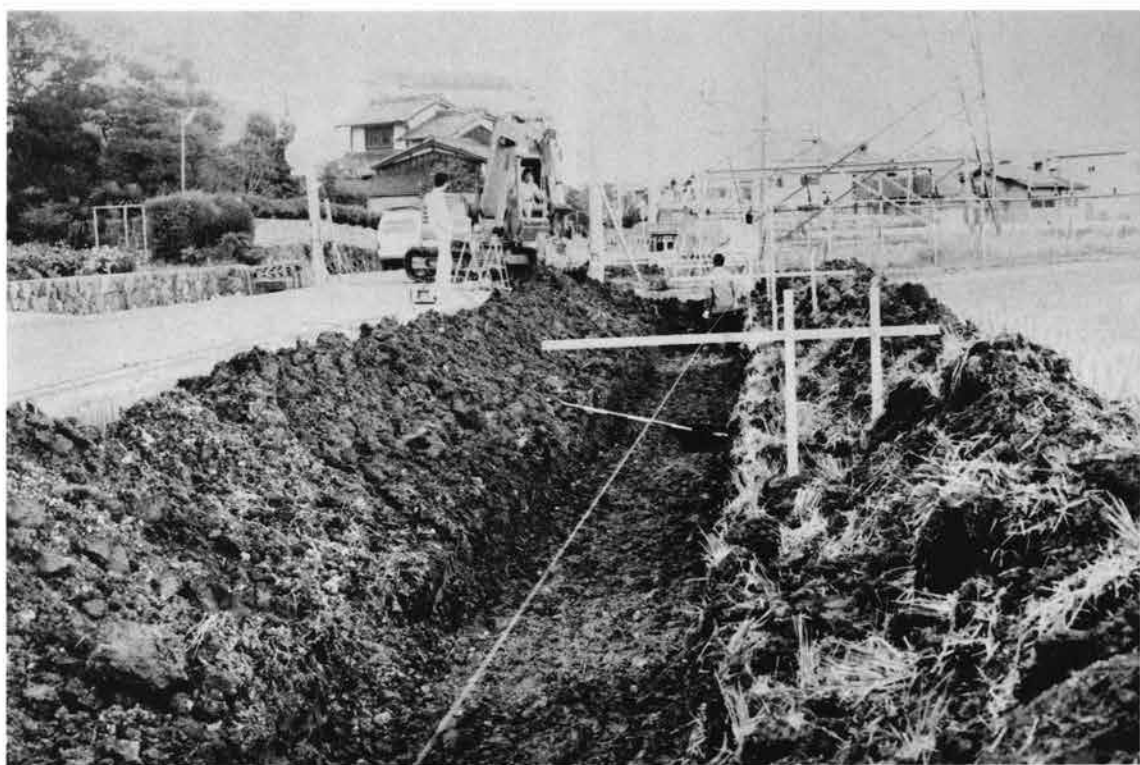
(1) 下植野立会調査状況（北東から）



(2) 同上 土層断面



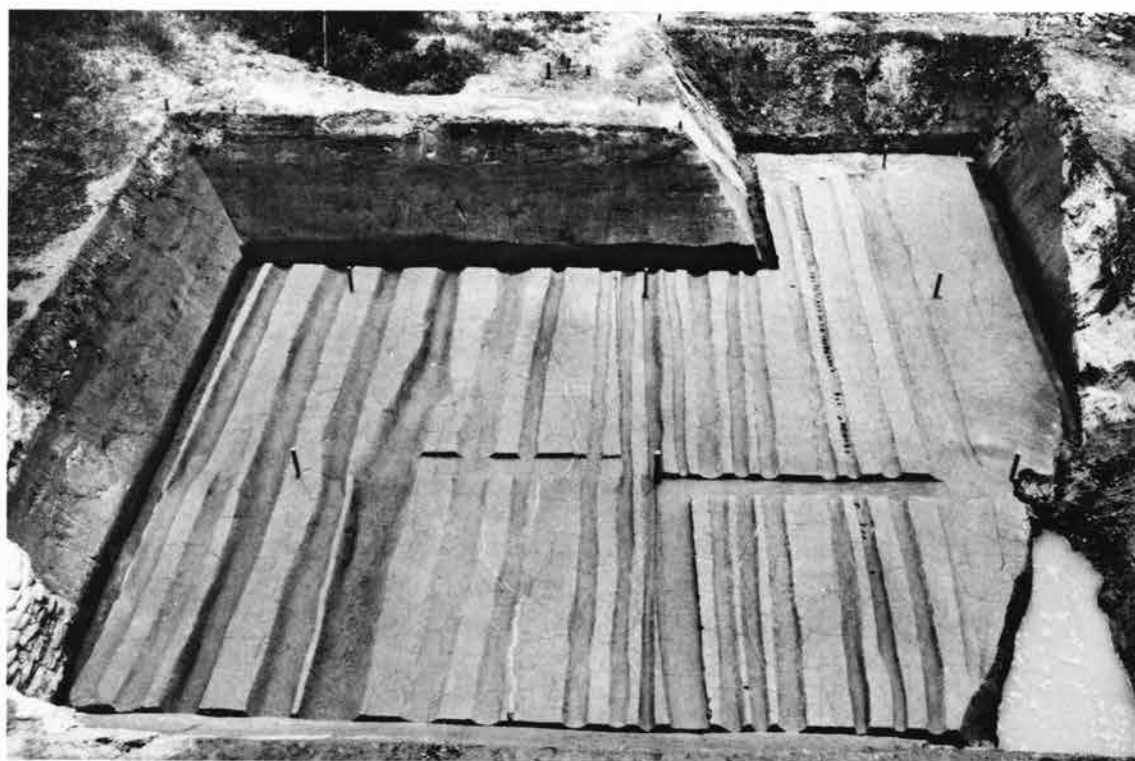
(1) 下植野立会調査状況（北東から）



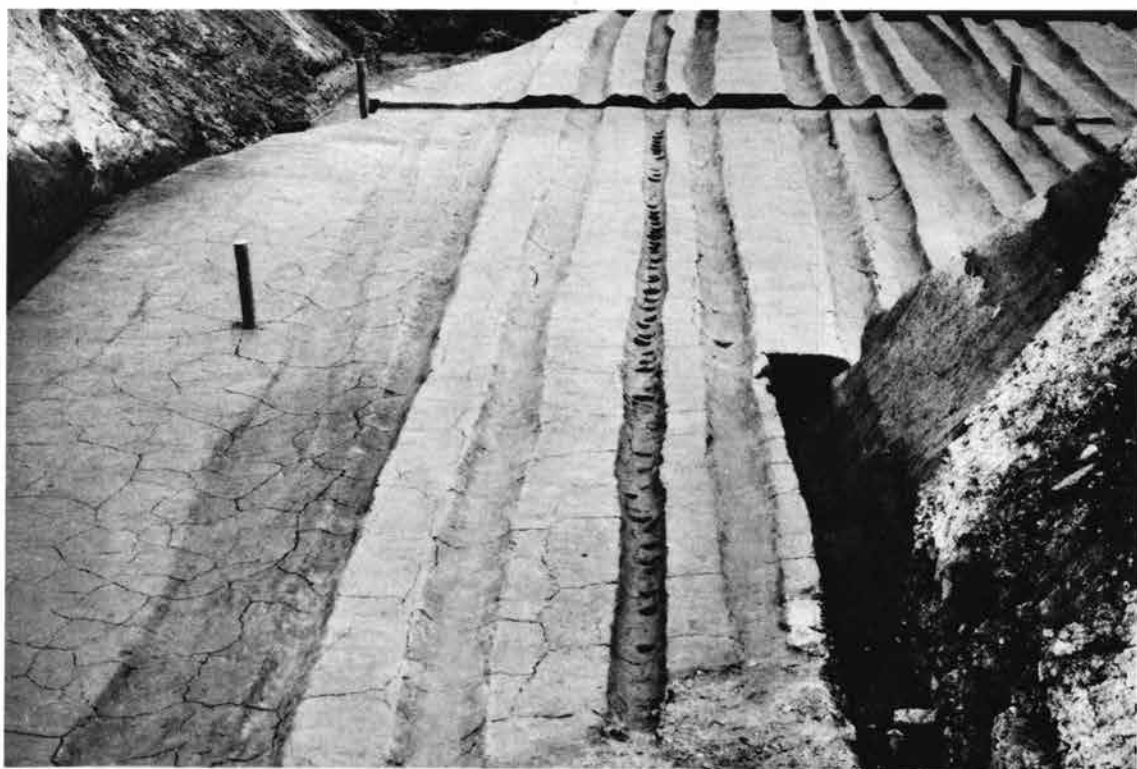
(2) 同上（南西から）



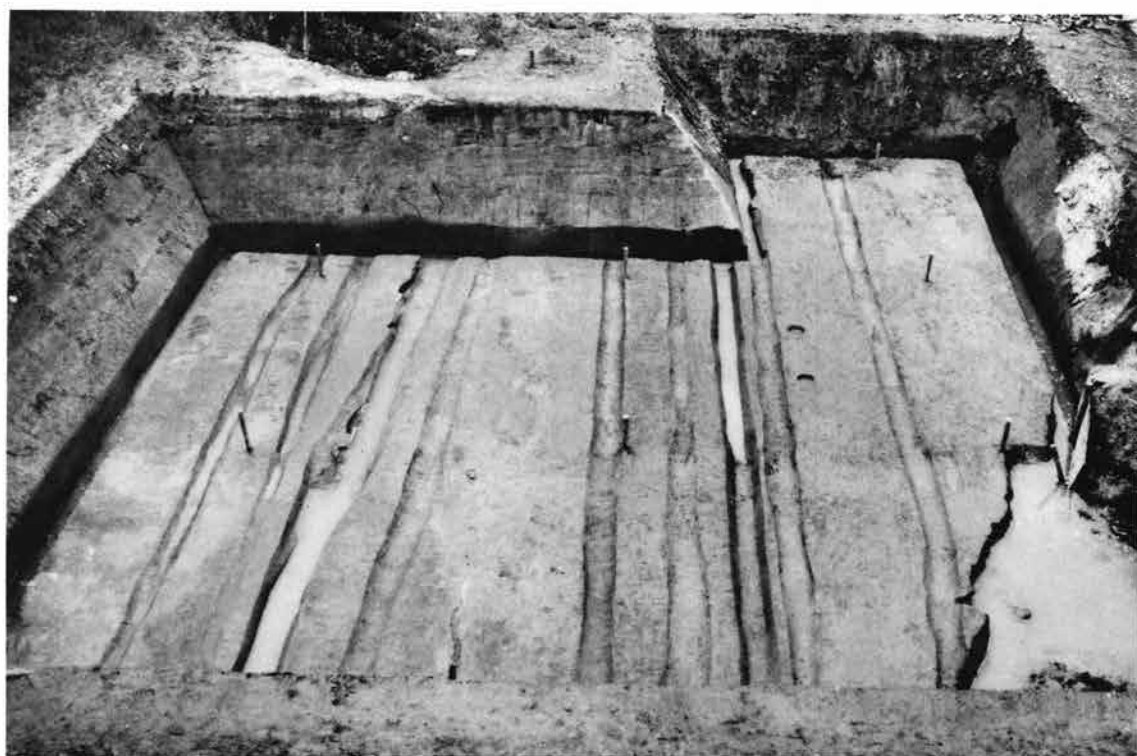
(1) JN地区 第I面検出遺構(北から)



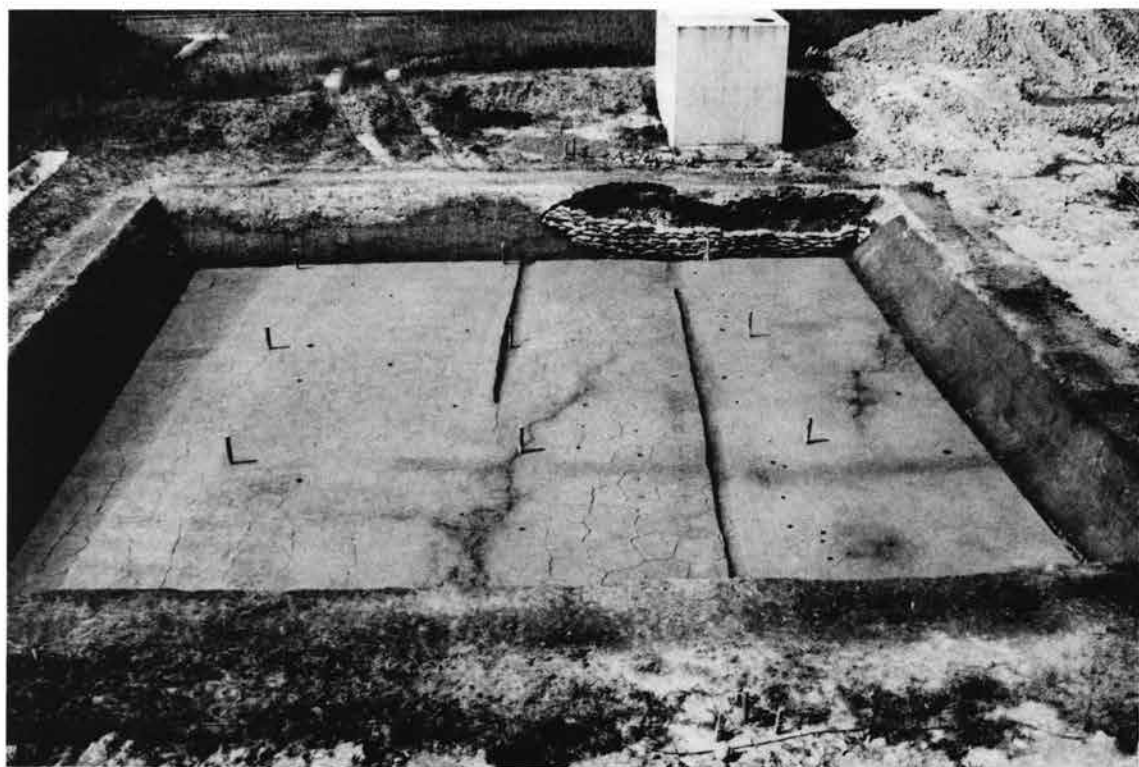
(2) JN地区 第II面検出遺構(北から)



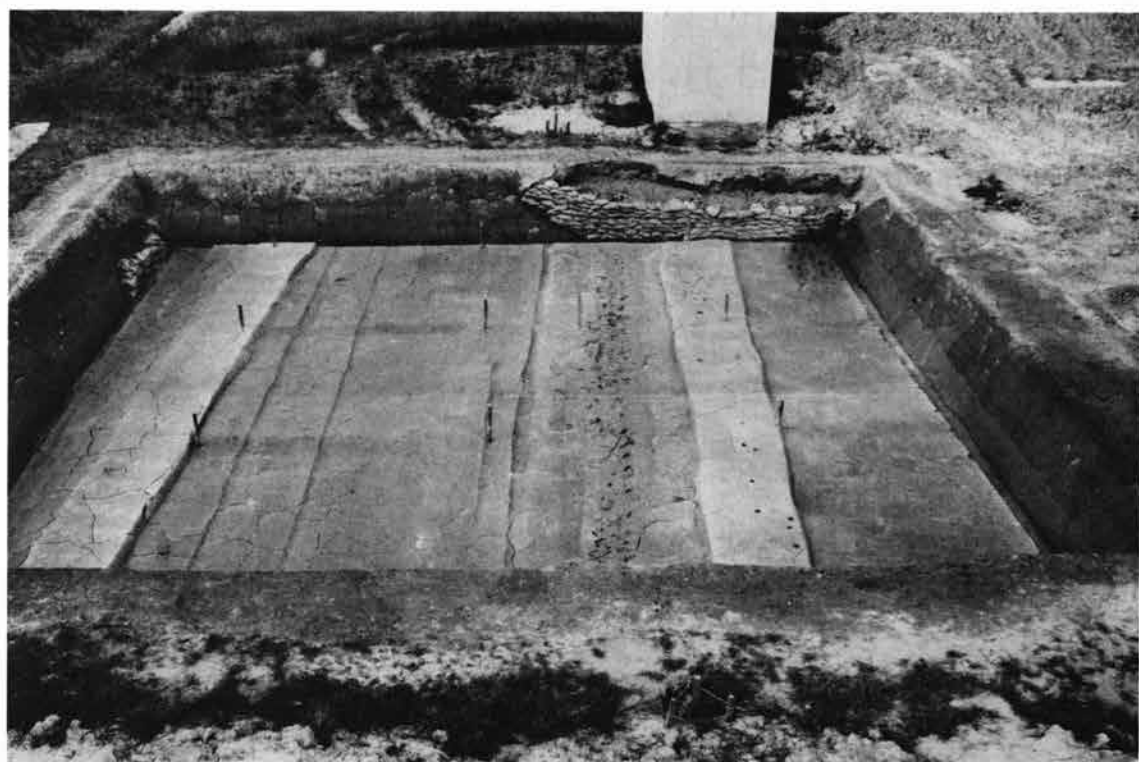
(1) JN地区 SD07内検出柵列跡(南から)



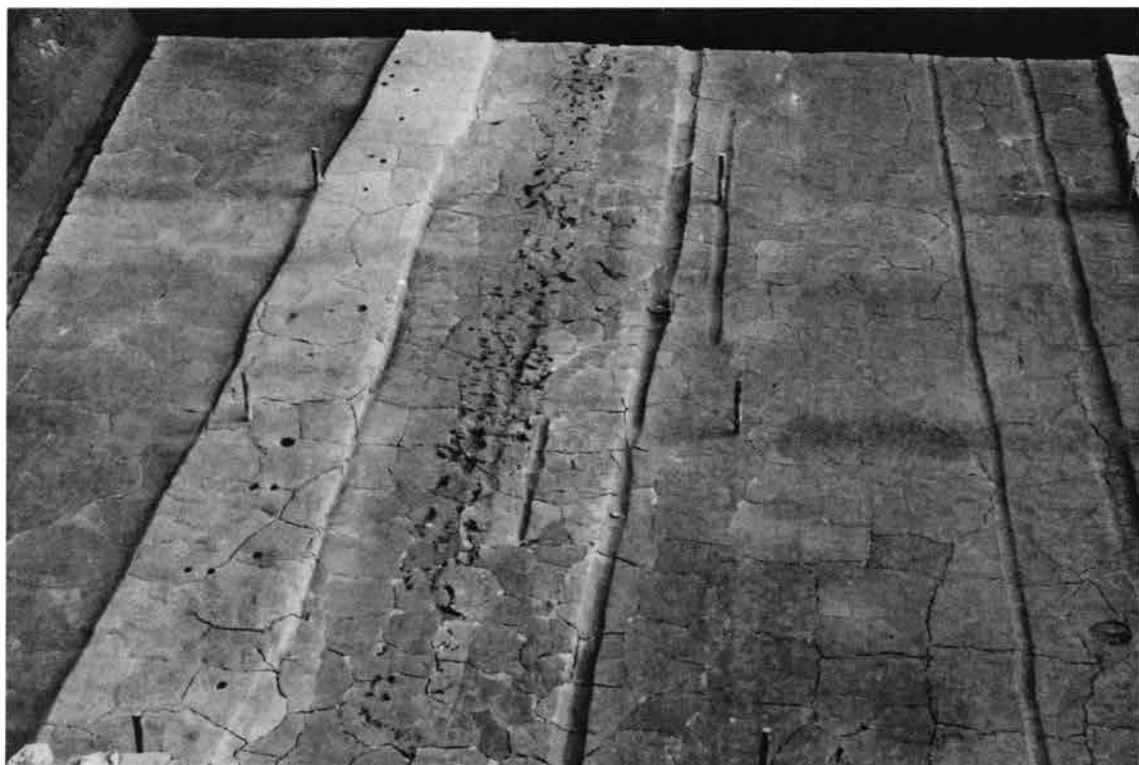
(2) JN地区 第Ⅲ面検出遺構(北から)



(1) 2P地区 第I面検出遺構(南から)



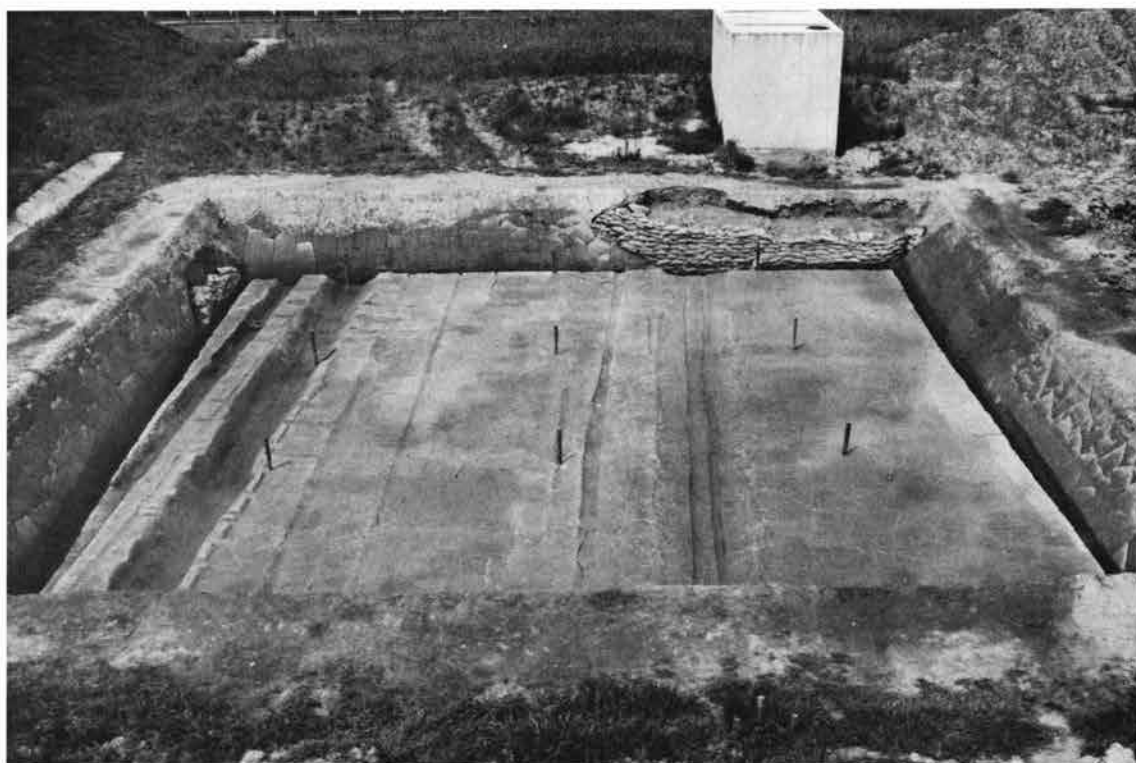
(2) 2P地区 第I・II面検出遺構(南から)



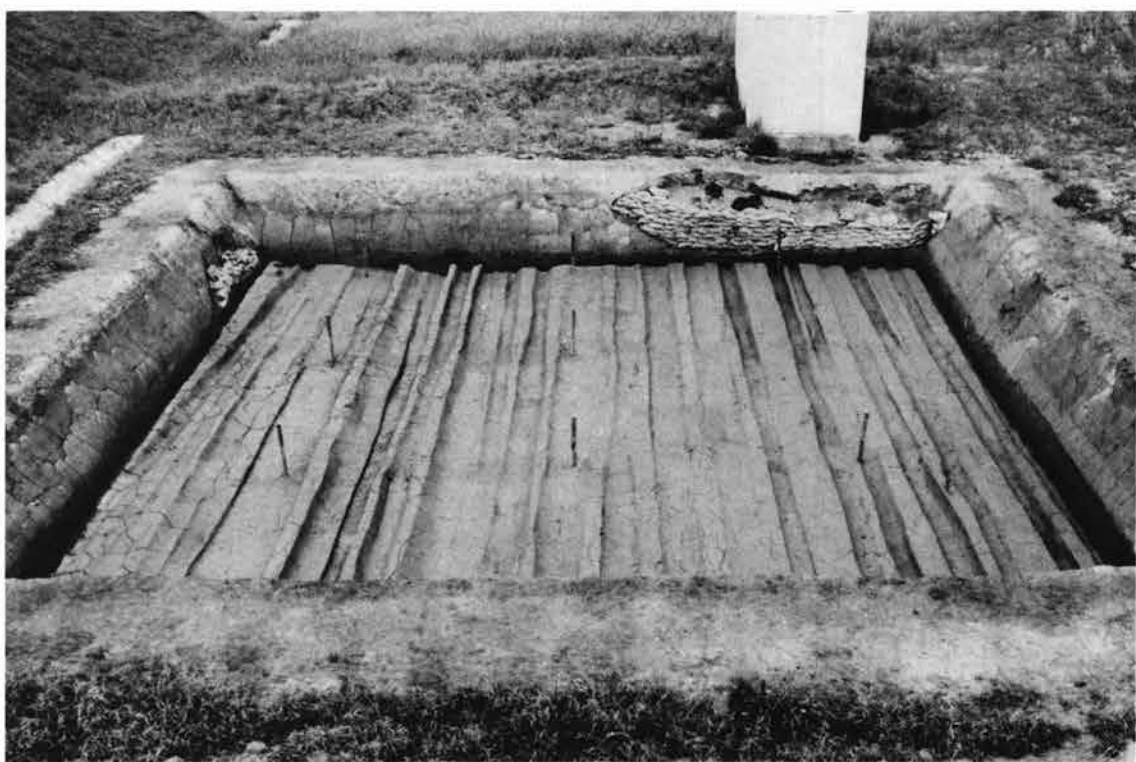
(1) 2P地区 第Ⅱ面足跡検出状況(北から)



(2) 2P地区 第Ⅱ面足跡検出状況(北から)



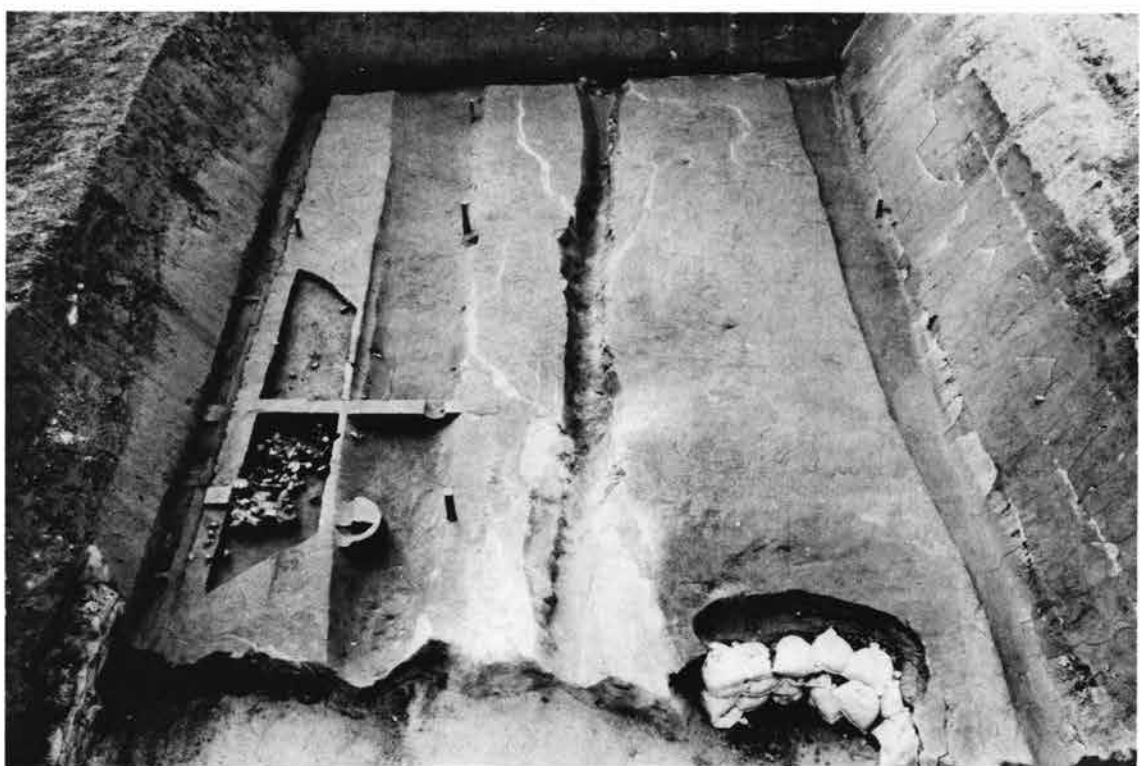
(1) 2P地区 第Ⅱ面検出遺構(南から)



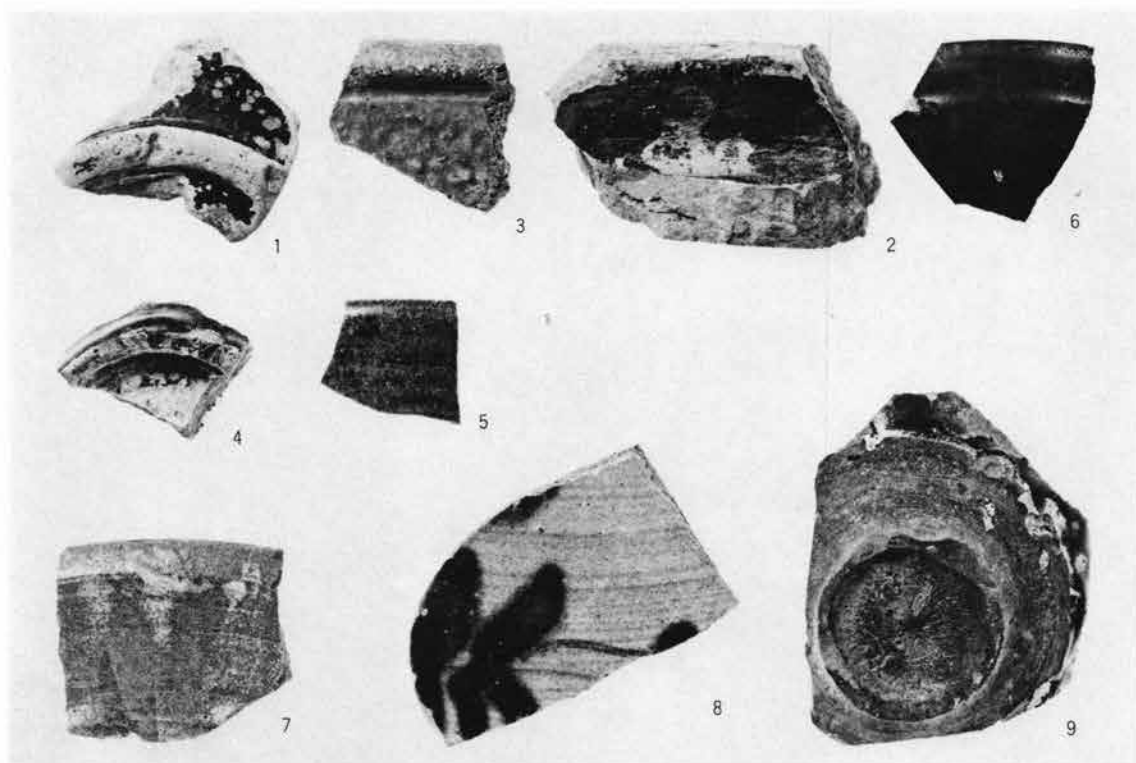
(2) 2P地区 第Ⅲ面検出遺構(南から)



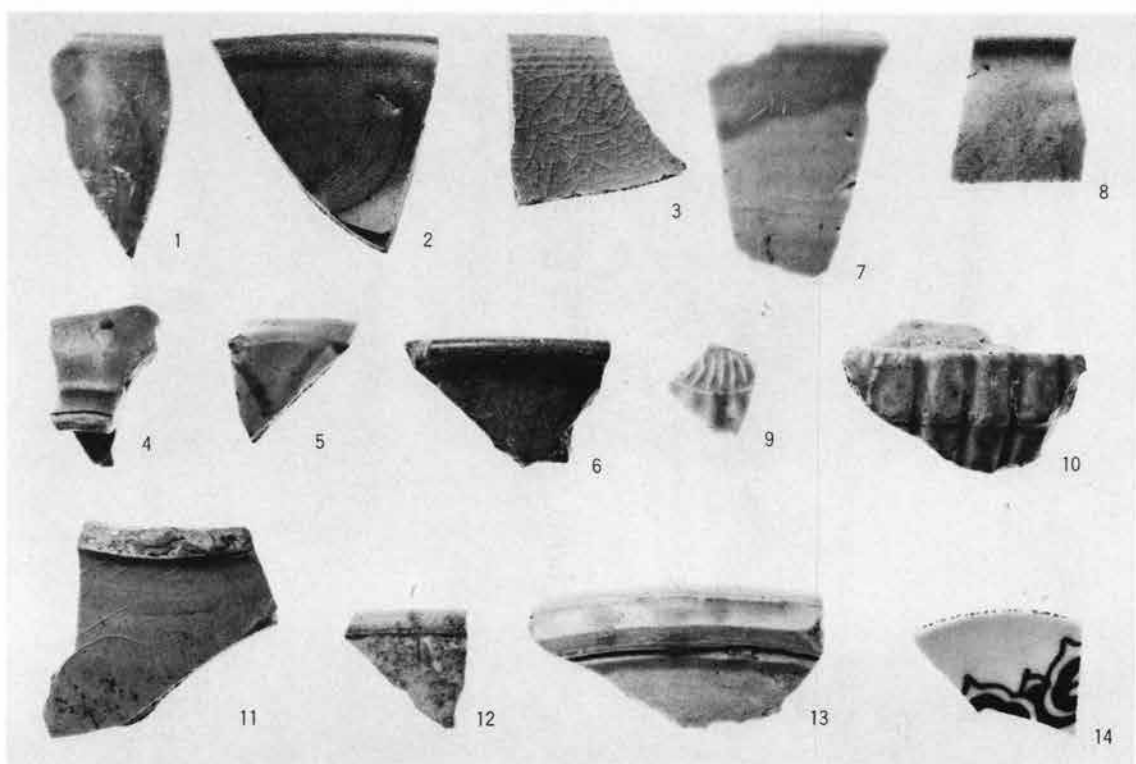
(1) ET2地区 第2トレンチ全景(東から)



(2) ET2地区 第2トレンチ検出遺構(東から)



(1) 中・近世日本製陶磁器



(2) 中国製陶磁器



(1) 2号墳全景（北から）



(2) 2号墳主体部棺検出状況（南東から）



(1) 3号墳第3主体部全景（北西から）



(2) 6号墳主体部全景（東から）



(1) 7号墳全景（南西から）



(2) 7号墳掘削後全景（南から）



(1) 7号墳第1主体部全景(西から)



(2) 7号墳第2主体部全景(東から)



(1) 7号墳周溝内遺物出土状況（東から）



(2) 7号墳周溝内遺物出土状況（南から）



(1) 8号墳全景（北から）



(2) 8号墳掘削後全景（北から）



(1) 9号墳・8号墳(北西から)



(2) 9号墳全景(北から)



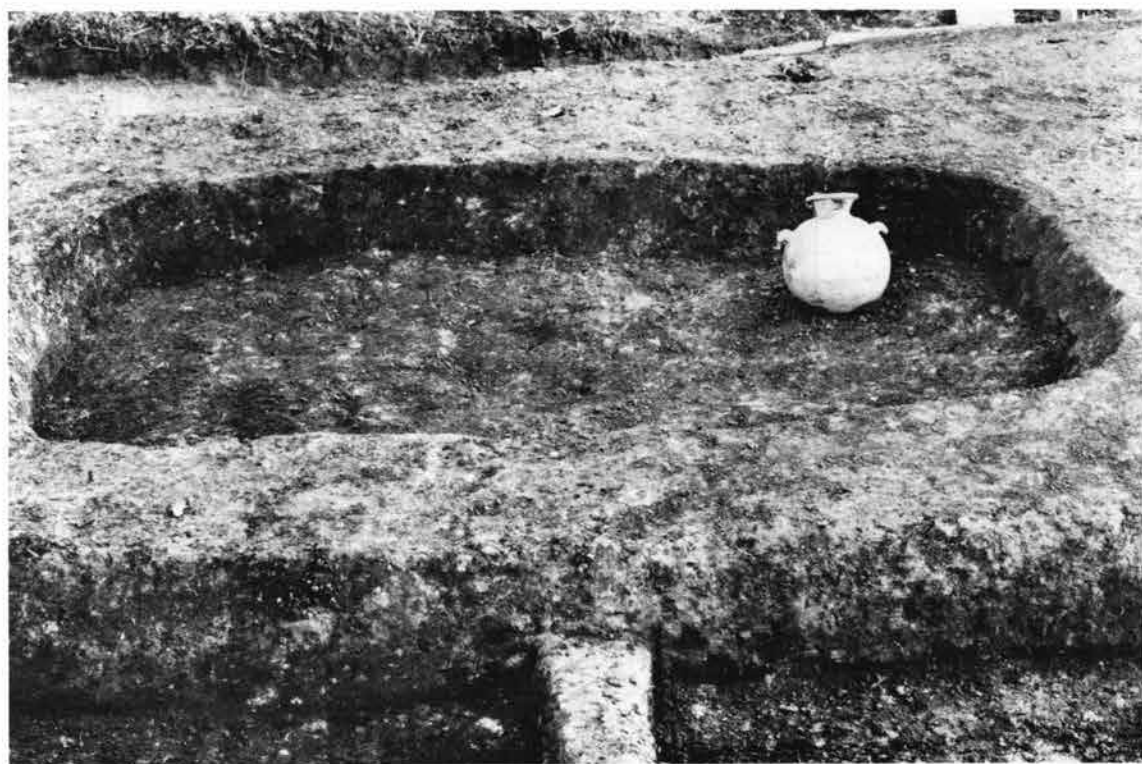
(1) 9号墳掘削後全景（北西から）



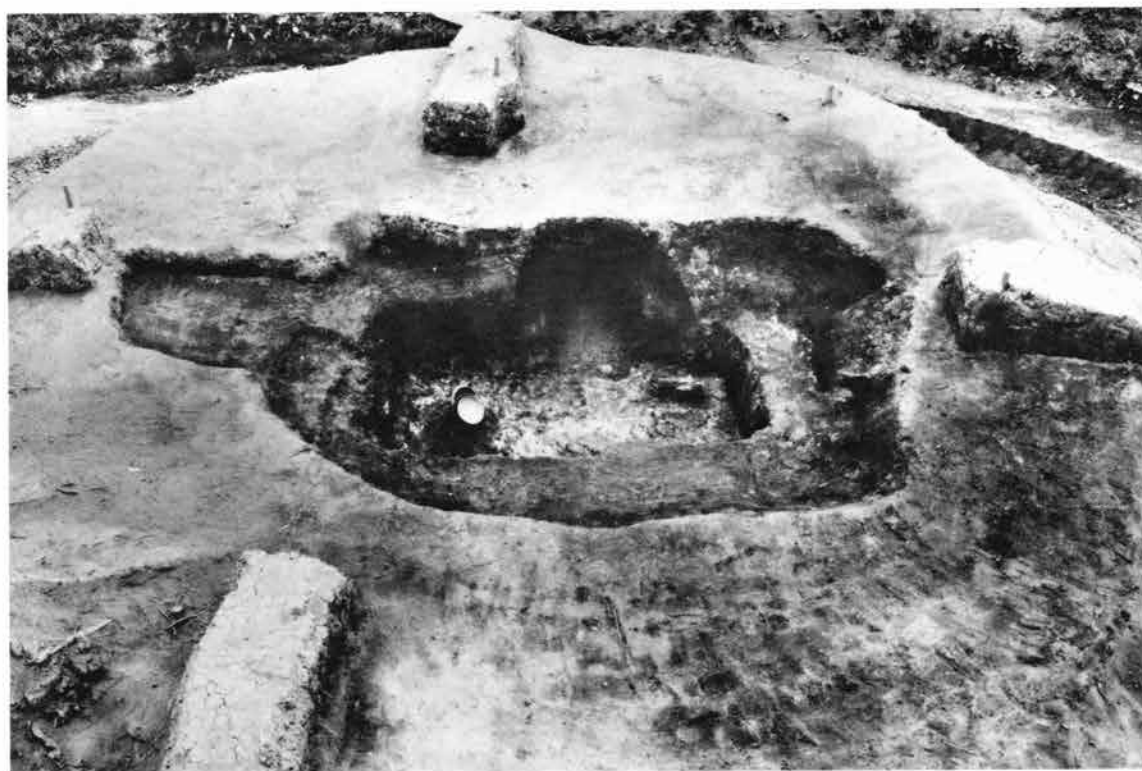
(2) 9号墳第1主体部全景（北西から）



(1) 9号墳第2主体部全景(西から)



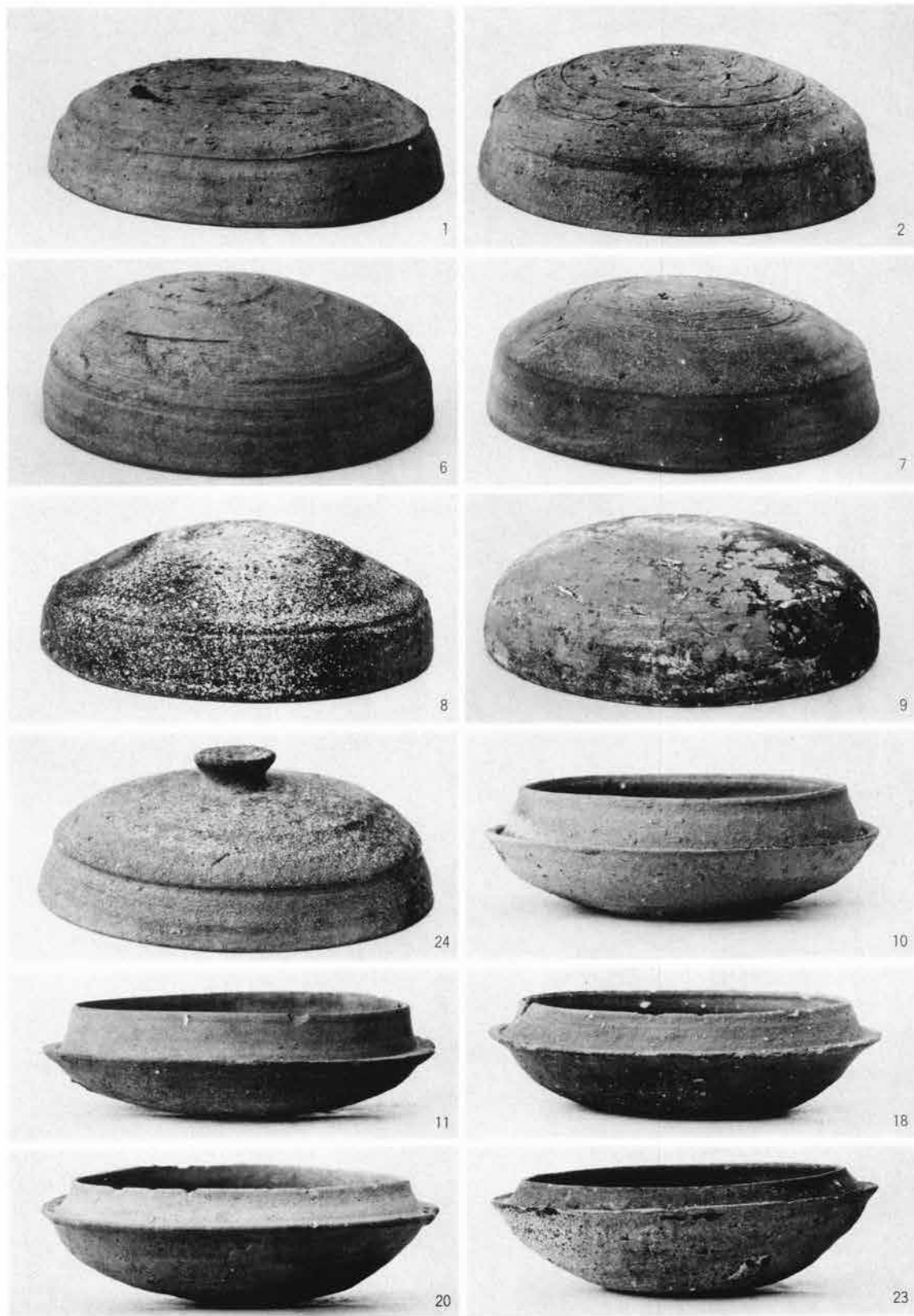
(2) 9号墳SK02全景(北から)



(1) 13号墳主体部全景（北東から）



(2) 13号墳掘削後全景（北東から）



出土遺物(1)





調査地全景



(1) 調査前全景 (東から)



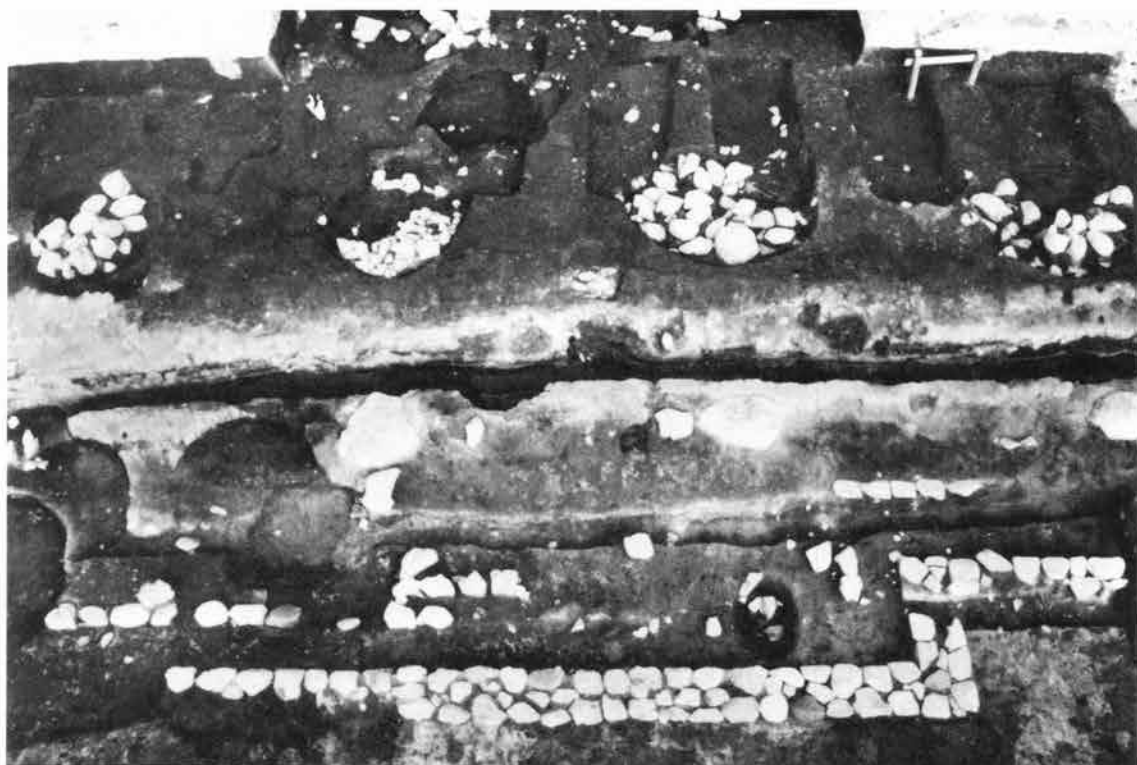
(2) 建物遺構検出状況 (東南から)



(1) 第2トレンチ全景 (南から)



(2) 拡張部全景 (南から)



(1) 建物遺構階段部 (南から)



(2) S X 01瓦溜り (南から)



(1) F 7 礎石検出状況 (南から)



(2) G 7 礎石検出状況 (南から)



(1) H 7 礎石・根石検出状況 (南から)



(2) H 6 礎石据え付け跡 根石検出状況 (北から)



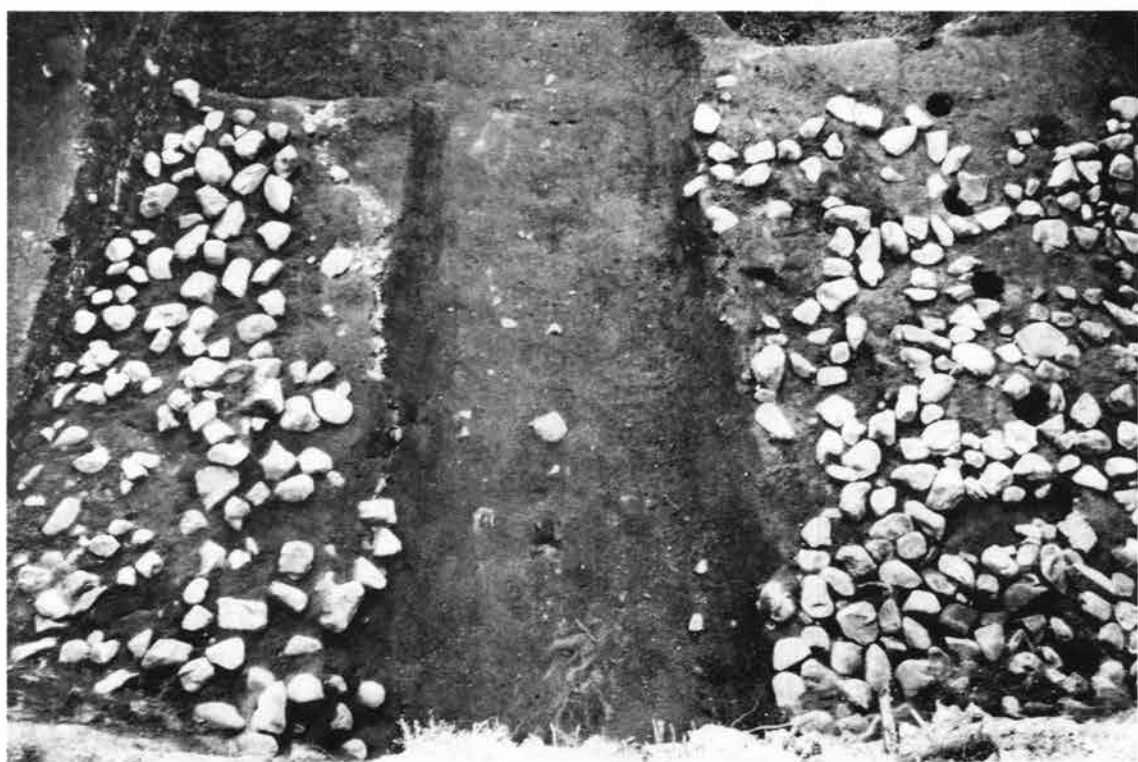
(1) G 6 礎石据え付跡根石検出状況 (北から)



(2) K 8 礎石据え付け跡根石検出状況 (北から)



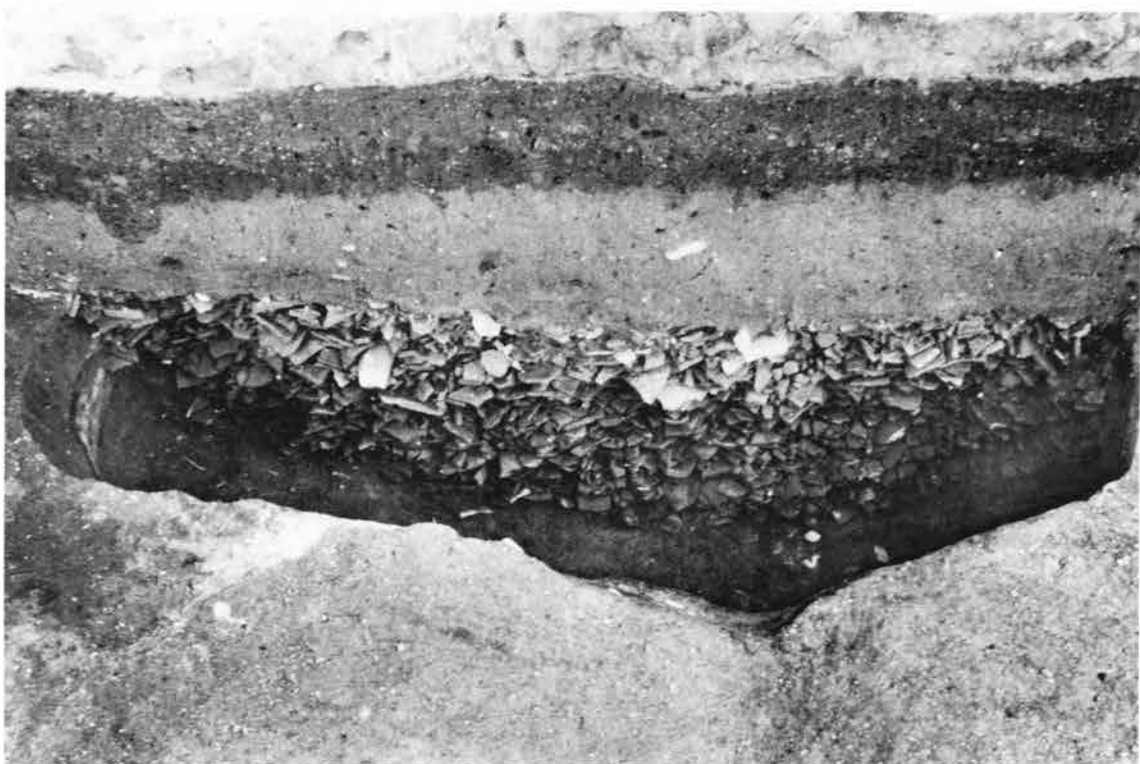
(1) 建物基壇版築層断面（西から）



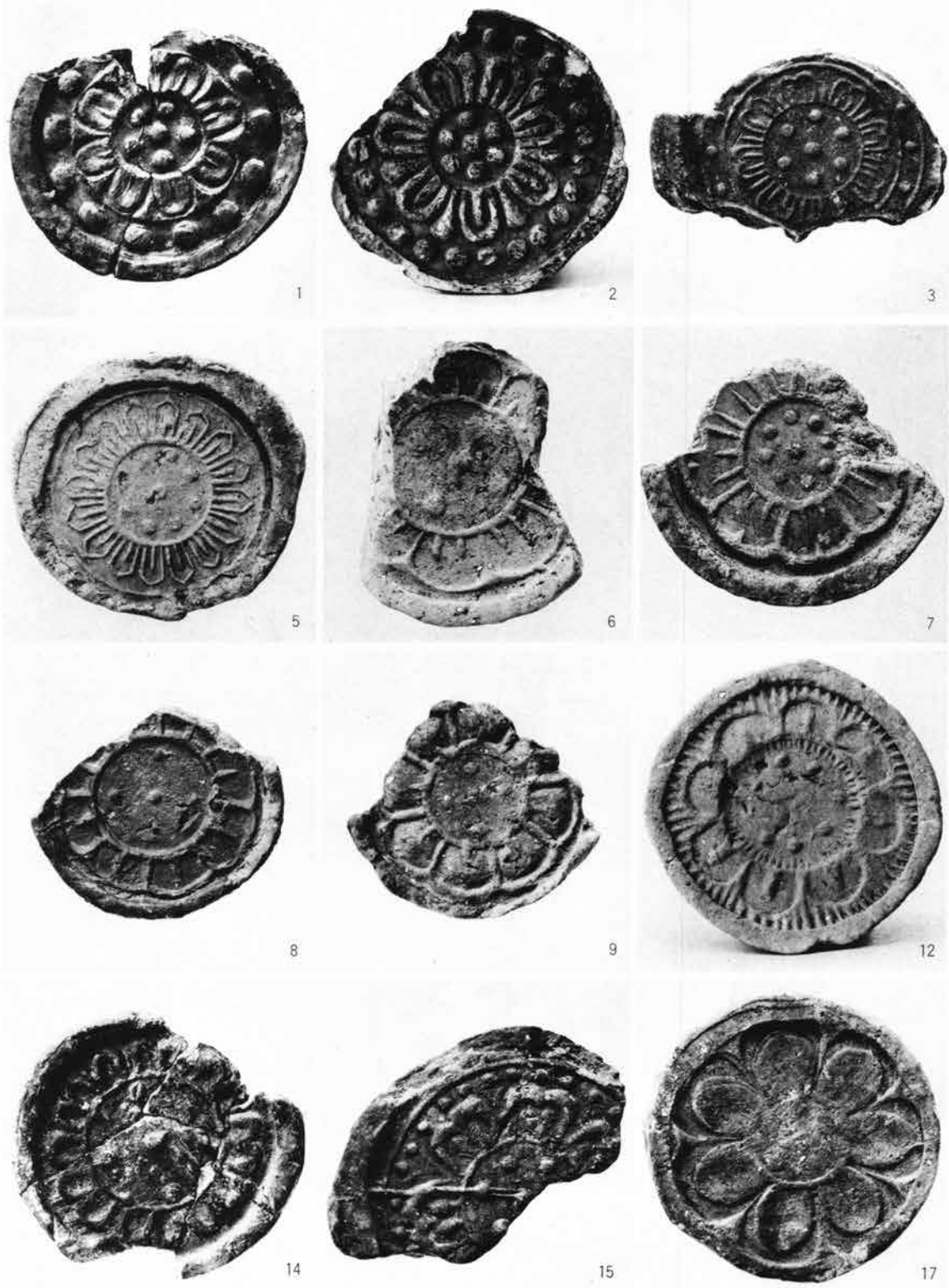
(2) 地業石敷（北から）



(1) S X06・07瓦溜り検出状況（東から）



(2) S X03瓦溜り内瓦堆積状況（北から）



尊勝寺跡出土軒瓦



尊勝寺跡出土軒丸瓦



35



36



37



38



41



43



1



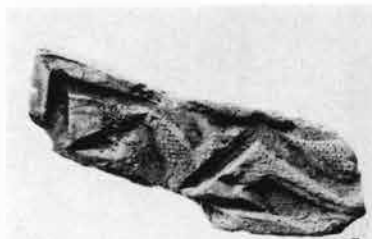
2



4



5



7



8



9

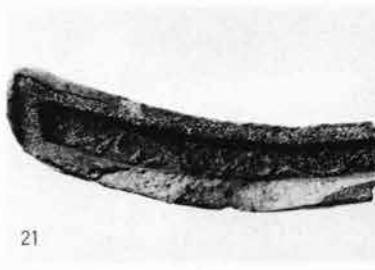
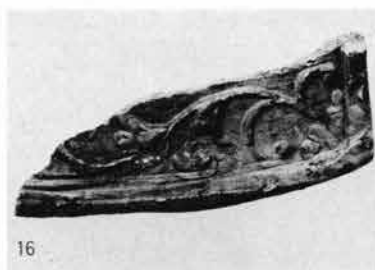
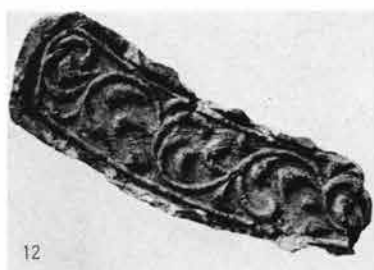


10



11

尊勝寺跡出土軒丸瓦・軒平瓦



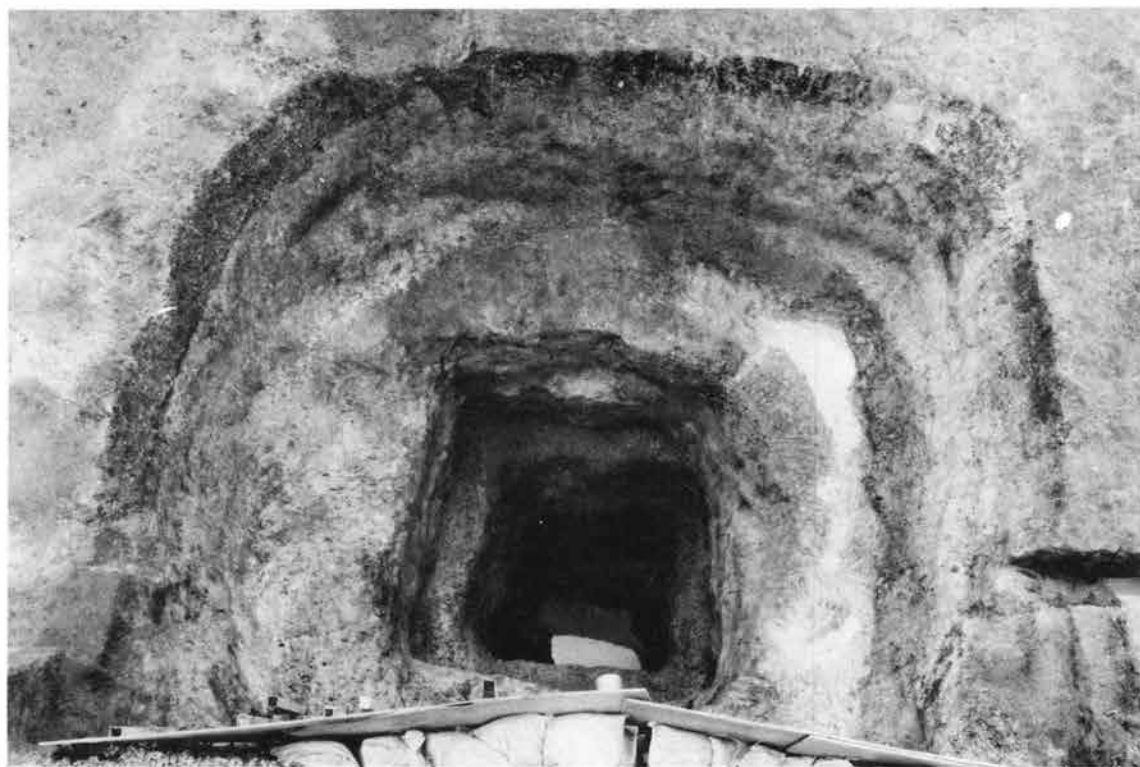
尊胜寺迹出土軒平瓦



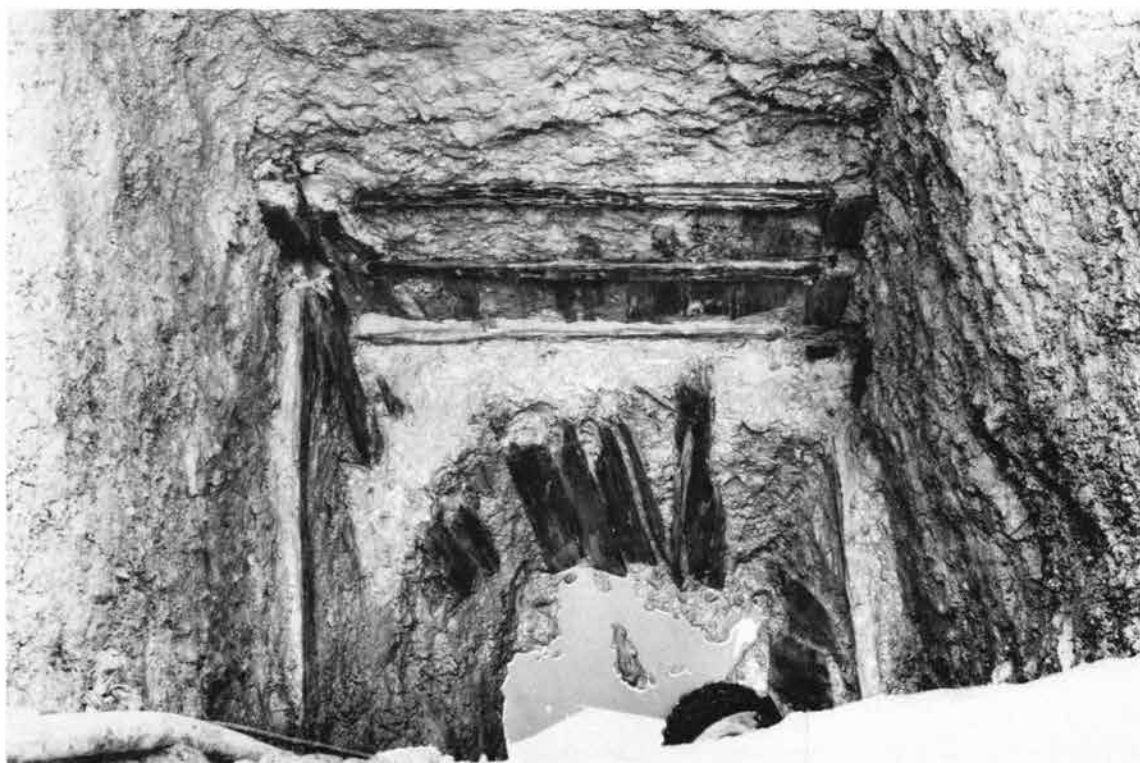
(1) 調査地全景



(2) 調査地全景（東から）



(1) 井戸 S E 24001 (西から)



(2) 井戸 S E 24001 井戸枠検出状況 (南から)

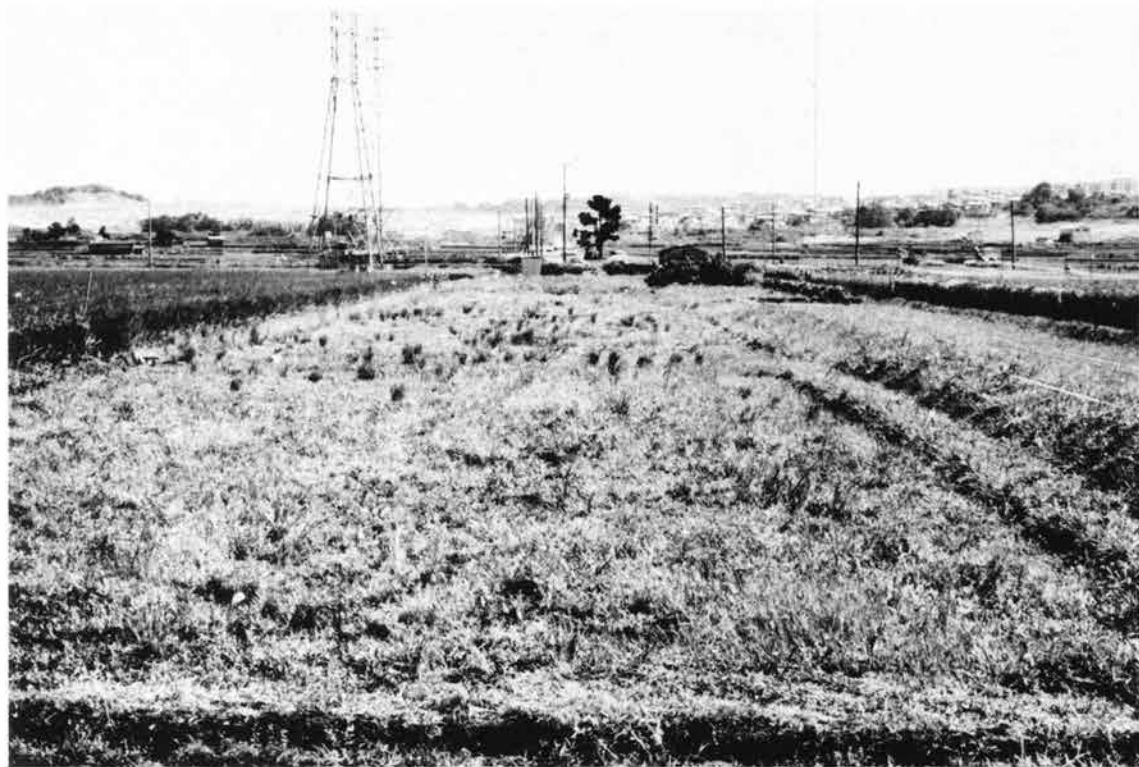


(1) 流路N R 24002 (北から)



(2) 流路N R 24002・溝S D 24003 (東から)





(1) 発掘前の調査地全景（北から）



(2) 調査地より奈良若草山を望む（北西から）



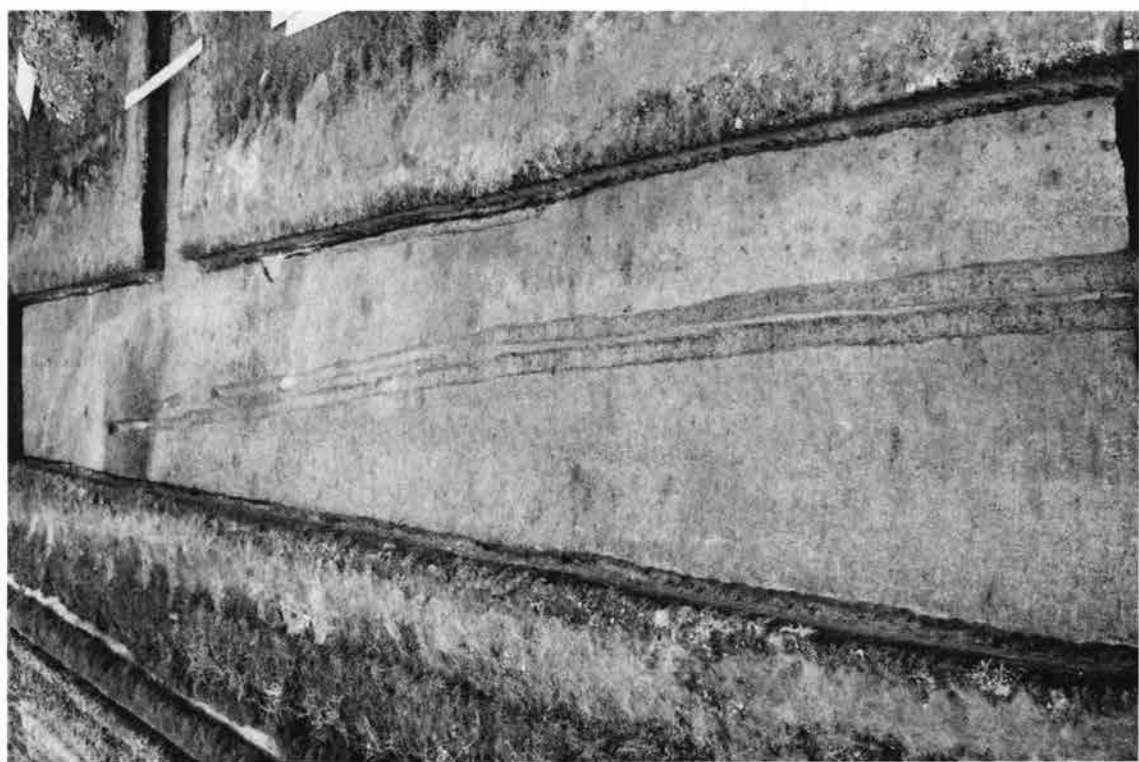
(2) 第2調査区完掘状況(南から)



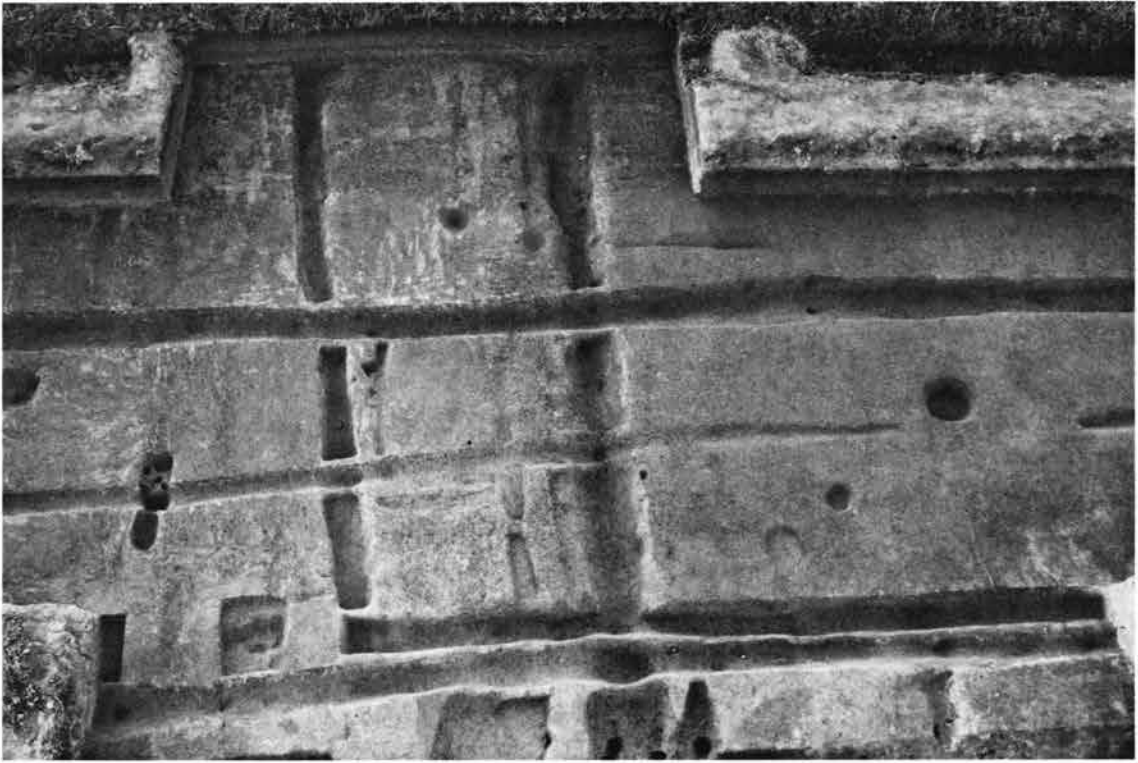
(1) 第1調査区完掘状況(北から)



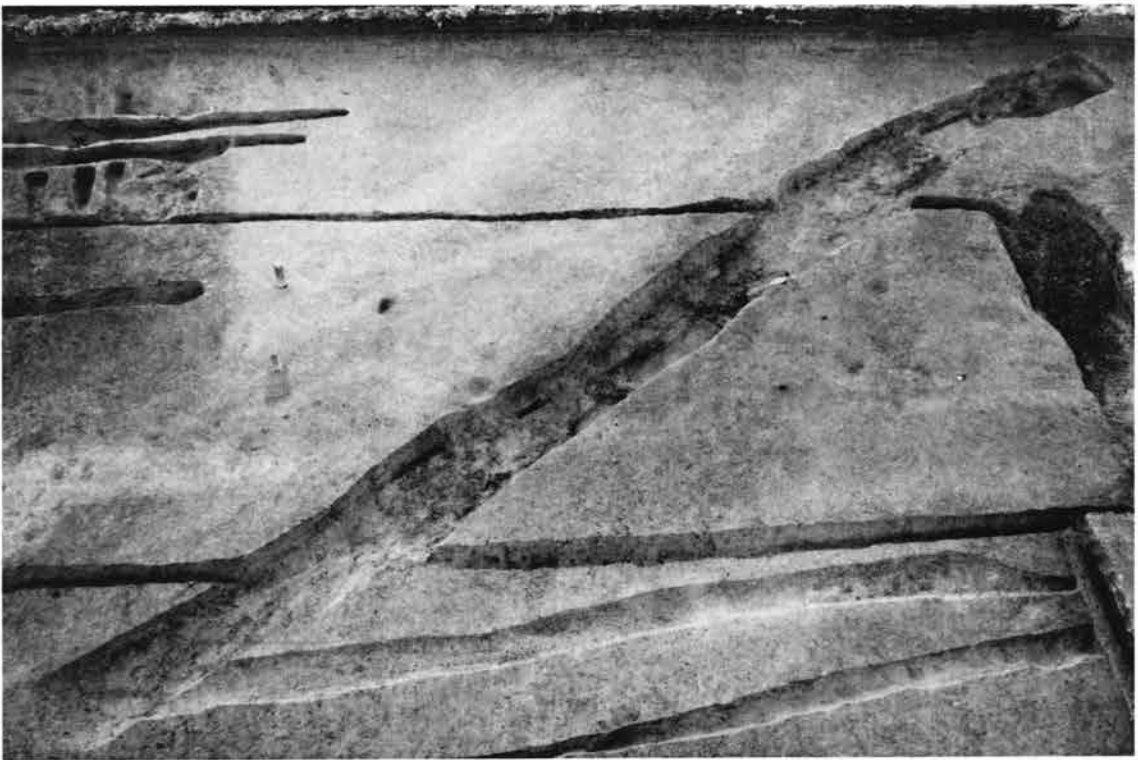
(2) 第4調査区完掘状況(南から)



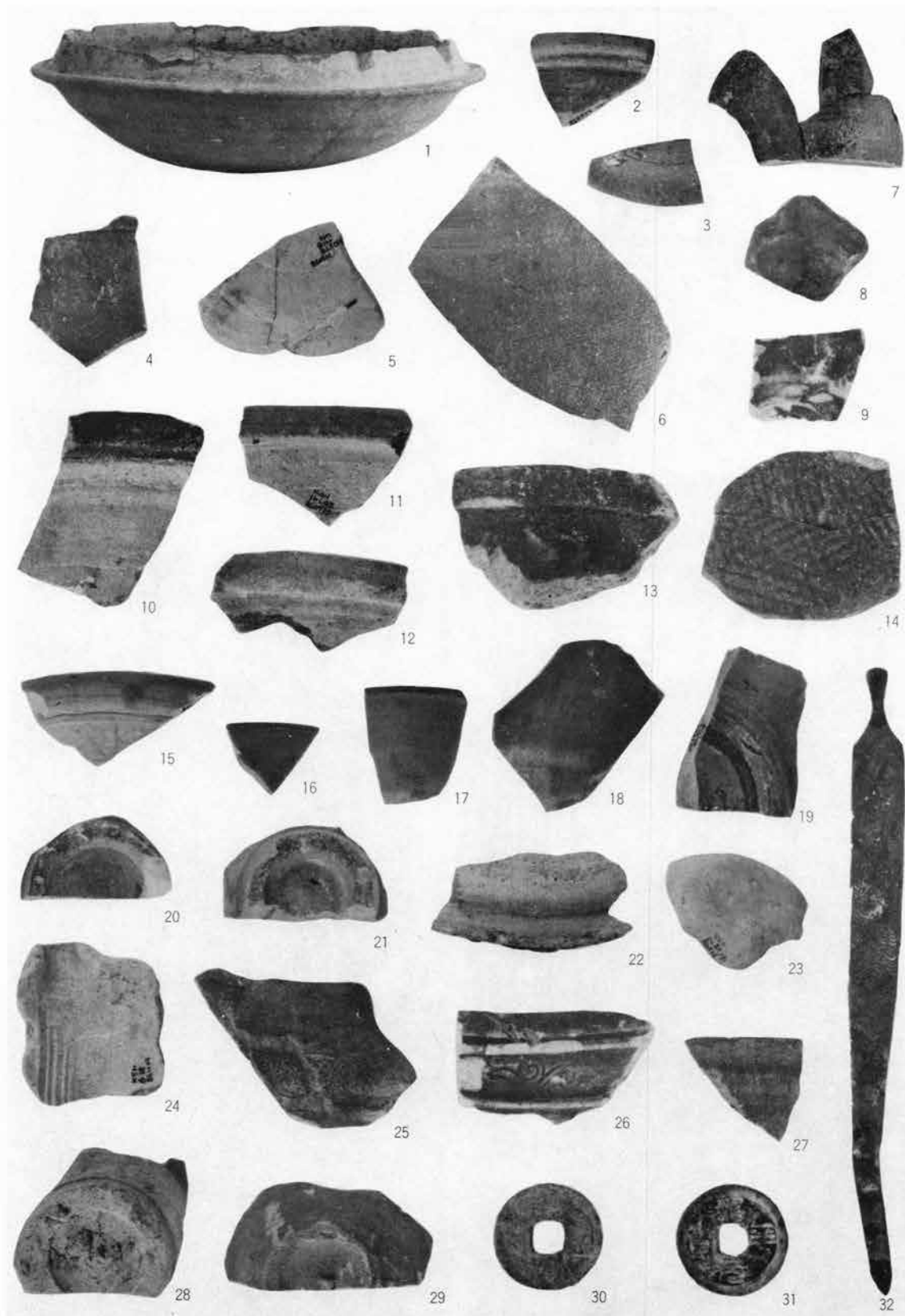
(1) 第3調査区完掘状況(南から)



(1) 第4調査区S D18・19検出状況(東から)



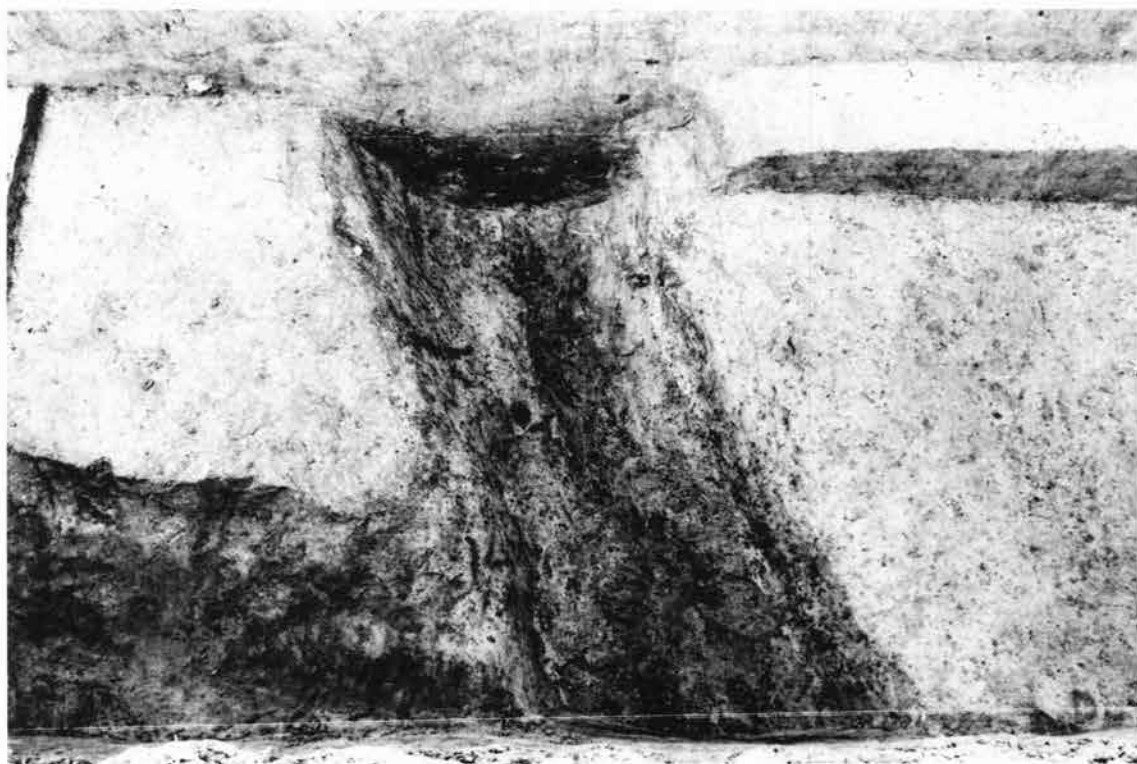
(2) 第3調査区各溝状遺構検出状況(東から)



各種出土遺物



(1) B・Cトレンチ全体 (西から)



(2) Bトレンチ S D06 (南から)



(1) Aトレンチ S D01 (東から)



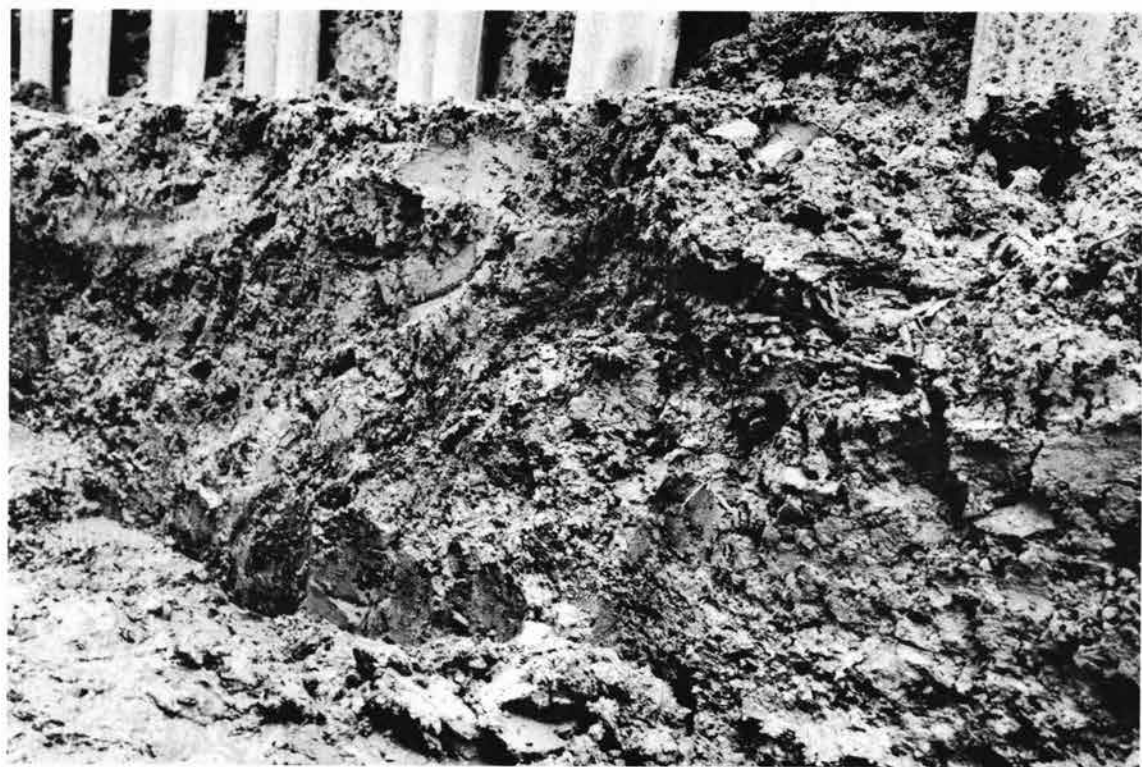
(2) Aトレンチ S D01検出状況 (北から)



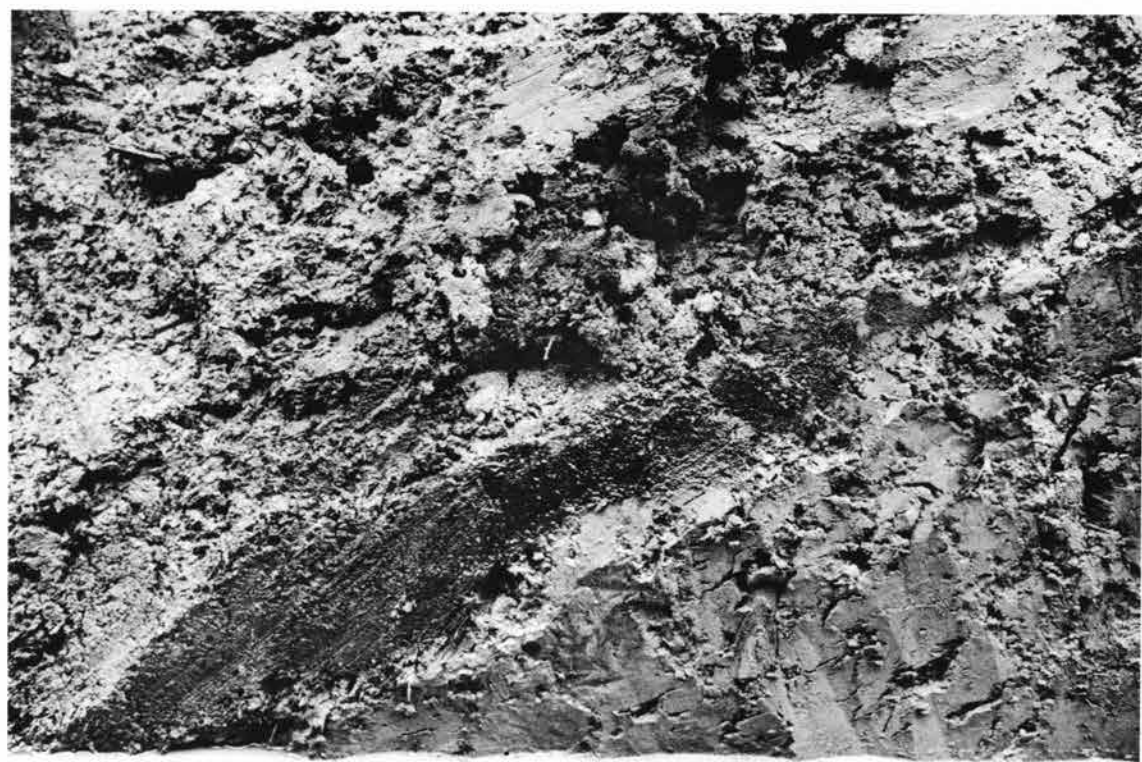
(1) 調査地遠景 (南西から)



(2) トレンチ掘削状況 (南から)



(1) 落ち込み中央部東壁断面



(2) 落ち込み南側東壁断面



出土遺物 (数字は実測図番号と一致)

京都府遺跡調査概報 第23冊

昭和62年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3

TEL (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

TEL (075)441-3155 (代)